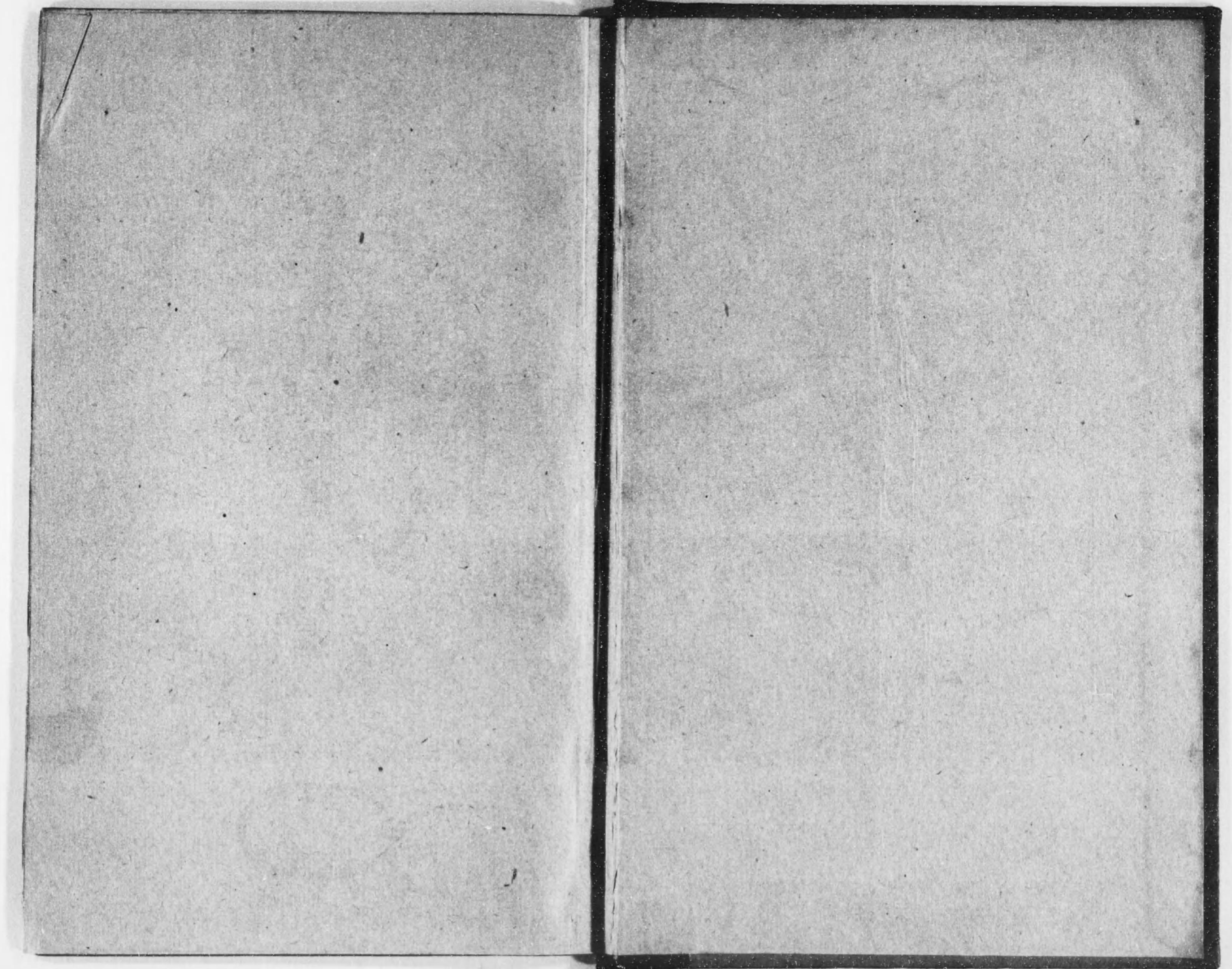


507
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





507-3



俗通

内外廢物利用の智識

文部省認定

貴族院議員 男爵 伊藤文吉序
文部省社會教育課長 乘杉嘉壽序
東京毎日新聞記者 深海豊二著

世帯の會發行

大正
11. 6. 2
内交

大正
11. 6. 23
内交

序

世帯の會が消費經濟の改善を期するため組織せられ、是に關する調査研究、實際運動をなしつゝある事は、既に世人の均しく認むる處であらう。這般同會が、一般家庭の廢物利用に關する調査研究をなさんとするの折柄、偶東京毎日新聞記者深海豊二君、夙に廢物の産業的利用に心を致し、過去數年間に亘りて個人的に調査し來たつたを好機とし、その調査を依頼したところ今や調査の完了を見、之を公表するに際し、余にその序文を求められしを以て、聊か卑見を述べて見たい。

廢物利用てふ言葉を聞く事久しきも、多くはその精神を誤

り解し、家庭的、娯樂的利用に流るものゝみであつて、深海君の言ふが如き、工業原料としての利用價値を、調査研究したるものを未だ見ぬのである、家庭的に廢物利用をすることは、一面經濟的の如く見えるが、此を大局より觀る時は、貴重なる産業原料の放棄に類し、國家經濟の上に、經濟的價値を見出し得ない場合が尠からぬのである。

工業立國論の喧傳せらるゝに當り、産業の工場化、機械化は是に隨伴せるにも不拘、ひとり廢物の『工業的利用』を閉却するは、國民經濟生活の上に重大なる影響を齎すものである。工業原料の廉價供給は、生産費の輕減となり、延いて一般消費者は物資の低廉なる供給を得る利益を受けるのみならず、貿易

二

振興の上にも非常な關係を持つのである。

如上の意味に於て、本調査が社會的に甚だ有意義であると同時に、世帯の會が此を一書として刊行する事は、現時の産業界に一光明を放つに似て又消費經濟智識普及の上に、將亦國民教育の上に、好資料として、必ずや裨益する處多きを信じて疑はぬのである。

聊か所感を叙して序に代ふ。

大正十一年六月

貴族院議員

男爵 伊藤

藤

文

吉

三

序

近頃我國民生活の改善といふことが大分世間の問題になつて來たことは誠に喜ぶべきことである。元來改善といふ語は一時的の變改を意味するものにあらず、不斷の進歩向上を意味するものである點に於て、英語の *mellioration* といふ語はよくその意を表はしてゐると思ふ。

由來生活改善といふことには、常に新らしき生活様式を發見し、以て舊き生活を更新して行く一面と、現在の生活そのものゝ中から、時と力と財との浪費を節約して、なるべく餘裕を生ぜしめんとする一面とがある。而してこの兩面がよく協

調並進しなくては、眞の生活改善は望まれぬ。然るに世には
動もすれば、生活の新様式を高調して之が節約利用の方面を
忘れんとする傾のあるのを、余は平素甚だ遺憾としてゐたの
である。

頃者東京毎日新聞記者深海豊二君その著『通俗内外廢物利
用の智識』を携へ來つて余に序を求む。試みに之を通讀する
に、その説く所悉く系統的に又科學的なるに敬服した。從來
學校特に女學校などでも、家事科裁縫科等に於てこの廢物利
用といふことが、稍々丁寧に取扱はれてはゐるが、その方法が
單なる時々と思付きに過ぎなかつたり、或は在來の方法を習
慣的に繰返すといふ有様で、甚だ幼稚非科學的のものである。

六

本書はかゝる方面の教育に従事する人々に取つて有力な參
考資料なるのみならず、吾人の如く常に社會教育の立場から、
生活改善を主張するものにおいて、一般社會に對する好適
な社會教育資料であると思ふので、敢て一言序して之を世に
薦むる所以である。

大正十一年六月

文部省社會教育課長 乘 杉 嘉 壽

七

自序

人類の生活は日一日と複雑の度を加へてゐる。生活難の聲は到る處に聞く。にも拘らず我々日本人の家庭生活は、不經濟の極に徹して、而もそれを改める事の甚だ速かでないものがある。それは畢竟經濟智識の乏しきに因ると思ふ。通俗なる經濟智識普及の一助として、私は世に廢物利用を推奨する。去りながら廢物利用の意味を極めて消極的に解してゐる者が多い。それは結局利用に非ずして惡用に外ならぬ。

私は先年雜誌『工業』の經營當時、産業原料として、廢物を利用する事に於て、初めて廢物利用と云ふものゝ精神が徹底するものであると信じて、此が調査を思ひ立つたのは今より八年の以前であつた。其後私個人の身邊に幾多の變化があつた。ために、調査未了の儘、徒らに日は流れて來たのであつたが、偶昨秋、農商務省後援の下に、世帯の會の設立せらるゝに當つて、伊藤男爵より再調査を命ぜられ、茲に調査を完了するに至つたのである。

私は本書の叙述に際して、一面産業經濟の一助に、他面廢物利用の名に於て、經濟智識普及

の一端に資せん希望から、極めて通俗平易に、小學校、女學校、師範學校等の教育資料の一部にする意味に重きを置き、作業工程等に對する餘りに専門的の説明は、此を省略してその概念を與ふるの程度に止めた事をお断りして置く。

今や印刷成りて上梓せらるゝに先立つて、本調査に多大なる御援助と督勵を辱ふしたる、

貴族院議員

男爵

伊藤文吉氏

鈴木商店東京支配人

長崎英造氏

の兩氏を初め、外國に於ける利用に關し、御多忙の折柄にも不拘、調査の方針、材料の供給並に本書の校閲を賜つたる、

農商務省工場監督官

農學士 色川三男氏

同上

工學士 高木源之助氏

同上

丸山善樹氏

同上

醫學士 古瀬安俊氏

同上

工學士 佐藤釜太郎氏

諸氏、又本書の教育資料としての價値を認められ、特に長文の序を寄せられたる、

文部省社會教育課長

法學士 乘杉嘉壽氏

及び内地に於ける廢物の處理並に利用に對し、調査に便宜を與へられ、且つ指導を吝れなかつたる、

中央屑物市場株式會社重役

今村藤一氏

屑物問屋〇八商店主

勝川松次郎氏

の數氏に對して、私は厚く感謝の意を表すると共に、本書の卷頭に此を記して、永遠に記念としたいと思ふのである。

一言以て序文とする。

大正十一年六月

東京毎日新聞編輯局にて

著者 深海豊二識

通俗 内外廢物利用の智識——目次——

第一章 内地に於ける廢物利用……………一

第一節 緒言……………一

第二節 家庭の廢物は何處へ行く？……………三

第三節 廢物の分類……………九

第二章 紙類廢物……………二〇

第一節 雜誌國定判込物……………二〇

第二節 國定教本表紙付及表紙無……………二七

第三節 雜誌本表紙付……………二九

第四節 簿記帳洋紙中味……………三〇

第五節	フールス洋紙	三一
第六節	古はがき	三一
第七節	白模造紙切	三六
第八節	上質並に更質洋紙切	三九
第九節	生紙白截上	三九
第十節	改良半紙白切上品	四一
第十一節	機械塵白切	四三
第十二節	帳屋並に傘屋切上品	四四
第十三節	生紙帳潰し	四四
第十四節	改良紙の反古潰し	四五
第十五節	コツピー反古	四五
第十六節	種紙	四六
第十七節	官報	四六

第十八節	古新聞紙	四八
第十九節	新截ボール	五一
第二十節	投紙屑	五二
第二十一節	細川長帳	五六
第二十二節	細川の袋帳	五八
第二十三節	其他の帳簿	六一
第二十四節	役所物綴込帳	六三
第二十五節	電車の古切符	六七
第二十六節	機械製紙の方法	六八
第二十七節	原料と製紙經濟	六九
第三章 檻樓其他の廢物		
第一節	甲込本調	七二

第二節	乙込本調	七六
第三節	白一枚	七九
第四節	黒一枚	八三
第五節	器械截新白	八九
第六節	淺黄立屑	九二
第七節	古朱子屑	九六
第八節	赤檻襖	九八
第九節	上麻ボロ	一〇〇
第十節	二番麻	一〇四
第十一節	藍檻襖	一〇七
第十二節	新立紺ボロ	一一二
第十三節	麻獅網	一一三
第十四節	麻網	一一四

第十五節	綿網	一一五
第十六節	藍ヌキボロ	一一五
第十七節	丸足袋	一一六
第十八節	裏毛メリヤス	一一八
第十九節	繼巾	一二二
第二十節	紺巾	一二四
第二十一節	色金巾	一二六
第二十二節	白金巾	一二七
第二十三節	ネル巾	一二八
第二十四節	手拭	一二九
第二十五節	上ドシ	一三二
第二十六節	地糸屑	一四〇
第二十七節	白糸屑	一四二

第二十八節	糊付源平糸	一四七
第二十九節	糊なし上等源平糸	一四八
第三十節	新朱子屑	一五〇
第三十一節	込赤市中ボロ	一五二
第三十二節	新白メリヤス	一五四
第三十三節	上晒メリヤス屑	一五五
第三十四節	古棒ネル	一五六
第三十五節	新棒ネル	一五九
第三十六節	モスリン	一六〇
第三十七節	編毛糸	一六一
第三十八節	純セル糸	一六七
第三十九節	薄セル	一六八
第四十節	厚セル	一七三

第四十一節	古セル	一七四
第四十二節	紺解セル	一七五
第四十三節	新ラシヤ屑	一七六
第四十四節	大ラシヤ	一七七
第四十五節	本ネル	一八一
第四十六節	服セル	一八二
第四十七節	紡績毛布	一八二
第四十八節	古毛布	一八三
第四十九節	婦人の脱毛	一八五

第四章 塵芥の利用……………一九七

第一節	市役所としての處理	一九七
第二節	金屬製品の屑	二〇六

第三節	瀬戸物の破片	二〇八
第四節	空堀並に硝子の破片	二一四
第五節	護謨製品の屑	二二〇
第六節	革製品の屑	二二二
第七節	古下駄	二二三
第八節	火鉢の灰	二二七
第九節	煤 烟	二二八

第五章 外國に於ける廢物利用

第一節	緒 言	二三一
第二節	都市の廢物	二三二
第三節	硝子の屑	二三八
第四節	陶磁器の破片	二四〇

第五節	石板屑	二四三
第六節	雲母の廢物利用	二四五
第七節	護謨屑の利用	二四八
第八節	琥珀屑の利用	二五二
第九節	製本屋の紙屑	二五五
第十節	コルクの屑	二五七
第十一節	木材屑	二五九
第十二節	襪褌の利用	二六六
第十三節	羊毛織物の襪褌	二六八
第十四節	羊の骨又は血から黄血塩の製造	二七三
第十五節	絹糸屑の利用	二七五
第十六節	綿糸の屑	二七八
第十七節	織物工場の廢液の利用	二八〇

第十八節 屠獸所の廢物利用……………二八二

第十九節 鞣革工場の廢物……………二九三

第二十節 革屑……………二九七

第二十一節 毛皮及び羽毛の屑……………二九九

第二十二節 角類の廢物……………三〇四

第二十三節 魚の鱗……………三〇六

第二十四節 廢物から油の採取……………三一九

第二十五節 鋳力屑から錫の回收……………三二一

第二十六節 果實の利用……………三二六

第六章 廢物處理の改善に就て……………三三六

第一節 廢物利用精神の誤解……………三三六

第二節 最後の一物まで財貨化せ……………三三八

第三節 廢物利用思想の普及方法……………三四〇

第四節 紙類に對する處理法の改善……………三四三

第五節 襪褌其他に對する處理法の改善……………三四五

第六節 塵芥箱の改良並に處理法の改善……………三四七

第七節 集收法並に供給機關の改善……………三五〇

第八節 塵芥の處分に就て……………三五五

第九節 取扱上の衛生的考察……………三五六

通俗 内外廢物利用の智識

深海豊二著

第一章 内地に於ける廢物利用

第一節 緒言

人間の生活に必要な所の品物は皆一度は必ず廢物となるのである。廢物と云つても數は極めて多いが、これと同様にまたその廢物の程度をそれ異にして居るものである。一例を擧げてみれば、紙屑の如きは立派な廢物である。又机やテーブルの脚の折れたものも廢物であるが、これは修繕に依つて再び使用に堪へる、廢物とは我々素人が家庭的に修繕し得ない程度に物の破損したるものを指して言ひたい。嘗て或る所で破損した團扇に紙を貼り、更にその柄の

方に一寸位の高さにボール紙の山を造つて、塵埃取りに造つた物を拜見した事があるが、私は
廢物利用の精神を穿き違へたものだと思つた。その破損した團扇は、新らしく買つても十五六
錢のものである。而も破損するまでには、優に十五六錢と云ふ値段に對するだけの使用に堪へ
て來たものと考へられる。斯くして廢物となつたものを利用するためには、團扇に紙を貼り、ボ
ール紙の山を造ると云ふ手数を掛け、團扇が變じて塵取となつたのである。けれどもそれまで
に費された時間と、諸材料、勿論その材料も廢物であつたかも知れぬが——斯うした加工時間
を金に見積り、廢物とは云ひ、諸材料も金に見積つた時、出來上つた塵埃取りは、經費をつか
つた以上の價値のあるものとなつたであらうか。塵埃取りを荒物屋で新らしく買つた處で、六
七錢で買へるものだ。こんなことをする間に状態を一時も貼れば、その内職の賃銀は、二錢
なり三錢なりとなる、その上に糊とかボール紙とかの費用を假りに一錢と見ると、優に三錢以
上四錢の經費がかかると同様である。されば廢物には經濟常識が必要である。即ち原料とか、
勞力とかを加算せねばならぬのは言ふ迄もない、斯うした廢物利用の精神を誤つて、却つて事
實上に損をしてゐる場合が世の中には幾多あるか分らぬ。

由來廢物利用と云ふ言葉は消極的な意味を含んでゐるやうに思はれてゐるが、私の御話しや
うとしてゐる事は、積極的の意味の利用である。即ち産業的に利用しやうと云ふのである。姑息
な家庭手工利用から進んで、機械的、産業的に利用する。つまり工業原料として廢物の用途、
價値を記載してみやうと思ふのである。家庭の廢物と云ふと、所謂家庭と云ふもの、みの廢物
のやうに思はれる嫌ひがあるが、實は家庭を中心としての廢物であつて、それに附隨して、銀
行會社、又は大商店等から出る廢物も、茲に云ふ廢物中に含まれる事を御承知を願ふ。

第二節 家庭の廢物は何處へ行く？

家庭の廢物の種類は數多くある。併し廢物として家庭で處理される現在を見れば、先づ次の
方法に依つてゐる。

- 一、紙屑籠の中に投ぜられるもの
- 二、塵芥箱の中に投ぜられるもの
- 三、廢物として他の處に處理されてゐるもの

と三つに區分される。第一のものは紙屑を主として、是に關聯した程度のものしか投げ入れられないが、第二の方は臺所の廢物を主として、多く塵埃で家庭内部から出る所謂邪魔になる物が投げ込まれる。第三のものは家庭としては廢物であつても、前二者に比較する時には、幾分か高等なもので、襦袢屑とか古足袋、空壇と云つたものである。聞く處に依れば、獨逸あたりでは各家庭で廢物を處理する上に、可成り利用先の方面の事までも考へて居るとの事だ。何んでも直ちに利用の出来るものと、それから相當の方法を講じたる後でなければ利用の出来ないものとを、各家庭でそれ／＼に區分してゐると云ふ話である。我國も一歩進んでそれ以上に廢物に對する尊重の念がなければならぬと思ふが、現在の我國には、家庭の廢物が如何に利用されて、如何様に立派な製品として、相當の價値を以て現はれて來てゐるかをよく知らない、知らないために、貴重な財寶を廢物として、所謂廢物に取扱ふて、無價値なものに考へるのであらう。

先づ家庭に於て粗雑に處理された廢物が如何にして何處へ持ち運ばれて行くかといふに、市内の何處にも見受ける處の屑屋さんと稱する、大きな目籠を肩に腰へ棒量を差した人の手に賣り渡されるのと、今一つには見るからに哀れを催すやうな服装をした男、時には赤子を背負ふた女が、手軽な目籠を肩に掛け、或は手に提げて、竹製の長い箸で、所謂ゴミ溜箱の中に頭を入れて金目のものを拾つてゐる事は、讀者諸氏のよく御承知の事と思はれる。更に今一つは「ゴミ屋さん」と云ふ、各區役所の衛生係の支配を受けて、一ヶ月に二回乃至三回、箱のついた大入車で塵芥を持つて行く。此三つの方法に依つて各家庭の廢物は、何處へか持ち去られて行くのだ。

處で現在俗に言ふ「屑屋さん」なるものが、東京市内に約一萬人から居る、而も此一萬人の屑屋さんなるものが、今日の如き物價の高い時代に、曲りなりに（甚だ失禮な言葉であるが）生活して行くだけの、廢物に依る利益があるのを見ても、如何に家庭で顧みられない廢物でも、それは貴重な財寶であると云ふ事が推察し得られやう。それから紙屑拾ひと云ふものを職業としてゐる人達の數は残念ながら御話する事は出来ない、何故と云ふに此紙屑拾ひの方は何れも無鑑札で、勝手に行はれる職業であるだけに、その人數を知る何等の據る處がないからである。又「ゴミ屋さん」の方は、各區毎に雇はれてゐるのであつて、是等は後段に於て説明する事

として唯今は持ち運ばれる徑路についてのみに止めて置きたい。

五厘一錢の屑物を、都の小路から小路と「屑えー」の呼聲で買ひ集めてゐる人が一萬人餘居るが、その上に屑物營業人と云ふ、所謂「屑屋さん」から、又買ひをする家が、東京隣接の府下、即ち場末と云はれてゐる日暮里、三河島、千住、大崎等に三百五十軒餘からある。此前に本所の先なる砂村に若干あつたが、只今では何れも日暮里三河島に移轉して居つて、その影を認めないやうになつた。尤も大正十年の秋も深くなつてから、本所の林町邊に若干出來て、何か自由屑物市場とか云ふものを、少規模に組織しやうとして居ると云ふ事が、一寸傳はつたが、その後組織されたか什ふか、調査の途のないために遺憾ながら茲では御話が出来ない。

屑屋さんの手から又買ひをした屑物營業人なる人は、何處へそれを持つて行くであらうか、府下日暮里、三河島に發達してゐる、屑物問屋へ持込んで行く、是を買入所と言つて、八十六軒ある。その買入所では自分の家で消毒所のある處もあればないものもあるもので、それく消毒所へ廻はして消毒する。その消毒所は三河島、日暮里を中心にして、最も大きく營業してゐるものでは、中央屑物市場株式會社、東京屑物市場株式會社、千住消毒所、日東消毒所、關

東消毒所等がその重なるもので、その他は何れも個人でさゝやかな消毒所を持つてゐる位である。

その消毒は如何にして行はれてゐるかと云ふに、警視廳の認定したる設備に依つて、蒸汽消毒を行ふのであるが、

紙屑——攝氏百度以上三十分間

襪褌——同上四十五分間

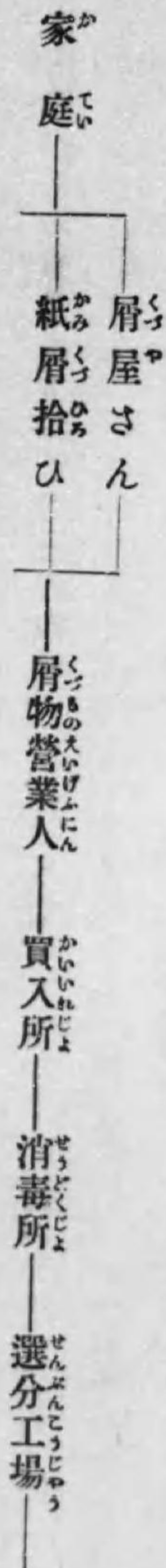
と云ふ消毒時間である。家庭の廢物は決して以上の二種類だけではないが、消毒の場合には、此の二種類に區別されて消毒さるゝ事となつて居る。

斯うして消毒の終つたものは、その會社直營の選分工場、又は此周圍に發達して、消毒所から來る總ての廢物の選分を専門の業として選分業者が七十軒餘ある。それは一口に紙屑と云つても、大きく區分して、西洋紙と和紙とがある如く、襪褌と云つても、木綿物もあれば、絹物もある。何れもその利用先が、その品物の性質に依つて異つて行くのであるから、その用途に應じて選り分けるのである。その選分された品目は實に莫大なものである。それは後段に

説明して行く。

屑物営業人の手許には、屑屋さん及び紙屑拾ひとゴミ屋さんが塵芥を集めて、其の中から、自分の餘裕として拾ひ出したものが、即ち此屑物営業人の處に運ばれるのである。紙屑拾ひの事を此業界では「バタ屋」と云つてゐる。そして其の品物の事を「バタ」と稱して居る、又ゴミ屋さんの手から廻つてくるものを「河岸バタ」と云つて居る。それはゴミ屋さんが、飯田橋、新橋、和泉橋等の際に、塵芥の集收所があつて、即ち河岸で拾ふ處から「河岸バタ」と云ふのである。バタとは此業界では、拾ふ事を云ふらしい。がその言葉の語源が何處から來たものか、何等調査する記録もなく、又その理由を説明してくれるものも、此業界には見當らないが儘に、單に業界の専門語として私は茲にお話しをするだけに止めて置かう。

扱て前記のやうにその家庭から出た廢物の持ち行かれる先を、順序追ふて説明して來たが左に圖面的に、其の徑路を示してみようならば、



塵芥屋さん

需要先へ——利用加工されて立派な製産品——市場に——一般家庭に——使用後廢物となる

斯くの如く圖解してみる時は、一度此の社會に有として現れたものは、或る程度までは有形で、形こそ變つて來るが、全然無となる迄には、廢物から立派な物品となり廢物となつて、殆んど走馬燈のやうに、人の知らぬ間に貴重な財寶として活用されて居るのである。是で大體に家庭から出る廢物が如何なる手續の下に、何處へ運ばれて、その果てが何うなつて行くかの徑路はお分りになつた事と思ふ。

第三節 廢物の分類

家庭から屑屋の手へ、屑屋から屑物営業人の手まで行く間は、單に屑物とか、襤褸とか極めて範圍の廣い名稱の下に取扱はれて居るが、屑物営業人の手から、買入所即ち問屋に運ばれる時には、一口に

紙屑（紙類一切を含む）
 襦袢（衣類から来たもの一切を含む）
 の二つ名稱になつて居るが、實際は次の如き大きな分類の下に賣買が行はれて居るのである。其處で最近一箇月間平均の、東京市内からのみ出る廢物の量と分類目を左に掲げるとしやう。

紙屑	三十萬貫
襦袢	十萬貫
古綿	十萬貫
古新聞	十萬貫
古雜誌	十萬貫
唐縮緬（モスを含む）	三千貫
落毛	三千貫
古帳簿（和紙のみ）	一萬貫

消毒所までは、紙屑襦袢の二の名稱で取扱はれて居るもの、事實には以上のやうに入種類に區別されてゐる而して消毒所から各選分工場に廻つて、利用先の如何に依つて分類されるのは、實に莫大の種類になる。左に少しく分類された名稱と、その問屋相場を掲げて御参考に供しやう。（左は大正十一年三月中の標準相場である）

紙類廢物

品目	標準相場
雜誌國定判物込品	一貫目
國定教本表紙付	十七錢
國定教本表紙無	二十五錢
雜記帳洋紙中味	二十錢
フールス洋紙	四十錢
古はかき	二十五錢
古はかき	二十三錢
白模造紙切	六十錢

上模造紙反古 一貫目
 並模造紙反古 同
 上質白洋紙切 同
 硬質厚洋紙切 同
 生紙白裁切上 同
 改良紙白切上 同
 同機械漉白切 同
 帳簿屋切 同
 傘屋切上品 同
 生紙帳潰し 同
 改良紙反古潰し 同
 コッピ―反古 同
 種紙 同

三十五錢―四十錢 二三
 三十錢
 四十錢
 二十五錢
 一圓七十錢
 一圓
 六十錢
 六十錢
 一圓五十錢
 二圓五十錢
 一圓二十錢
 一圓三十錢
 四十五錢

頭反古 同
 新聞屑 同
 洋紙屑手入品 同
 紙屑 同
 新裁ボール 同
 官報 同
 古新聞紙 同
 古帳反古紙 一貫目
 細川永帳 同
 細川袋帳 同
 西ノ内臺帳 同
 生美濃紙帳 同
 生半紙帳 同

三十錢―三十五錢
 十八錢
 十四錢
 九錢
 三錢
 五十五錢
 三十八錢
 六圓五十錢
 五圓九十錢
 六圓五十錢
 五圓五十錢
 三圓―四圓

改良紙半紙判	一貫目	二圓——二圓五十錢
改良純美濃	同	二圓五十錢——三圓
役所物綴込帳	同	一圓五十錢
抄漉改良紙帳	同	一圓五十錢
生紙古本表紙附	同	一圓五十錢——二圓
襪	其他	
甲込本調	一貫目	三十五錢
乙込本調	同	十五錢
白一枚物	同	四十錢
黒一枚物	同	四十五錢
機械截新白	同	五十錢
淺黄截屑	同	三十五錢
古朱子屑	同	十八錢

地方赤破布	同	十八錢
上麻ボロ	同	一圓五十錢
二番麻	同	十三錢
藍ボロ	同	四十錢
新紺立屑	同	二十八錢
麻鱒網	同	一圓六十錢
麻網	同	八十錢
綿網	同	二十錢
藍ヌキ	同	四十錢
丸足袋	同	十錢
裏毛白メリヤス	一貫目	五十五錢
繼巾	同	一圓二十錢

紺巾 一貫目
 色金巾 同
 白金巾 同
 ネル巾 同
 古手拭上 一本
 上ドシ 一本
 中ドシ 同
 下ドシ 同
 上晒メリヤス屑 一貫目
 上白メリヤス 同
 古棒ネル 同
 新棒ネル 同

九十錢
 八十五錢
 一圓二十錢
 八十錢
 二錢
 七錢
 二錢五厘
 一錢五厘
 四十五錢
 七十錢
 二十五錢
 三十錢

地絲屑 一貫目
 白絲屑 同
 新朱子屑 同
 市中込赤ボロ 同
 糊付源平絲 同
 糊なし上源平絲 同
 新白メリヤス 同
 上晒メリヤス 同
 古棒ネル 同
 新棒ネル 同
 モスリン 同
 編毛絲 同
 純セル絲 同

二十五錢
 一圓
 十八錢
 十七錢
 五十五錢
 六十五錢
 七十錢
 四十五錢
 二十五錢
 三十二錢
 二十五錢
 二十三錢
 二十七錢

薄セル	一貫目	一圓
厚セル	同	三十錢
古セル	同	十錢
解セル	同	九十錢
新ラシヤ	同	三十錢
大ラシヤ	同	五十錢
本ネル	同	六十錢
服セル	同	三十錢
紡績毛布	同	二十錢
古赤毛布	同	十五錢
婦人の脱毛	同	二十四圓

以上並べたるものは、多く我々の家庭から、應用の途なし位に考へられて、屑屋の手に廻つた、紙屑、襪襪、といふもの、大きな分類から小分類された名稱であり價格である、我々

素人が以上の名稱を見たのみでは、何を指したもののやらわからぬ。けれども、それ相應に利用の途が異つて居るからこそ、非常な手数をかけても分類して居るのである。而も分類された結果に於て、皆なその價值を異にして居る。

其處でお断りせねばならぬ事は、以上の名稱が果して適切な言葉であるか仕うかは、餘程研究した後でなければ批評は下し難い、多年來云慣された言葉によつて分類されて居る以上、私が説明する上にも、業界に使用されて居る分類のまゝを茲に御紹介して置く。

次に我々の家庭から廢物として出るものは、是だけではない、近い例を云へば、空壇の如きものもあれば、瀬戸物の破損品もあるし、下駄の古いのや、玩具の破損品もある譯だ、同じ玩具でも護謨製品もあれば、木竹製品もあるし、金屬製品もあると云ふ風に、それを大別する時には、實に植物性、動物性、礦物性の三種に區分される譯である。併し以上の例に引いた廢物は、塵芥箱から出るもの、中に於て説明される場合もあらうし、又全然獨立した廢物としてお話しする事にならうと思はれるから、今は前述の數點から用途、行先等に關する調査の報告を先きにする事とする。

5

第二章 紙類廢物

第一節 雜誌國定判物込品

雜誌國定判物込品——是だけの名稱を掲げたのではそれが何物を意味するのか、おそらく一般素人にはお分り悪い事と思ふ。是は雜誌やら、國定教科書やらの廢物を一纏めにしたる處の屑物業者間に通用しつゝある一種の専門的名詞である。

故に一度是が利用の場合に至れば、雜誌は雜誌、教科書は教科書と、その物の大小、種類に應じて分類される。先づその中から如何なるものが現はれるか、次の如きものである。

- 菊判大の雜誌
- 菊倍判大の雜誌
- 四六判大の雜誌
- 四六倍判大の雜誌
- 菊半截判大の雜誌

教科書中の中味だけのもの

表紙のついた教科書

フールスカップ

ザラ紙の雜記帳

簿記帳

等と云ふ風になる、併しながらその雜誌と言つても、それ〴〵紙質を異にする毎に、利用の途が變つて来る。

古雜誌の利用法——から説明してみるに、その多數は紙袋となるのであるが、その以前に、前に述べた雜誌の菊判とか四六判なるものに對する一通りの智識がなければ、一寸利用を説明しても分らぬ事と思ふ。

菊判——とは縦七寸三分、横五寸大の雜誌の大きさの事を言ふのであつて、婦人世界とか、又文藝俱樂部等は何れも、菊判大の雜誌と云ふのである。

菊倍判——とは、縦一尺、横七寸三分のものを言ふのである。例へば官報の大きさ等は何れ

も菊倍判である。

菊半截判——とは、縦五寸、横三寸五分、即ち菊判なるものを、横にして真二ツに割つた大きさを言ふのである、倍判はそれに反対で、菊判を横に二つ並べたもの、大きさはであると思へば好い。博文館の『寸鑑』『ポケット』等である。

四六判——とは、縦六寸で、横四寸のもので『講談雑誌』とか、『家庭雑誌』の大きさは何れも此寸法だ、此寸法は雑誌に使用されてゐるのは以上の二種位のもので多くは單行本の大きさである。

四六倍判——とは前記の四六判を横にしたものを、今一つ加へた大きさを謂ふのである。例へば『太陽』『面白俱樂部』等の大きさである。

是で今日世間で賣つてゐる雑誌の大きさの説明が終つたのであるが、何故に斯様な寸法にしたのかと云ふに、それは製紙會社から漉いて來る大きな紙、その紙の大きさが既に、菊判とか四六判と名稱がついて、それ／＼紙の大きさを異にして來るのである。で印刷所では、活版の組版に又、菊判、四六判と言つて、大きさをそれ／＼に組んでゐる。故に今假りに菊判の雑誌を

印刷する事として、製紙會社から紙を取る時には、菊判の紙と稱して取り寄せ、一枚の紙で菊判大のものを取る時には、十六枚に截斷されるし、又四六判となると、四六判と云ふ大きな紙を三十二枚に截斷する。故に印刷所ではそれ／＼両面印刷するから、菊判の場合には三十二頁となり、四六判では六十四頁分となるのである。

話が半分枝葉に亘つたが、是を知らずには次に説明する事が普通の人では腑に落ちぬ怖れがあると思ふ。

先づ菊判四六判の古雑誌、つまり中味だけで表紙や口繪を別にしたものは、その大多数は紙袋となる。吾々が駄菓子を買つても、又水菓子を小買にしても、それから雜穀屋で麥を買はふと、うどん粉を買はふと何れも紙袋を使用してゐる事は誰も知つてゐる。

それだけでは少しも興味はない、又今更に他人の説明を要する事もないのであるが、菊判ものを綴目さへ解いて、二つに袋を貼る時には、五合袋となる、又菊倍判のものになると一升袋となるし、四六判のものであるならば、三合袋となる。普通あり合せの紙で、一合とか、三合とか、五合と云ふ袋を貼るには、或る場合には大きなものとなり、或るものは小さな袋となると

云ふ風で、品物を入れてお客にやるのに、如何にも體裁が悪い、さりとて一合なり、三合、五合と云ふものを入れて、大きくもなく、小さくもない袋にするには、先づ袋を貼らうとする紙の寸法を豫め定めてからせねばならぬ。然るに前に言つた菊判、四六判となるとその手数を要せずに、その儘袋を貼ると、五合、一升、三合と云ふお誂ひの紙袋となるので、斯うした古雑誌の中味は、紙袋として利用されるもの、多い理由なのである。其處で古雑誌で紙袋を造る場合に何合入りの袋となるか又一貫目のものが、何枚の袋になるかその價格は什うかを、左に一覽表にしてお目にかける事とせやう。(左は大正十一年三月中の調査)

判名	合數	枚數(一貫目で)	千枚價格
菊倍判物	一升入	六百六十枚	一圓十錢位
同上半截	三升入	千三百枚	二十三錢位
普通菊判	五升入	千七百枚	六十錢位
菊判半截	二升入	三千四百枚	二十五錢位
四六倍判	五升入	千二百枚	六十錢位

普通四六判	三升入	二千四百枚	二十三錢位
同上半截	一升入	四千三百枚	十二錢位

此場合お断りして置かなければならぬ事は、大きなものを特に半截にして小さな袋を貼るのではない、紙の上とか下が破れてゐる物があるので、それを無駄にせぬために、どうした破れたものばかりを半截にして小さな袋としてゐるのである。それから大きな袋程高くて小さなもの程安いのは、鳥渡素人には變んに思はれるのであるが、大きな袋になると相當の經驗がないと、却々うまくな貼れない。然るに一合とか、三合の小袋なれば少しの經驗がなくても、七八歳の兒童でも貼り得るのである。故にその袋貼りの工賃の關係から、大袋が割合が高くて、小袋が安いと云ふ結果になつてゐるのである。

其他は製紙の原料となるのであるが、それとて一樣には言へない、その古雑誌の紙質が、所謂ザラ紙(新聞紙の如きザラ／＼した紙)であるか、滑らかばかりでなく、日光に晒して透いてみえるか、見えぬかに依つて、紙質の上下が分れるのである。透いてみえるやうな紙程好い、それから紙の肉の厚い薄いにもよるも、破れ易い紙と、破れ易くないものとの差別がある。是

は新しい紙の場合であるが、それが一度廢物となつて來ても、以前の紙質の善惡に依つて、一口に製紙原料と云つても、それ／＼の變化は致方ない。ザラ紙は何處まで利用されてもザラ紙である。上質のものはやはり上質のものとなるが、以前の紙質より漉き返へしの際には多少紙質の劣つて來る事は免れない。

それから洋紙の如何に紙質が好いからとて、日本紙に漉き返へす事は出來ない、日本紙の古いものを、洋紙の漉き返へしに使用すれば、出來上つた西洋紙は腰の強い紙となる、つまり弾力性に富んで、觸つた位で横にも縦にも裂けると云ふ、西洋紙特有が幾分緩和される事は明らかである。此古紙は、斯うした紙に漉き返されるのだ——と一品毎に説明して行き度いが、それは實際限がない、何故と云ふに西洋紙の種類ばかりでも何百、日本紙でも相當にある、それを一つ／＼素人の誰にでも分るやうにするには、到底文章の上には現はす事は不可能である。

よしや現はし得たとしても、現物がなければ想像もつかぬ。したなれば結局素人には譯の分らぬ複雑な説明に終つて、一向要領を得ないやうな事になるから、單に西洋紙は西洋紙となる、日本紙は日本紙となるの程度に留めて、漉き返へしの際には、以前の紙質より劣つて來る事だ

けを再言して置かう。

利用の方法としては、先づ前記の紙袋とそれから製紙原料としての利用が最大なもので、其他にも極めて部分的に利用されてゐる事は事實である、一例を示せば襖の中貼りとか、紙製玩具の芯等にもなつてゐるが、産業的の利用としては前記の二種類とみたら好い、その他は家庭的、手工的の利用である。

第二節 國定教本表紙付及表紙無

國定教本表紙付——とは表紙の付いた完全な國定教科書の意味であつて、分類の項に於てその價格を詳述したが、此教科書に限らず、雜誌でも表紙のあるものと、無いものとは、層屋の手に渡つてから價格が、素人考へと全然反對となる。吾々素人の考へには表紙でも付いてゐた方が、價格が好からうと思はれるのに、實際は正反對で、表紙のあると無いでは一貫目について五錢や十錢の値開きがある。表紙の無い方が何故に高いかと云ふに、利用する時に表紙があつては邪魔になる、ために態々表紙を取らなければならぬ、故に表紙を取り除く手数を要す

る處から、表紙付のものは値段が安いのである。

斯くの如く廢物を利用すると云ふ事は、能率から來たものであるから、表紙の取り外しまてが利用の際の能率を左右して、同時に價格に變化を呼ぶ事となるのだ。

利用の途はと云ふに、表紙は色つきのザラ紙の原料として製紙會社に行く。

中味は、チップ又は白洋紙の原料となるのであるが、此チップと云ふのは、専門家でない人には鳥渡何んの事か分らぬと思ふから、簡単に説明をしよう。一般の紡績會社、又はモスリン工場等で、撚り糸を造る時に、一臺の機械に數十本の糸巻管が必要である。以前は木管を使用したものであるが、最近には紙製の管を使用するやうになつた。此糸巻管の事をチップと云ふのであつて、チップの構造と言ふならば、長さ五寸餘の紙を丸めたるもので、もとの方が直徑三分、先の方が直徑一分と云ふ空洞の細長いものである。

紡績會社等では非常に多數使用するので、教科書の中味の大部分は此チップに廻つてゐるとみても差支ない位で、猶ほ古教科書だけでは需要に應じ切れぬので、他のものさへ使用するに至つてゐる、既に本所區の如く紡績工場やモスリン工場の多い區には、此廢物利用の紙製チップの製造を専門にやつてゐる工場さへある。

其他白洋紙の原料で、何れも漂白される事は勿論であるが、それは極めて少數であると見たら好い。又部分的に利用してゐる向きもあるが、多くは産業的と云ふよりは家内工業の原料としてあつて、工業原料として世の中に紹介する程の事もなく、且多數でもあるからそこまでは探究をせぬ。

第三節 雜記本表紙付

雜記帳の表紙付で、一口に雜記帳と云ふが、實は随分に種類がある。小學校の生徒等が、殆んど惡戯書同様に使用するザラ紙（粗惡な紙）製のものもあれば、又は専門學校あたりの生徒が、筆記用の紙質の好い雜記帳もある。屑屋の賣買に於ては混同されてゐるが、いざ利用の場合にはその雜記帳の紙質に應じて價值を異にしてゐるのである。

此場合はザラ紙のものに就いてのお話として、紙質の好いものは、次の項の簿記帳の處で利用のお話をした方が好いと思ふ。

先づ雑記帳の表紙は依然として、色つきのザラ紙に漉き返へされるし、中味は白ザラ紙に變化して現はれて来る、共に製紙原料として製紙會社へ送られるだけで、其他の利用方法は現在の處ではあまりないやうである。或は手工的に行はれてゐるかも知れないが、屑物問屋の手を経ては今日の處では利用の途は開拓されてゐない。

第四節 簿記帳洋紙中味

簿記帳竝に前記の雑記帳の紙質の好いもの、中味であるが、その多數はチップとなる。そして殘餘のものが、紙質の好い白洋紙原料として捌かれてゐる、けれどもあまりに紙質が好いために、教科書等のチップに比較する時には、稍や高價になる。がチップとして使用する場合には、紙面に圓滑性があるから、糸を巻いて置いても、その糸の迂りが滑らかに行く、のみならず教科書の中味に比して耐久力も若干あると云ふ事である。時に市場の紙價が高騰した際には、製紙會社は生産能率を高める關係上、原料の吸収に努力する、その結果チップとして利用するよりも、製紙原料として廻はした方が、利益の場合にはその方面に廻はるが、紙價が著し

く高價でない限りはチップとされる方が多い。

第五節 フォールス洋紙

是は前記の雜誌、教科書、雑記帳等の如く多數に出るものではない。併し前にも述べたやうに屑屋では顧客から買ひ受ける時には、所謂善惡混合であつて、安値で買つて来るが、扱て一度消毒されて、分類が終り、それらの用途に向ける時には、些細なものと雖、その品物の性質に依つて、その物特有の價値を認められるのであるから、一ケ年を通じて極めて少ない數量しきや現はれぬものでも、それ相應の利用途と、價格とを區別される事は仕方がない。利用先さと言へば、前項の簿記帳同様、チップと製紙原料である。

第六節 古はがき

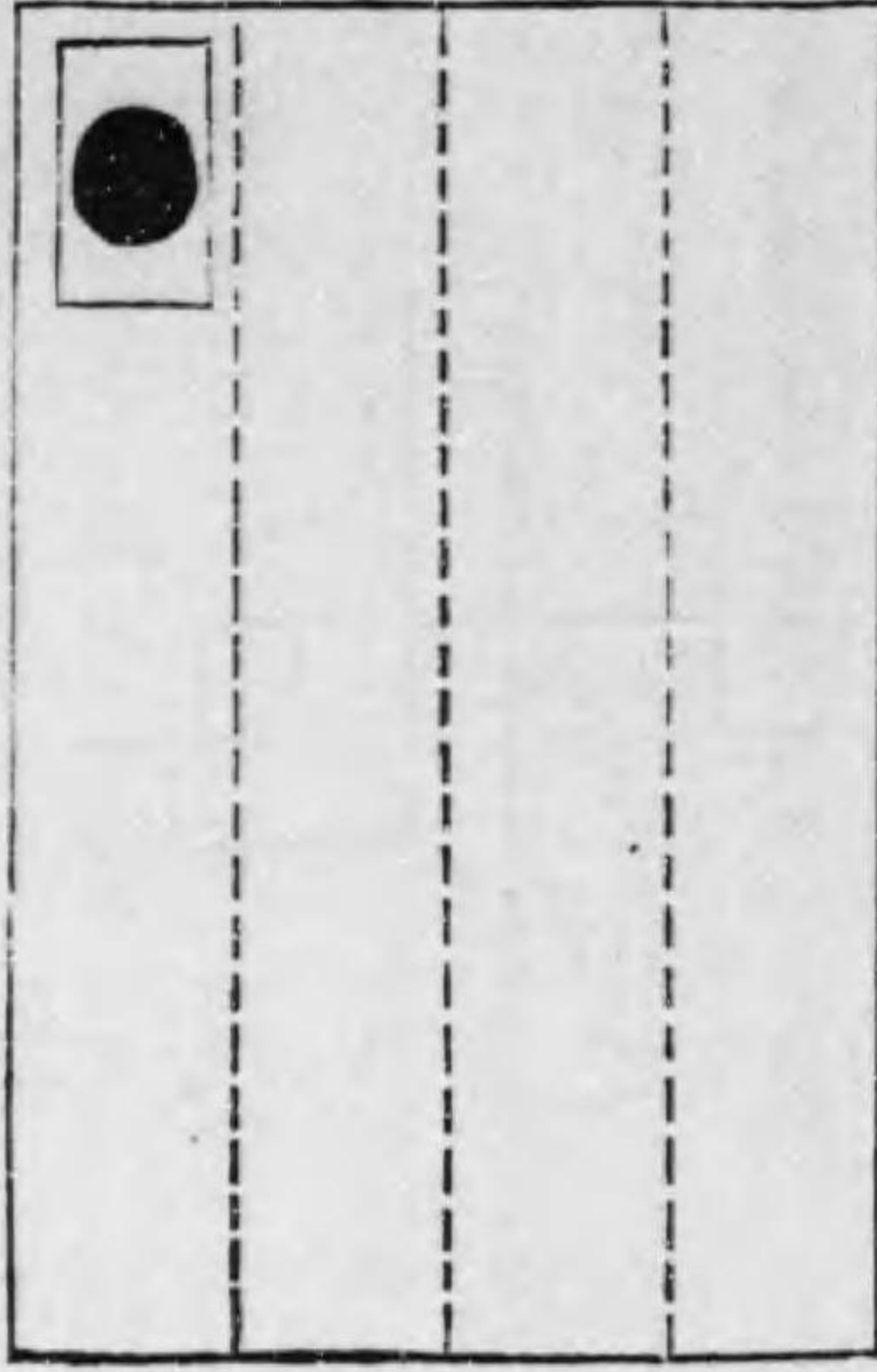
此廢物の數は實に莫大である筈だ、併し實際は素人の考へる程、屑屋の手に古はがきは渡つて居ない、それには二つの理由があると思ふ、一つは多くの人が信書保存と云ふ考へから、あ

まじり古はがきを屑屋の手に處分する事が尠ないのと、家庭的に利用されてゐる事の二つである
と見られやう。

て今利用と云ふものを見るに、産業的利用としては、製紙の原料となる以外にはない、が迪
へ家庭的でも、商品的に利用されてゐる事は可成りに多いやうである。私は本稿の巻頭に家
庭的利用は、眞の廢物利用でないと言つた、その言葉は所謂家庭的利用、即ち娛樂的利用の攻
撃であつた。併し同じ家庭的利用でも、それが産業的に行はれるならば、よしや手工利用であ
つても、私は此場合獎勵したいと思ふ。

現在私の知つてゐる範圍では、東北方面の雪國では、冬の農閑期に、農家の副業として、
夏座蒲團、土瓶敷等を編んで、それに澁とか、又は漆を塗つて、座蒲團一枚が五十錢から一圓
まで、土瓶敷が十錢から二十錢と云ふ、その大きさと澁或は漆に依つて値を異にして賣買され
てゐる、今東北方面で手工的に利用してゐる夏座蒲團の編方を御参考になつて圖解するとしや
う。

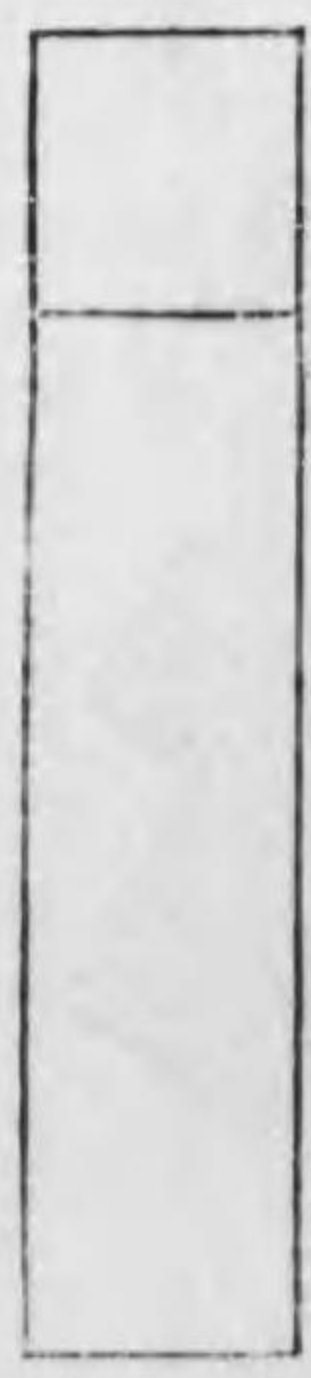
圖一第



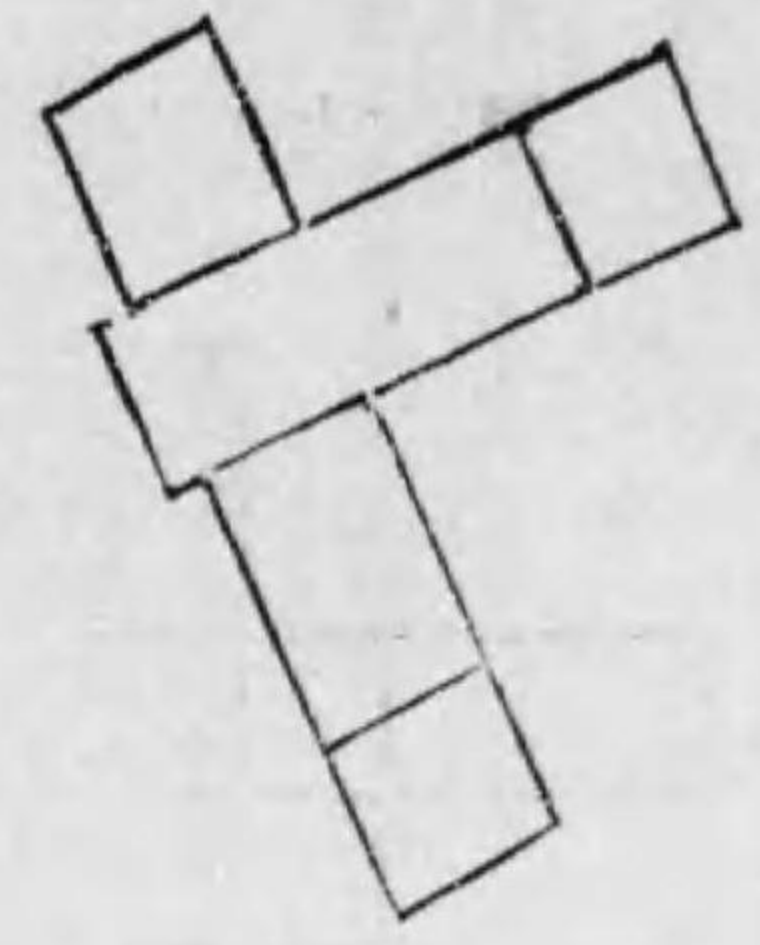
圖二第



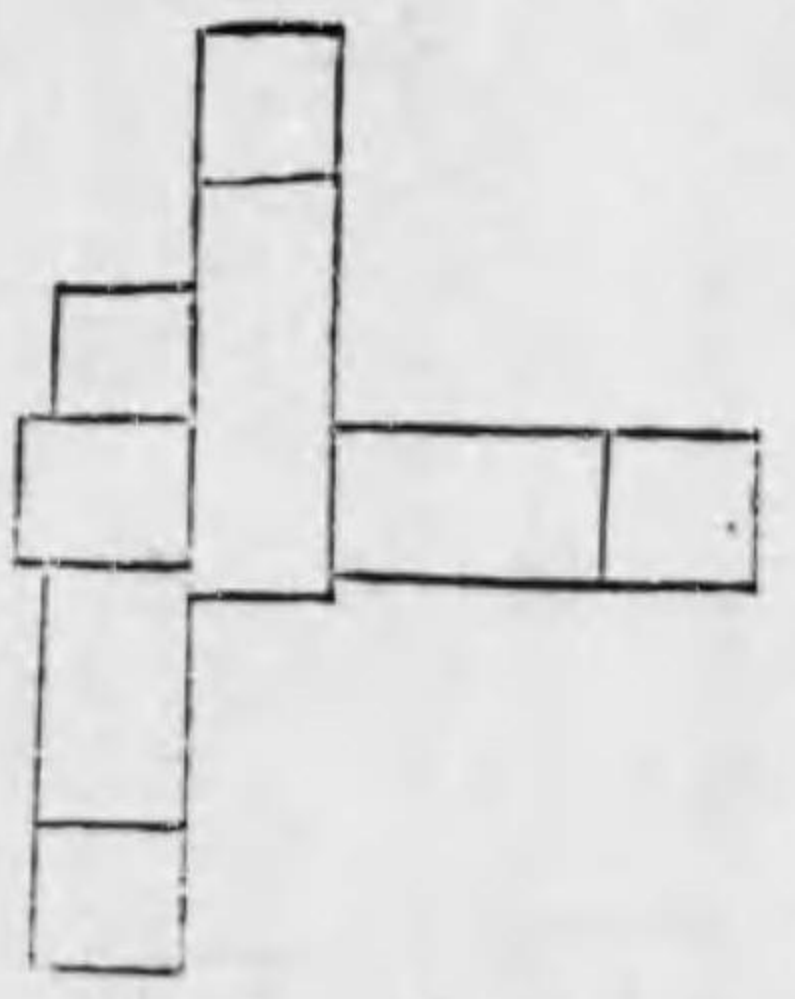
圖三第



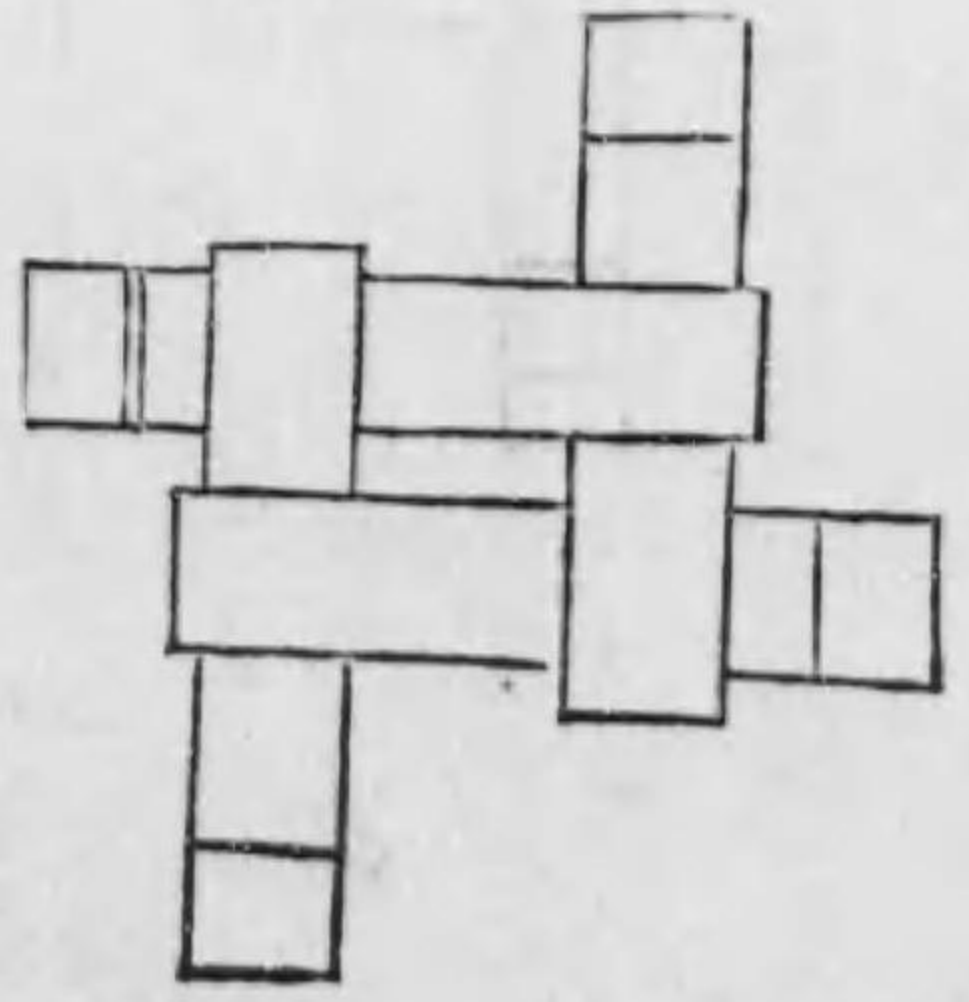
圖四第



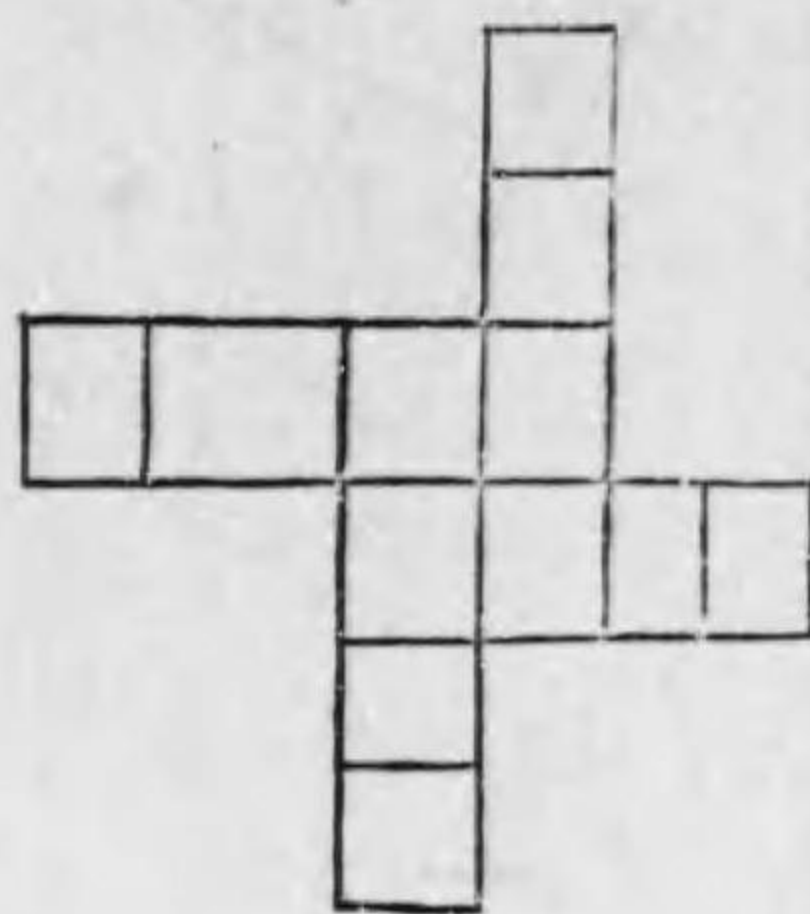
圖五第



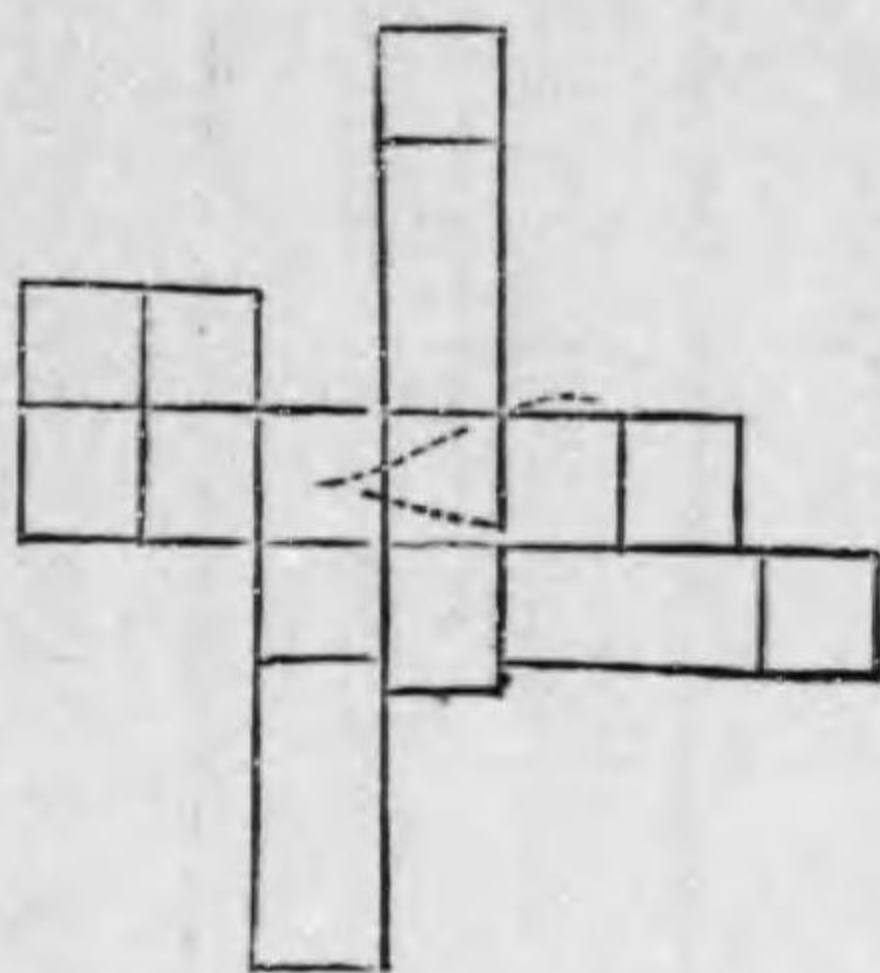
圖六第



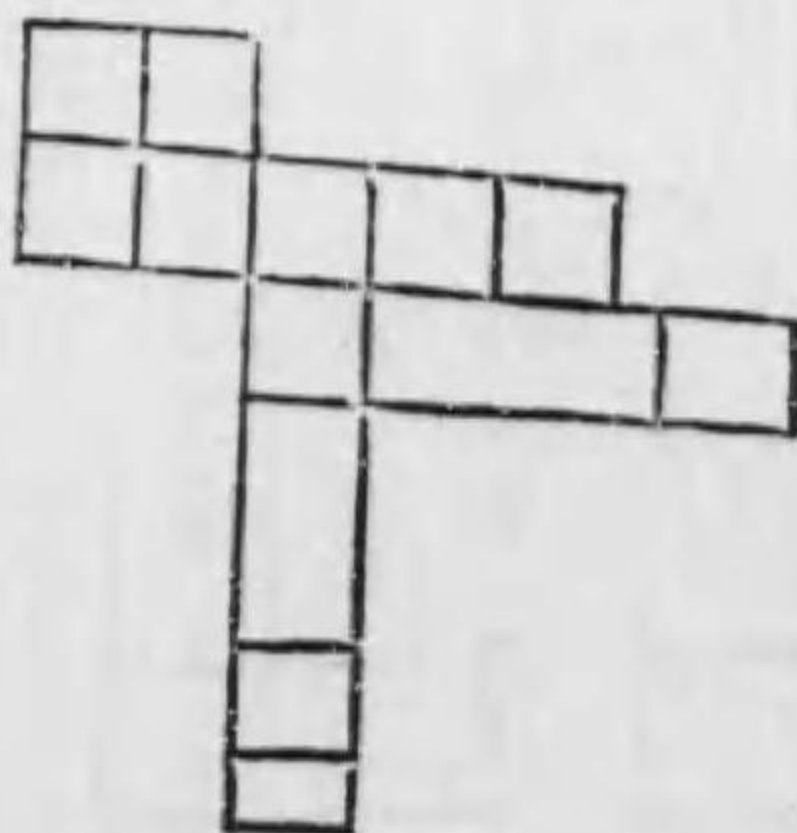
圖七第



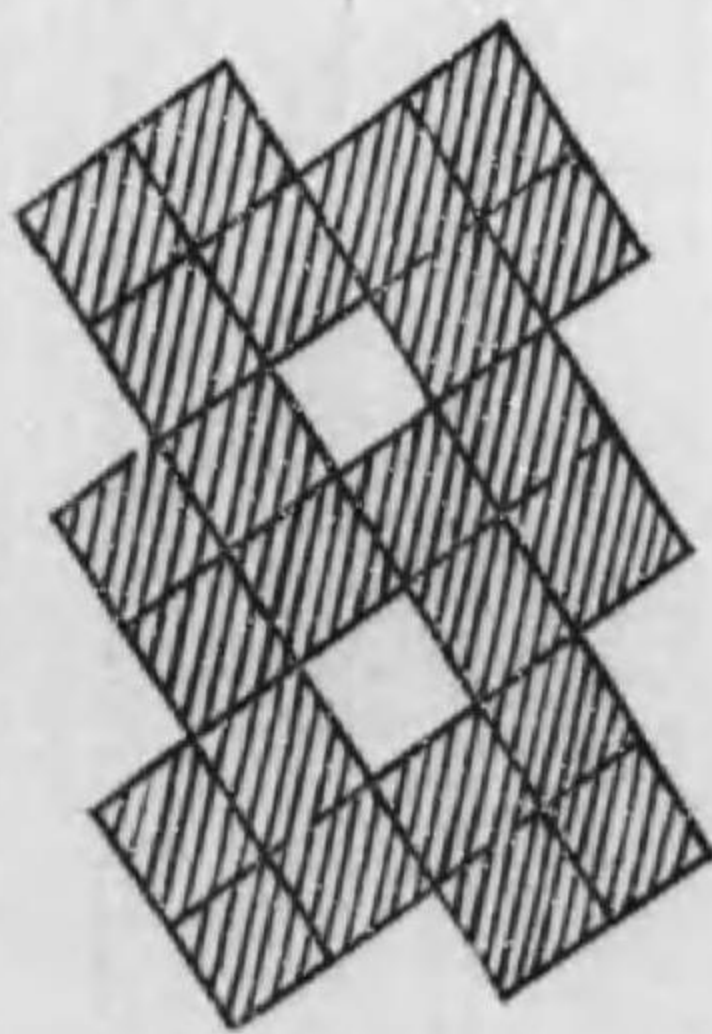
圖九第



圖八第



圖十第



先づ第一圖の如く葉書を縦四つに截斷する。そして四枚の細長いものが出来たら、第二圖の如く縦二つに折る。次で第三圖で見られるやうに、一方を長く、一方を短く二つに折る。第四圖は第三のものを挟んで重ねた處で、第五圖のやうに今一本挟んで行き、第六圖のやうに一松の形に各自が挟み合ふ。第七圖はそれを引締めた處で、第八圖はその動作を繰り返へして行く圖で、第九圖は二度目の一松が出来やうと云ふ圖解で、第一の一松の一端に引掛けて造つて行くのであるが、その縮くゝりをするものは、第一の一松の一端が第九圖に見るやうに、第二の一松の一部にはめ込まれて行つて、第二の一松の縮めくゝりをする事となつてゐる。そして此の動作が四方に開がつて行く時には、座蒲團でも、土瓶敷でも自由自在の大きになつて行く。

一定の大きさに擴げてもう是で止めると云ふ時には、第九圖の縮くゝりの動作の如く、四方に飛び出してゐる、端を一松の中に折り込んで終ふ。第十圖は完成したる圖面である。此種の古はがき利用は一見して、娯樂の利用の如くに見えるが、實は少しく熟練して來れば一つの職業として立派に生活を營む事が出来る。既に東北方面の農家の子女が、農閑期を利用

して、室に閉ぢ込められて、安火の中で、鼻唄を唄ひながら編んでゐるが、少し腕の達者な
 になると、一日に座蒲團二枚は容易に編んで終ふ。そして漆などを塗る、勿論眞黒にして終へ
 ば、美觀がないと云ふので、赤や黒でステンドグラス等に見る、所謂ゴシック式の圖案を現は
 して、一圓二十錢位で問屋へ卸してゐる。斯様に産業的に利用されるとせば、それは結果に
 於て積極的の利用法であると言ふも差支はあるまい。

濫では葉書に認められた文字が現はれてゐる。中にはそこに風流があると云ふ人もあるが、
 他人の書信の切端を座蒲團にしてゐると云ふ事は、心ある人のあまり喜ばぬ處であるから、市
 場に出して賣物とするには、漆を塗つて前記のやうな圖案を施した方が、如何にも工藝品らし
 くて、又顧客に薦めて少しも耻しい事はないと思はれる。斯様な意味に於て私 は古葉書の手
 工的利用を茲に説明した次第である。

第七節 白模造紙切

模造紙——世間では如何なる紙の事か分らぬ。實は此紙は紙質に於て和洋折衷の紙である。

その以前政府の印刷局で専門に漉いた紙に、恐しく丈夫な日本紙があつた。今日の所謂美濃紙
 などの丈夫さとは比較にならぬもので、純コージと云ふ木の皮を原料として、特殊な漉き方を
 したものである。つまり一圓以上の紙幣に用ひた紙で、誰でも知る如く紙幣と云ふものは、甲
 の人から乙の人へと轉々して行くので、普通の紙では直ぐに裂けて終ふ、それ故に紙幣用紙、
 本位に印刷局自身で漉いたので、それを『局紙』と稱してゐる。今日では此『局紙』なるもの
 はあるが、それは殆んど名刺紙以外には使用しない。此印刷局で漉いた『局紙』に模造して製
 した、丈夫な一見素人には西洋紙に見えるものがある、即ちそれを局紙に對する模造紙と言つ
 たので、模造紙本来の原料は何んであるかと云ふに、マニラ麻を原料として漉いたものである。
 故に局紙の如く所謂『生紙』式の黄色味がなく價格も安く、丈夫と云ふのである。

此模造紙の切端の利用——と云ふのである。故に斯様な紙は一般の家庭から生ずるものでは
 なくて、實は印刷工場とか、製本工場等から出るのである。

其處で屑物賣買の問屋では『白模造紙切』『上揃模造反古』『並模造反古』と云ふ風に、賣買
 上にそれ／＼の分類をして、價格を附してゐる、がその用途は何れも製紙原料となるのであつ

て、唯だ同じ原料になるにも、その反古の程度竝に紙質の如何に依つて、澆返されて来る紙の紙質を異にする處から右様の値段に變りがあると見れば好い。

昨年あたりから『改良障子紙』と稱して繼目なして專賣特許を得て、著しくその需要を増加して来たものがある、その障子紙の包紙に述べてある效能を言ふと、一火に燃えず、二水に濡れても破れず、三横切れがせずと云ふのである。苟くも紙と名のつくものに、火に燃えぬものがあらう筈がない——と考へられるが、實際火の中に入れても燻ぶるには燻ぶるが、火焰を揚げて天井に舞ひ揚がる事はない。此障子紙は前記の模造紙の澆返へしてある。更に何處の商店でも使用してゐる。『紙紐』なるものが、此障子紙と同質の物である。故に障子紙に於て横切れがせぬと云ふ事は、紙紐に於て私共が無意識の間に實驗させられてゐる處である。

元來模造紙と云ふものは、前にも述べたやうにマニラ麻を原料として出来たものであるが、況かマニラ麻の完全なものを使用する筈がない、言ふまでもなくマニラ麻の廢物利用が、今日の模造紙を産むに至つたのである。その廢物利用の結果出来上つた模造紙の廢物が更に利用されて、改良障子紙となり、紙紐となつて再三世の中に出て来るのである。是は人類に於ける或

る學者の言ふ靈魂不滅を、肉體不滅で立證してゐるのである。由來廢物利用とは即ちそれを意味したものである。

第八節 上質竝に更質洋紙切

西洋紙と云つても前に數回繰り返へしたやうに、色の關係、紙の肉の厚い薄い等で變はる。一口に上質と言つてゐるが、その上質の中にも何十種類あるか分らぬ。その一つ／＼に對してお話した處で一般の人には分らぬのみならず、層物問屋も又上質として一束に取扱つてゐるから、誰がみても此西洋紙は好いと云ふもの、層であると思つたら宜ろしい。それから次が更質と云ふのは、新聞紙のやうなザラ／＼したもので、共に西洋紙の再製原料に使用されるのであるが、上質は上質に、ザラはザラの原料となるものである。

第九節 生紙白截上

生紙とは日本紙の事である。併し美濃紙とか、細川とか云ふ日本紙とは違ふので、稍や質の

劣つたもので、生紙本来の原料からお話せねばならぬが、コーズと云ふ木の皮で製出された日本紙の事である。

其處でお話が少しく枝葉に亘るけれど、此コーズと云ふ木のお話をしてみやうと思ふ。田舎の人々は今更に説明されるまでもなく、よく御承知の事であらうが米の成る木さへ見た事のないと云ふ、都會のお方にはコーズなど云ふ、紙の原料になる木などはよも御承知のない事と御推察する。それ故に老婆心から俗に紙の木と稱してゐるコーズのお話も又一興かと思ふが儘に――。コーズは最初は自然木であらうが今日では農家で養殖してゐる。一見切桑のやうである。上州から信州に行くとき大きな根株から、細い枝がスー／＼と何本も生えてゐる桑の木がある。此の新枝を切りては翌年又も新らしく生えるのを待つ、それから全然葉のみを切る桑もある。この前者を切桑と稱してゐる。コーズは恰も此切桑のやうに、細い枝が一つの根株から数十本スー／＼と生えて、長いものになると五六尺、短いものでも三四尺から延びる。葉は非常に大きくて裂けてゐる。その新枝の皮が即ち製紙の原料となり、皮を剥いだ枝は、如何にも滑らかで白く北陸方面で一尺位の長さの長さに切つて焚物として町方の市へ賣りに出る。三椗のやう

に花は咲かぬ。

其處で此の生紙の屑は、普通の障子紙又は櫻紙に漉き返へされるのである。

第十節 改良半紙白切上品

改良半紙も日本紙である。併しながら生紙のやうにケバもなく、手觸りも好い、字を書いても、所謂筆の走りが好くて、毛切れをせぬと言ふ特徴がある。故に世間では普通の日本紙より今日では、改良半紙の方を却つて喜ぶ傾向がある。が日本紙と云ふもの、上から観る時には、生紙よりは數等紙質が劣つてゐるので、それは日常家庭で觀世燃りを造つてみれば分る。本来の生紙であれば、丈夫な觀世燃りが出来るけれど、改良半紙になると觀世燃りを燃つてゐる中に、千切れて終ふ。尤も最近普通の日本紙と云ふ中でも、ケバばかり澤山で、墨の乗りが悪く、裂け易い、安半紙がある。それよりは幾分改良半紙の方が優してゐる。

生紙はコーズの皮を原料としたものだし、改良半紙は三椗を原料として出来たものである。故に紙本来の原料が既に違ふのであるから、出来上つた結果に優劣のある事は仕方があるまい、

随つて是が一度廢物となつて利用される時にも、又それがつきまといふ事は自然の結果とみなければならぬ。

生紙は障子紙又は櫻紙に漉き返へされるのに反して、改良半紙の屑は、同じ日本紙に漉き返されても、ケバ澤山の、裂け易い半紙か、又は一本十錢位の安卷紙にしきや漉き返されて來ない。

一寸餘談になるが、三楹と云ふものゝ説明をしてみやう。三楹は落葉灌木、高さは七八尺位まで延びる。幹と言はず、枝と言はず何れも皆な三楹になつてゐるので、三楹と云ふ名稱があると言はれてゐる。本來の木の名稱は黃端香と云ふのださうである。秋も深くなると葉が落ちて終ふ。枝の端毎に數十からの小花が咲く。勿論花は櫻咲く頃で、その花は筒咲きと云つて細長く、花瓣は四つで外が白くて、内部は黄色である。駿州、甲州の山で多く造られてゐて、その木の皮を原料として紙を漉くので、『駿河半紙』と言つてゐる。今では斯様な名稱は殆んど無くなつたが、以前は『改良半紙』の事を斯く呼んだものである。それから祝儀不祝儀の包物用として使用される、美濃紙大の『糊入』と云ふ紙がある。何れも此三楹を原料として製出さ

れたものである。

第十一節 機械塵白切

機械塵とは、塵紙を機械で漉いたものを言ふのであつて、生紙の中にも、コーズの塵やゴミをその儘漉き込んだものがある、よく小包の巾包に使用する紙で、外觀甚だ穢らしく、使用して非常に丈夫なものがある。それ等は手漉の紙であるが、機械で西洋紙式に、コーズのゴミをその儘漉き込んだものである。素人には一見雜記帳等の表紙になつてゐる羅紗紙の薄手のものと思はれるが、實は全然違ふもので、生紙の塵紙同様に、小包の巾包等に使用されてゐるものである、又それに類似したものに三楹のチリやゴミで製出したものに『蠶座紙』と云ふものがある、都會の人には分らぬであらうが、お蠶の小便取り紙の事で、是等は一般人に何れも同類のものゝやうに思はれてゐるけれど、實際はその原料からして違つてゐるのである。

其處で本問題に移るが、機械塵の廢物は、再び機械塵の原料として行くし、又蠶座紙の使用後のものは、屑屋では『ホーペー紙』と言つて、再度蠶座紙の原料として製紙工場に廻はして

第十二節 帳屋竝に傘屋切上品

帳屋とは和帳簿屋の事であるも、傘屋とは説明するまでもなく、蛇の目、番傘等製造業者又は提灯屋等から出る日本紙の截断落しの事で、日本紙としては上等のもので、何れも白紙である。

共に製紙原料であるが、櫻紙に漉き返されて来る。でその廢物の出る處既に家庭的でなく、實は産業的方面の廢物であるから、その説明は簡略にして置かう。

第十三節 生紙帳潰し

生紙帳潰し——とは日本紙で造つた帳面の事で、普通の通帳である。故に大商店等の大福帳の如き大きなものではなく、酒屋、八百屋等の通帳、即ち半紙四つ折大の帳面の潰し物の謂である。最近には日本紙が一般に高くなつたので、何處の商店でも、儉約して西洋紙製の通

帳を顧客に廻してゐるが、それは此項目の中に含まれるものではない事をお断りして置く。

利用の方法としては、澁紙の張合せやら、襖の中張りとか、若くは製紙原料として廻はされるのであるが、製紙原料になる場合には、前記の利用に堪へぬ程度のものでなければならぬ。又日本紙だけに丈夫であるから、乾物屋の紙袋に使用される數量も決して尠なくはない。製紙原料になれば後日櫻紙となつて、一般婦人に愛用されるものとなつて来る。

第十四節 改良紙の反古潰し

改良紙の事は前の方で詳細に述べたから再述せぬが、前の方は截断落しのお話であつたし、是は半紙の形をした儘のもので、小學校の生徒が手習に使用したとか又はその他から出た反古の謂で、利用の途は澁紙の張合、襖の中張、袋等が主なるもので、先づ製紙の原料となるものはないと云ふて好い位だ。

第十五節 コツピー反古

コッピーパーの反古の事で、世の中の進むに随つてコッピーパーの使用程度が著しく増加して来たので、此のコッピーパーの廢物、必ずしも馬鹿にならぬ數量があるさうで、利用の途は一つに改良半紙の原料と定つてゐるらしい。

第十六節 種 紙

種紙とは蠶が卵を産みつける紙の事である。前の方でお話した『蠶座紙』と共に、需要が同一であり、廢物の程度も又同一である。

此種紙の廢物は、紙の表面、即ち卵を産みつけて、それが孵化した後の汚れた處を、水で洗ひ落して櫻紙の原料として上等の部類に屬するのである。

第十七節 官 報

官報——それは今更私の説明するまでもなく、誰でも知つてゐる、政府で發行する處の新聞であつて、普通民間の新聞紙と、その紙質も違へば、大きさも違つてゐる。前にも述べたや

うに普通の新聞紙は、所謂『新聞ザラ』と稱する、洋紙中の劣等品であるが、官報は此種の紙とは全然違つて、質が好い、随つて丈夫である處から殆んど全部と言つて好い程、紙袋にされてゐる。

紙袋にも種々あるが、官報一頁大の物を横に二つ折りに袋に貼る時には、二升袋として大きくも小さくもない。

私共が豆を二升買ふと、澱粉を二升買ふと此袋に入れ、ば立派に口が出来て終ふ。故に官報の読み荒しは二升袋と相場が定つてゐる。が完全な官報ばかりもない。時には何處か破れてゐるとかして、完全に二升袋にならぬものもある。左様な時は半截にして五合袋にして終ふ。今左にその一貫目の官報で何枚出来るか、その價格は幾干かを表にしてお目にかける事とする。

名 稱	合 數	枚 數	千枚價格
官 報	二升入	一貫目 五百枚	二圓二十錢位
同上半截	五合入	九百五十枚	一圓十錢位

第十八節 古新聞紙

四八

古新聞紙——此場合の古新聞紙と云ふのは、新聞紙の屑ではなく、一般家庭、又は銀行、會社、官廳から讀捨てられた儘のもので、少しも破れた處のない完全な古新聞の意味である。此古新聞の用途は可成りに多い。一般家庭では種々なるもの、包紙にしてゐる事は、私と言ふまでもない事で随つて産業的にも、包紙、即ち袋になるものが多く、製紙の原料に廻ると云ふものは殆んどないと云ふて差支あるまい。茲に特筆するものは同じ袋でも、需要の最も多い梨袋がある。

奥州の梨の出産地では梨が相當に實つて來る頃になると、木にまだ成つてゐる中に袋を被せて終ふ。それは蜂その他の蟲を除けるため、蜂にその甘味を吸はれると、その針の差した處から梨が腐つて終ふ。折角手入をして一個十錢にも賣れるであらうと云ふ立派な梨を、僅に蜂のために腐らして終つては一大事件である處から、紙製の袋を被せるので、その被せられたる有様は、恰かも新聞紙の玉が木になつてゐるやうに見える。

此奥州で梨袋として東京から古新聞紙を輸入する數量は、實に一箇年十萬貫の多きに達してゐるので、私共が家庭にあつて一貫目の新聞紙を屑屋に賣り拂ふには、相當の日數を要してゐる、勿論數種の新聞を取つてゐる家庭では別であるが、一種位では先づ三箇月以上蓄めなければならぬ。

それを考へて此奥州に行く十萬貫を思ふ時には、その需要必ずしも僅少なものは思はれぬ。更に此古新聞紙を奥州の梨の出産地では、十六に截斷して、それを二つ折りに袋にすると、梨に被せせる袋として、お誂ひ向きとなるのである。さう思ふと一箇年十萬貫の古新聞紙を要する梨畑の宏大な事も随つて聯想されると云ふものである。

更に最近農商務省の古瀬工場監督官の縁者になる人で、佐賀縣佐賀郡高木瀬村の豪農で、嘉村文吉氏なる人が、米俵の内部に米の蟲除けに新聞紙を使用する事を發見された、それは印刷インキに含まれた化學的成分のために、米の蟲の繁殖を妨げるので、嘉村氏の研究實驗に依ると、印刷後一箇年以上経過したる古新聞では、驅蟲に効果がないとの事である。お話が餘談に移るが我國全體で、米の收穫は平均一箇年五千四百萬石であつて、蟲のために米の減る量が

全産額の一分とされてゐるから、所謂蟲減りなるものが、現在では五十四萬石と云ふ莫大の米を、蟲のために空費してゐる事となる、現今の如き食糧問題の喧しい時代に、此古新聞に依つて五十四萬石の米の空費を避け得るとせば、古新聞の廢物利用は偉大と言はなければなるまい。

其他には駄菓子屋、水菓子屋、乾物屋、魚屋等で古新聞で出来た袋を要する事も又大きなものであるし、經師屋が襖の中貼に使用する事も多數に昇つてゐる。

次で今から四五年以前に、實用新案かなどをとつてあつたと記憶するが、古新聞紙を十枚位重ねて、機械で壓搾して、それを幅一寸長さ三寸位の大きさに截斷したものに、バラフィンを薄く、四方の周圍に塗布して、一般家庭用の『焚附』として賣り出された事を覚えてゐる。唯今は人造焚附なるもの、種類も増加したのと、それに都會では何れの家庭にも瓦斯が普及されたので、薪炭に依る勝手元の燃料使用が、一日と減少したから、此古新聞に依る焚附の姿を認めなくなつた。が此に類似した産業的の利用は、實に枚舉に遑あらぬ程の數に昇つてゐる事と思はれる。

随つて手工的方面の利用も數多い事であらうし、それ等を一つ／＼列記する事は容易でないのみならず、左のみ興味のある事でもなし、又あれだけの大きさを有した西洋紙、唯だ文字が印刷されてあると云ふだけの事故にその用途の絶大である事は、今私がお話するまでもなく誰人も容易に想像し得られる事である。次で今後は此古新聞の産業的利用の途が益々開拓される性質を有つてゐる事も斷言し得る。或は私の調査し得た範圍外に、此古新聞紙を、經濟的に、且つ産業的に利用してゐる向きが必ずあると思はれる。されば此項に於て記した事は僅に利用途の一部の記載報告に過ぎぬものと見られたなら御よろしからう。讀者に希望する處は左様な利用をして居らるゝ事を御承知の方があらば、私の許にまで御通報を願へば是に過ぎぬ幸ひである。

第十九節 新截ボール

新截ボール——とは馬糞紙の截斷落の謂であつて、是は普通一般の家庭から出るものではない。多くはボール箱製造業者の手許、或は製本業者が洋本の表紙の截斷落の事で、普通の家庭

でボール紙を出すと云ふ事は、菓子折とか、又は玉子の折位が關の山である。それとても極めて尠ないもので、先づさうした家庭から出るものは産業的に利用する、即ち工業原料とするに餘りに數量が僅少であるので、勢ひ製本業者、或はボール箱製造業者の截斷落しと混合の上

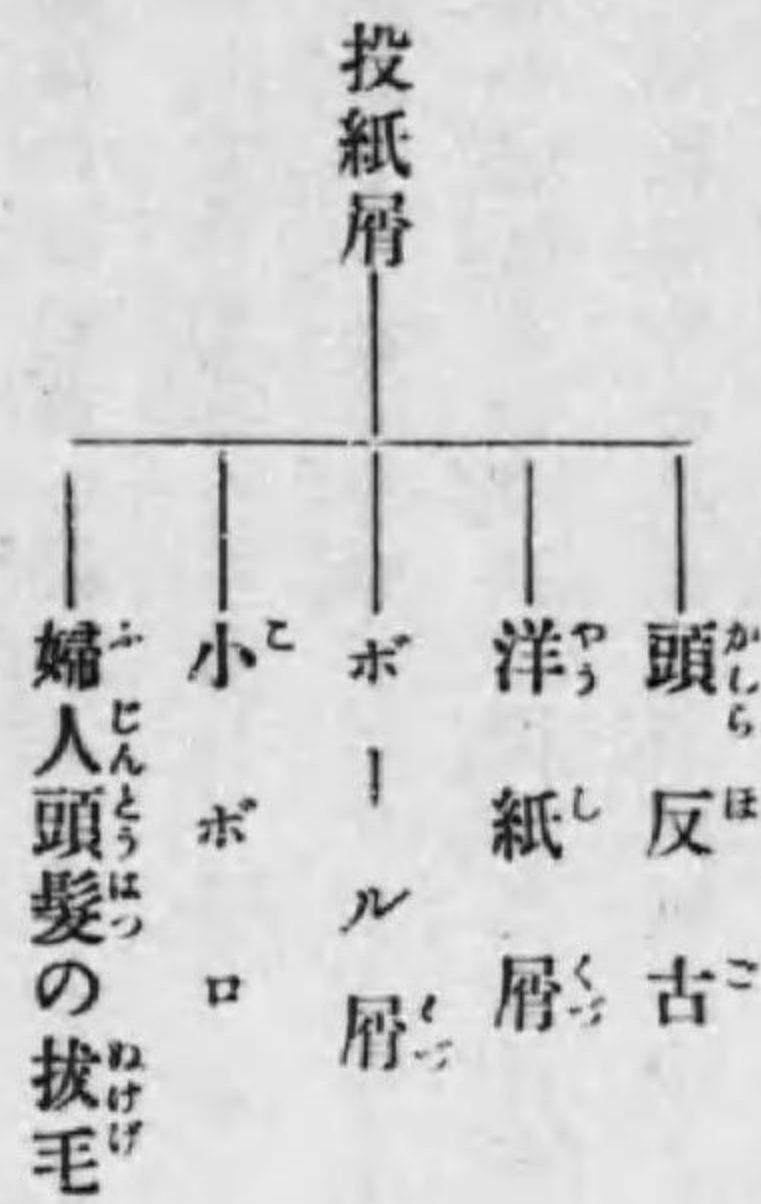
に再度ボール紙の材料として製紙工場に廻はして終つてゐる。尤もボール紙の比較的大きなものになれば、それはボール紙の原料として廻はすまでもなく、それ／＼玩具製造業者とか、或は子供の人造皮革の靴の底に使用される向きもないではないが、それは極めて數は少なく、且つボール紙の厚さに於て、出來得るだけ一定してゐないと、利用に困ると云ふので、その過半は製紙工場へ再度ボール紙になるため廻はされてゐる。

第二十節 投 紙 屑

投紙屑——とは屑物業者の専門語であるが、是は一般の家庭で、殆んど無代價同様に、屑屋に賣拂つてゐる紙屑籠中の物を言ふので、投げ入れた紙屑なるが故に、『投紙屑』と言ふのである。是は前各項の品物の如く、分類的に家庭から賣り拂はれるものに比して、此方は如何とも

仕様のない程度のものゝみである。

紙屑籠——の中から出るものには、次の數種があるので、素人は總てのものが同一に紙の原料にされてゐるであらう位に想像してゐるが、事實は左様な不經濟な、非産業的な利用は行はれては居ないのである。



と云ふやうなものが現はれるので、今左に右の一つ／＼に關しての利用を話する事にしよう。

頭反古——とは抑も何んの意味であるかと云ふに、紙と云ふものゝ中で一番價格の高いものは、何んと言つても日本紙である。故に紙の頭であると云ふ處から、『頭反古』と云ふので、此

中には三極で製出した改良半紙もあれば、又コーズで出来た所謂生紙なるものもある。此を分類する事は、あまりに紙屑が少なさ事と、それから紙屑籠から出るものでは、あまり手觸りの好いものゝないために、混合して製紙原料とされてゐるので、再び世の中に出て来る折には、婦人愛用の櫻紙となつて来るのである。一口に櫻紙と言ふが、中には腰の強い紙もあれば、西洋紙同様に腰の弱い櫻紙もあるのは、何れも屑籠の中から出た、頭反古の廢物利用に依る結果と思召したら間違へはない。

洋紙屑——とは説明するまでもなく、西洋紙の屑である事は、三歳の兒童も好く知る處である。前の頭反古の中に、種々なる日本紙の屑が混入してゐると同様に、洋紙屑の中にも、紙質の好い洋紙屑もあれば、新聞紙の少く裂けたものもあるし、模造紙の裂けたものもあると云ふ風で、素人の考へから行けば、やはり西洋紙に漉き返へされて来る事であらうと思はれやうが、實はさうではない。何故かそれは相當の洋紙に漉き返へすには、あまりに紙屑が汚れてゐる事と、種類が多く交つてゐる事で、此れを普通西洋紙に漉き返へすには、非常に複雑な手数と費用とを要する事になる。

それに一方洋紙の漉き返へしになるべき廢物が相當出て来るのに、何を好んで費用の多額と、手数をかけるだけ愚劣な業となるから、一名落し紙と云ふ、淺草紙に漉き返されて来る。落し紙とは穢ないお話であるが、便所へ落して終ふから、『落し紙』と命名されてゐるのである。

ボール屑——此は前の方で『新截ボール』の項に於て説明したから、茲には再記する事を省く。

小ボロ——とは反物の切端とか、又は子供等の着物の『鍵裂』の端等を、丸めて紙屑籠へ投げ入れてある。その極めて利用もなさそうな少々な襦袢の意味で、此ボロの利用は實に意外なものがある。且つ讀者が一驚を禁じ得ぬ程の利用が行はれてゐる。がそれは後段の一般襦袢のお話の際に譲つて、此項では暫くお預りとして置かう。

婦人頭髮の抜毛——如何なる婦人でも毎日又は隔日に頭髮に櫛入れをする。その際に若干宛とは言ひながら櫛の齒に掛つて毛が抜けて来る。又は切れて来るものもある。殊に春と秋はそれが一層甚しい、又産後、或は熱病にても罹ると、禿頭病にでもなつたのではないかと思はれる程抜けて来るものである。それを婦人は手掌でくるくると丸めて、紙屑籠へ投げ入れる。

それは可成りの數量となつてゐる。此利用は現在の處二三種あるが、後段に於て詳述する事にしやう。

五六

第二十一節 細川長帳

細川長帳——とは細川と云ふ紙で造つた、長い帳面の事である、と言つたゞけでは或はお分にならぬお方があると思ふから一寸説明をしてみやう。世間では半紙よりも大きな判の日本紙の事を、俗に『美濃紙』と稱して居るが、實は一口に美濃紙の中に、細川、西の内、加茂等の名稱を附した、種々なる紙がある。何れも出産地の名稱であつて、是等を數ひ擧げる時には、可成りの數があるから省略して終ふが、その中で細川と云ふ紙は實に丈夫で、先づ日本紙中の頭と言はれてゐる位のものである。

此細川と云ふ紙で造つた長い帳面——それは紙を横二つに折つて一方を綴た和帳簿の事で、今日ではあまり此帳面を使用してゐる處が尠なくなつた。が以前は何れの商店でも、商ひの臺帳と言はれた『大福帳』なるものは皆な是であつた。現在では商法が日本古來の習慣を打破し

て、簿記式に文明化されて來たので、日本橋あたりの呉服太物問屋とか、或は地方の老舗にてもなければ大福帳なんてものは影を絶つて終つたから、文明の空氣以外に吸つた事のない新人には、鳥渡細川の長帳なんて、それこそ時代遅れの物はよも御承知はない。

此使ひ古るした細川の長帳が、却々高價で賣買されてゐる。先づ一貫目七圓前後とみたら間違へはない、それは仕うしてかと云ふに、紺屋で缺くべからざる型紙、手拭を染めるとか、又友禪模様を染めるとか、更紗の型を置くとかする場合に、型紙と云ふものを使用してゐるその型紙は皆な此細川でなければならぬ。現今では細川の紙質が昔のやうによくなくなつて來たので、大福帳の古物が、新しい細川の紙よりも高價に賣買されたと云ふ變つた實例さへある。何分にも型紙は微細な模様の型までも紙に穿ち抜いてあるので、型紙が悪いと紺屋が置く模様が崩れて終ふ。それ故に型紙は最も大切なものである。それには仕うしても昔の紙質の好い細川でなければ困る、然るに新しく漉き出される細川は昔の紙質より遙かに劣つて來た、だから帳簿として充分に使用されて來た古物が、折目もない新しい紙よりも高價に賣れて行くといふ奇觀を呈して終つたのである。

五七

それは細川と云ふ紙は前にも説明したやうに、楮の皮の好い處で手漉にしたものであるから、普通の日本紙などの及ぶ處ではないのだ。故に古帳簿を解いて、折目を延ばして二枚を貼り合せ、それに両面へ稍や厚く澁を塗つてあるが、普通日本紙の五六枚貼り合せたものに比して、猶ほ細川の二枚の方が丈夫である。それにはやはり現今の細川では駄目で、今から十年も以前に漉かれたやうなものでないと、紙質が丸んで違つてゐる、ために大福帳の古物が賣行が好いのだ。

其他にはボール箱の製造業者が、箱貼りに使用する量も可成りの數である。つまりボール箱の織目とか、又は箱の丈夫なやうに四角を貼る、勿論下貼りであるから、如何なる文字が書いてあらうと構はない、その下貼りをした上に、鳥渡見られるやうな、西洋紙を化粧貼りしてあるので、先づ細川の長帳の廢物利用としては、何んと言つても此二方面がオソリテーであらう。

第二十二節 細川の袋帳

細川の袋帳——前項の長帳に對する袋帳で、唯だ袋帳と言つたのでは讀者にはお分りにならぬ方があらう。前項の長帳は細川と言ふ大きな美濃判の紙を、横に細長く二ツ折りにした大福帳の意味であるし、此方は縦に二ツに折つて、折り返へされた兩端を、本のやうに綴じた帳面の事である。今少しく分り易く例を曳いて言へば、昔の青表紙と云ふ、木版刷の和本がある。それは一枚の紙に二頁分を印刷して、真中から真二ツにして、一頁と二頁との折目が喰つてゐて、一頁の裏も、二頁の裏も白くて、袋になつてゐるものがある。今日和本とか、日本綴と云ふ書物は、必ず袋になつてゐるので、此れを帳簿の場合には、袋帳と稱するのである。

此袋帳になると、紙の大きさが、長帳より多少上下と、それから綴目の方が寸が詰つてゐると云ふのは長帳の場合には横二ツに折つた儘、一方だけ綴ぢて、その不整頓な處を少しく、化粧截断をしただけなのに反して、袋帳の方は上の方も、下の方もキチンと揃はぬから帳簿にしてから、上下を幾分なり化粧截断をする、故に上下で一分宛切り落しても、一枚の紙の上では二分の寸が詰まる結果となる。それから又縦真中から二ツに折り返へしてあるので、帳簿の背の

方が不揃系の場合にも一分位は切り落す事となる、すると折り返へしてあるから、一枚の紙の両端が重つてゐるので、それを一分切れれば、一枚の紙を廣げた時には、左右に二分の寸がつかまつる、然るに長帳になると上下の切り落しが無いのみならず、一方の端を一分切り落すだけだから、寸がつかまつると云つても袋帳のやうに、前後左右一分宛のものと違ふから、結局長帳の方が、紙本来の原寸より一分つまつたゞけて事が済む、袋帳は四分つまるから、此を利用するの際に至れば、誰しも長帳の方が都合が好くて袋帳を嫌ふのは當然である。然しながら長帳はかりはないから、袋帳を使用するが、その用途は自然異つて来る事は必然的と見ねばならぬ。

それに今一ツ袋帳と長帳と利用の際に同一にならぬ原因がある。それは何故かと云ふに、長帳の場合には、綴る處が一方の端だけに、孔を穿けられるのも一方で済むのに、袋帳の時になると、二ツ折り重つてゐるから両端に孔を穿けられる事になる、既に紙その物に於て前後左右四分のつまりのある上に、更に孔を穿けられるのが両端と云ふ事になるから、長帳と同様に利用する事の不可能は明かである。

故に長帳は前項に於て詳述したやうに、紺屋で使用する型紙を最も上等の利用、否専門に利用されてゐる位なのに、此は又型紙には全然出来ない、さればボール箱の箱貼りを第一として、其他には澁紙の貼合せ、或は上等物の襖の中貼りとか、乃至は紙製玩具の材料として廻はされてゐる。それから乾物屋等で粉物の袋等にも使用してゐるが、それは微々たる數量に他ならぬ。

第二十三節 其他の帳簿

帳簿——此場合の帳簿とは日本紙を以て製造したもの、謂である。故に素人には何れも同一の品物に見ゆるものも、實はいざ利用と云ふ段取りになつて来ると、それ〴〵区分されてゐる。譬へば一見細川で造つた帳簿のやうに見えても、實は西の内であるとか、又は生美濃紙であるとか云ふ風に、日本紙本来の物に各種のものがあると同時に、少しでも經濟的に帳簿を造る關係上、種々なる紙を以て造られて居る事は論を俟たぬ處であらう。又帳簿の大きさにも差別がある。酒屋、八百屋等が使用してゐる顧客への通帳の如きは、半紙四ツ折りの通帳である。

それにして改良半紙を使用してゐるのもあるし純生紙を以て造つたものもある。次には大福帳の如きでも改良美濃紙を使用すると云ふ有様で、世の進むに随つて帳簿の形式が改まる、それと同時に在來使用し來つた紙も又、改良に改良を施して、出來得るだけ經濟的に、且つ外觀の美を装ふと云ふ風に、昔日來の丈夫本位は既に時代ではなくなつて來た。

てそれ等の千差萬別なる帳簿の一ツ／＼を茲に列擧する事は、あまりに専門的であるし、第一に讀者がそれを讀れて、此れは斯様なもの、此れは斯うと諒解し得まいと思はれる。實物を以て説明する事以外に、素人にお話する能はざるものは、此際省略して置いた方が好からうと思はれる。そして前に述べた帳簿及び紙の事について簡單な説明を加へる事にしやう。

西の内臺帳——襖の中貼り、紙製玩具の材料、箱貼り、溢紙の張合せ、紙袋等に利用されてゐる。

生美濃紙帳——同上

改良半紙判帳簿——同上

改良美濃紙判帳簿——同上

先づ大體に於て前述の利用と見たらよろしい、が何れも賣買の價格は異つてゐる。のに使用の方面が同一とは少しく腑に落ちぬやうな處があらうと思はれるが、それは名稱的に使用先きを言ふなら、疑問も起きやうと云ふもので、使用者が此紙の袋は何を入れるものとか、或は同じ襖の中貼りにしても、此紙は中等物とか、又は下等物の中貼りにするかそれ／＼その價格に應じて使用者の方が區別してゐるので、その行衛を探究して名稱的にお話すれば先づ前のやうに言ふより途はないのであるから、その邊は讀者の御諒察を乞ふて置くとしやう。

第二十四節 役所物綴込帳

役所物綴込帳——此中から種々雑多の反古が現はれるのである。何人でも一度役所の玄關を潜つてみれば一見して分る事であるが、役所では幾種の公用の書類があつて、それが用濟みなれば、日本紙であらうと、西洋紙であらうと、そんな區別は少しもなく、何んでも到達の順序で綴り込んで、一定の期間保存して置く。そして所定の保存期間が経過すれば、それを紙屑同様に屑屋に拂ひ下げて終ふ。

だからその中からは、改良半紙も出れば、所謂美濃紙も出るし、それから更紙も出る、上質の西洋紙も出ると云ふ風で、それを利用する時には、當然それ／＼に分類せねば廢物利用は出來ない。けれども屑屋の方では、此役所物は役所物として別取扱ひをしてゐる。と云ふのは問屋同志で賣買する時に、役所物は割合によい紙の多い時があるので、總て混みの儘、一貫目一圓五十錢位の相場で取引されてゐる。勿論買つた方が更に分類して利用してゐる。故に茲には前に屑物問屋の分類名稱を列記した關係上、特に一項目を設けてお話するのであるが、一度分類されて終へば、その紙質に依つて用途を異にしてそれ／＼に賣り捌かれるのだ。その分類後の利用については既に、前段各項で述べてあるから、それに依つて御承知を願ふ事にして置く。

唯だ役所物と屑屋仲間での言葉の解説に止めて置くが此物の賣買には、思はぬ金儲けがある。と云ふ事だけはお断りして置く。何分にも拂ひ下げの時には一貫目や二貫目の端數でないから、一々一束毎に内容を改めてゐないだけに、西洋紙澤山と思つて拂ひ下げを受けて來たものが、何ぞ計らん、日本紙ものが多かつたりして、思はぬ金儲けが出来る、と云ふのは一般の人々が

未だ廢物と云ふ物の利用と云ふ事に何等の智識を持つてゐないから、廢物となれば日本紙も、西洋紙も、又新聞紙も同一の價値しきやない物と考へてゐるから、拂ひ下げの場合に、斯うしたものの分類をしてゐない、單に屑屋の言ふが儘の價値しきやないものと心得て下げて終ふから、飛んだ屑屋の金儲けとなるのである。

實際から言ふと普通の紙屑籠等の紙屑とは違つて、役所の綴込などは不潔な事もなければ、分類に相當の技能を有する程の事も必要としては居ないのであるから、拂ひ下げる以前に、小使にても命じて、日本紙は日本紙、洋紙は洋紙と分類して拂ひ下げるならば、捨てた物から若干の金を産んで來る。その分類のために、よしや小使に若干の手當を出しても、その手當以上のものが回收されるそれは一ツに役所の經濟と云ふ意味ではなく、小使給仕等の賞與等にその費用を廻はしても好いので、必ずしも役所全體の經費の一部にせよと云ふものではない。

又賞與等に廻はす事が手數とあるならば、薄給な小使に分類させて、それに依つて得た餘分のものをも、その分類した小使に與へるならば、小使は非常に喜ぶ事であらうと思ふ。何處の役所を覗いても小使若くは給仕等が、斯様な物の分類をしてゐる程の餘分な時間がないと思は

れない。故に此分類をせしめたために、役所本来の執務に大なる支障を来たす事は絶対にないと思ふ。又萬一支障を来たすとせば、夜分でも小使にやらしても好い。それに依つて得たものをその小使に與ふるとなれば、小使自ら進んで分類を行ふであらう。徒らに屑屋に不當な儲けをせしめずとも、自己の勤めて居る役所の顔馴染の小使に一錢でも餘計の収入を得させるが好いと思ふ。

此も小使の空費してゐる時間の利用として、此私見を附して置く次第である。

扱て前段數項に亘つて紙の廢物利用に就いて説明して来た。勿論紙の廢物は前數項に述べ来たつただけのものではない。和洋兩紙の種類が數百種あると同時に、その廢物となつて来る程の數も又枚擧に遑ない。それを一つ一つに就てお話しして居る時には、殆んど大同小異の利用法をくどくど述べる事は筆者としての私も煩に堪へぬばかりか、讀者諸氏も讀せられる苦痛又甚大であると御推察して、一般屑物問屋の大體分類と、その用途の範圍に止めて、後日何等かの機會があらば、實物で御説明し得ると思ふ。

第二十五節 電車の古切符

電車の古切符——と言つても東京市内の電車の古切符の事で、朝は早くから、夜は一時頃まで、間斷なく通つてゐる電車の使用後の切符は、一日仕の位出る事であらうか、紙屑の廢物利用のお話から關聯して、餘録的にお話しする事も又一興趣であると思ふが儘に調べてみたが、先づ一日、二十六貫餘を出してゐるのだ、一箇月平均八百貫と云ふのである、是を三百六十五日一箇年でみる時には、その數量は驚く勿れ九千六百貫である。

而して東京市電氣局が、製紙原料として拂下げてゐる價格は一貫目十二錢で、一箇年間電氣局の古切符から得る収入は、一萬一千五百二十圓と云ふ額になつてゐる。是等の古切符は何處に行かたと云ふに、説明するまでもなく、製紙業者の手許に入るのであるが、それは御婦人なら誰方でも御存知の、キレー紙の本舗、小石川區柳町二十二番地、堀内壽太郎の經營してゐる、同區氷川町三十番地の工場に運ばれてゐるのである。

と言つたらキレー紙は電車の古切符の化身かと言ふに決してさうではない、機械漉の塵漉と

なつて、一貼が四錢位になつてゐる。其處で電車の古切符一日、二十六貫目として、それが何の位の塵紙になつて來るか云ふに、二十三萬枚にはなるさうで、一貼二十枚としてみる時は二萬一千五百貼の紙になるのだ、一貼四錢として八百六十圓の紙が一日の電車の古切符から製出されてゐる事となつてゐる。

第二十六節 機械製紙の方法

お話の序であるから、製紙の方法を簡単に述べる事とする。今假に電車の古切符から、塵紙を漉く順序でお話するが、古切符が百貫目這入る、蒸し釜の中に古切符を入れて、約三十分間位猛烈に熱する。斯くされると有撃の古切符も性なしにぐたぐたとなつて終ふ。それを約三時間餘放棄して、然る後にビーター（叩解器）に掛けるのだが、その中へ晒粉を水に溶いて適當の量だけ入れる。するとそれが黄土の如くなる。（黄土とは支那の名物で、黄色い土である）その間は約五時間ばかり要するのだ。

更に抄紙機（是は新聞紙印刷用の輪轉機見たいなもの）恰も新聞の印刷されると同様な形に

於て、抄紙機に先刻の分解されたものが捲附いて行く。と言つても手や足がある譯でないからそのものが自然について行くのではなくて、實は原料の溶解されてゐる表面を一枚の毛布が這つて行くのだ、その毛布に溶解された原料が、附着して機械に捲きついて行くのである。その機械は捲きついて來た毛布上の溶解された原料を壓搾すると同時に乾燥の方法も行ふて終ふ。それがぐる／＼と數十間の長い物になつて出て來る。即ちそれが紙であつて、それを適當の大きさに截斷して市場に出すのである。

今古切符から再製の紙となるまでの時間を調べてみるに、約十時間餘である。それから今一つ附け加へて置くが、原料が抄紙機を通過して、紙になる迄の速さ加減と來たら、三尺幅のものが一分間に百五十尺と云ふのである。是で大體機械漉の製紙の有様はお分りの事と思ふ。其他微細な事は筆で説明しても一寸お分り悪いもので、現状を見らるゝより他に方法はない。

第二十七節 原料と製紙經濟

扱て製紙の原料としての廢物利用には、幾種のものがある。而もその廢物に依つてそれ／＼

原料としての用途が異つてゐる。で今その原料の如何に依つて、製紙經濟が何う違つてゐるか
と云ふ事を話してみやうと思ふのである。譬へば、同じ一口に紙屑と言つても、印刷物の紙
屑もあれば、白紙の屑もある。それが印刷した物を原料とした場合も、印刷せぬ白紙の屑を原
料とした場合の經濟關係を説明してみる。

先づ印刷した紙屑を原料としたる場合には、歩止りが五割である。言ひ換へれば一貫目の紙
屑を原料として、漉き上げた紙は僅に五百目しきやない。即ち五百目と云ふものは減つて終ふ
のである。

然るに印刷せぬ方のものになると、一割五分の歩減りて好い。約三割五分の差が出るのだ。
つまり一貫目の原料で、八百五十目の紙が漉き上げられる事となるのだ。何故に印刷したもの
と、せぬものと斯くまで違ふかと云ふに、印刷したものにはインキが附着してゐる。そのイン
キを除くために、晒粉なり、苛性加里を入れて、前項で話したやうに、ピーターで分解して
終ふ。その際にインキの量も取れば其他晒粉等と共に、原料が幾分下に沈澱して、紙漉機の毛
布面に浮かんで來なくなる關係もあるのだ。が印刷せぬ方になると晒粉や、苛性加里で晒す必

要もなく、單に分解して終へば好いからその歩減りの程度が違つて來るのだ。故に製紙工場と
しては、印刷したものよりは、印刷せぬもの、方を歓迎する事となつてゐる。

此度は襪褌を原料とする場合であるが、是は普通襪褌なれば、先づ四割から五割の歩減りて
ある。尤も『藍ヌキ襪褌』を原料とする場合には、先づ三割五分の歩減りとみたら好いのであ
る。何故と云ふに一般襪褌は、前にお話した印刷せる紙屑も同様に染料を除くために、例に依
つてピーターの御厄介となる。而も晒粉とか苛性加里を使用されるが、『藍ヌキボロ』であれば、
既に藍を抜いた、めに、その襪褌に附着してゐた垢とか、泥とか言つたものが綺麗に落されて
ゐるから、製紙原料としては經濟であり、喜ばれる原因なのである。

處が此度は新らしく紙を漉く場合として、バルブのみを原料とすれば、僅に五分の歩減りて
済んで終ふ。と言つたら何を苦しんで廢物の不經濟なものを使用してゐるのか、と問はるゝ人
があらうが、實は原料としては歩減りは僅少であつても、襪褌や紙屑程安くは買へない。のみ
ならずバルブのみを原料としたのでは、極く粗悪な更質の紙より漉く事は出來ないのである。
だから少しでも上質の西洋紙を漉くとなれば、何うしても襪褌を三四割混入せぬ事には物に

ならぬ、襪褌ばかりを原料とした洋紙は、實に光澤もあり、肌も細かに上るし、色も白くなるのみならず、引も強くなるのである。故にパルプ何割、襪褌何割とか、又は紙屑何割と言つた風に漉かうと云ふ紙の程度に應じて、原料の調合が變化してゐるのである。

是て紙と云ふもの、原料としての廢物利用の一斑は會得せられた事と思ふから、お話を轉じて襪褌の廢物利用のお話に移る事とする。

第三章 襪褌其他の廢物

第一節 甲 込本調

前章各節で述べ來たつたものは、何れも紙に關するお話であつた。是からは襪褌其他の廢物の利用に就てお話するが、實際産業的廢物利用としての、家庭の廢物中、最も興味ある問題のみならず、その利用法の如きは何れも一驚を禁じ得ざるものがある。

紙屑が再度紙となる——と云ふやうな事は、廢物利用としては、極めて單調な部類に屬する。

然るに此襪褌其他の物は、全く豫想外の利用法が行はれてゐるので。後段各項で述べるお話は極めて總括である事を前以てお断りして置く。それは何うしてか、或る物品は共通の利用があるし、或るものは一の利用から、或る種のものとなつて、再度市場に出て、而して更に相當の社會的に奉公したる後に廢物として舞ひ戻つて來る。で第二回の利用が行はれる。此順序を以てその物體が無となるまで數回利用される、勿論利用される毎に同一な品物となつて行く場合もあるし、更に變化から變化を呼んで行くものもある。

斯様に利用が反覆されるのであるから、その有なるものが、全然無となるまでの事項を、一品毎に説明して居る事は出來ない。と言へば甚だ不親切なるかに響くであらうが、それは叙述の方法を誤るもので、徒らに貴重な頁數を空費するに他ならぬ。故に甲なる物品の廢物が茲に利用されて、乙なる物品となつて行く。と云ふだけを甲の廢物利用としての説明に止めて、次に乙なる物品の廢物が、丙なる物となつて行く——とだけにして、一品の終熄までは追はぬ方針である。

勿論終熄まで追ふべきものもある、一例を示せば、一本の六尺禪の古物が蒲團になる、手

拭になる、足袋裏になる——と言つたゞけて、手拭となつてから後の廢物利用は、古手拭と云ふ項で説明をして、禪の最後まで説明せぬ——と云ふ事柄である。その點は讀者の御諒察を乞ふて置く次第である。

扱て前置きは餘り長くては讀者が飽きるから、此邊に止めて愈々本問題に移るとするが、本項の表題たる。

甲込本調——と言ふたゞけては、それが何んの意味か、又如何なる襦袢であるかさへ想像がつかぬ、先づ此屑屋だけに共通なる専門語の解説を試みるに、元來家庭から襦袢なるものが出る時には、少しの分類もされてゐない、何も彼も混合した儘屑屋の手に賣り拂はれてゐるのだ。それを屑物問屋が消毒したる後に、大分類をなし然る後に、それを更に用途の關係上小分類を行ふ。小分類から更に微細な分類を行ふ場合がある。今その最後の分類についてのお話として、大分類の、一口に襦袢と云ふもの、中から何百種類が現はれるか分らぬ。而も用途は専門的にこそ區別されるが、常識的に知るには餘りに煩雜に流れてゐるから、大同小異の物は一束として中邊の分類でお話をする事にする。

されば屑物問屋の方では、甲込本調（即ち本項の表題であるが）乙込本調、市中本調、市中白、地方赤襦袢など、云ふ風に稱してゐる、市中と云ふのは東京市内から出た襦袢の謂であつて、單に甲込とか、乙込とかは地方から来たものも混入されてゐるのである。元來市内から出た襦袢と地方出のものとは、利用の場合には何れが好いかと云ふに、地方のものが好い、随つて屑屋同志の仲間買の値からして、地方出のものは高い。市内のものは安い、何故か、地方のものはその過半数は木綿物であるのに反して、市内から出るものは、絹物が多い。昔から好く諺に聞く「腐つても鯛は鯛だ」と云ふから、素人的に觀察すれば、當然絹物の方が高價でありさうだが、絹物は實際廢物利用と云ふ段取になると、餘り木綿物程喜ばれてゐない。此は木綿物は植物性のものだし、絹物は動物性のものであるからだ。此事については後段で徐ろにお話する事として茲では省略して置く。

て大分お話が枝葉に亘つたが、甲込本調とは、木綿襦袢であつて、紺染のものとか、乃至は淺黄色の物、又は縞物の大襦袢、小襦袢を込合せたもの、名稱である。其名稱に「本調」と云ふ冠ひりがあるが、本調とは上記の品物だけに分類してある、即ち調べ上げてあると云ふ意味

て本調と言つてゐる。

一貫目の問屋相場は三十四五銭で、その利用先は製紙原料である。勿論漂白して白西洋紙となつて再び世の中に出るものであるが、此利用を行ふには相當の設備を必要としてゐる。そのため何處の製紙工場でもと云ふ譯には行かぬ。

其處で關東方面で出る此甲込本調の行衛はと云ふに、富士製紙、九州製紙、小倉製紙の三社が大部分であつてその他若干宛出ぬでもないが、それ等は茲に特記するだけの量に昇つてゐない。殆んど此襦袢の行衛は何處か、と聞けば先づ前記の三會社と云ふが至當であらう。

第二節 乙込本調

乙込本調——前項は甲込本調、此處は乙込本調であるから、素人でも是は、常識的に判断しても、前項のものよりも品物が劣等である位は諒解される事であらう。最も問屋の相場が、前者は一貫目三十四五銭と云ふのに、乙込となると一貫目十四銭内外で賣買されてゐるのをみてもそれが、善悪は想像される筈である。

前者の方は大きな襦袢もあれば、五分三分と云ふやうな小さな襦袢も混合してゐるのであるけれど、此乙込本調になつて來ると、小襦袢のみである。併し紺染物、淺黄色の物、縞木綿等は勿論の事、絹物の小襦袢までが混入されてゐる。

故に甲込同様製紙の原料となるのであるが、何分にも前にも述べたやうに、絹物の小襦袢までが加つてゐるから、紙に漉いても、甲込を原料としたやうな上等の紙にはならぬ、甚だ紙質の悪い紙より出來上らぬ。而も歩減りが多い。一寸お断りして置くが、此『歩減り』と云ふ事であるが、是は原料一貫目のものが、品物になつた時に、七割とか八割にしきやならぬ。其間に三割なり、二割なり原料が生産中に減る。是を製紙會社の方では『歩減り』と稱してゐるのである。又は『歩止り』とも言つてゐる。此歩止りと云ふ時は、一貫目のものが八百目のものになつたとすれば『八百目の歩止りだ』とか『是は歩止りが好くて八百五十目になつた』とか言はれるが『歩減り』の場合には『原料が好かつたので、歩減りが僅で止つた』と言ふ。要するに『歩減り』は減少するを主として使用する専門語であるし『歩止り』は残つた方を主として言葉で、共に製紙會社で使用してゐる。

處て此『步減り』の點から、甲、乙の兩者を比較する時には何うであらうか、假りに甲込本調を原料として紙を漉けば第一に紙質の好いものが出るし、その上に步減りが僅少で済む、一例で示せば、甲の場合に步減りが二割で済んでゐるのに、乙込本調を原料とした時には、三割乃至四割の步減りがある。それだけ原料が多量に要する結果となる。故に價格が安くなつて来る。

それから甲込に比して、單に絹物襪襦が加つてゐるから品質の悪いと云ふのではなく、實は乙込の方はヨゴレてゐる。それをその儘製紙會社に廻すのだから、製紙會社ではその儘それを原料釜の中に入れるには、あまりに泥や、ゴミがついてゐるので、畢竟それを綺麗にする手數が要る。甲込の方は割合上綺麗であると云つても原料釜の中で煮沸すると、釜の底に相當の砂や泥が沈んでゐるのに、更らにそれを、ヨゴレて居る乙込と來ては、逆も仕様のない程のものがある。

よしや紙に漉く時には、既に砂や泥は重みがあるから下に沈澱してゐて、紙の中に交つて共に漉かれては行かぬやうに思はれるのであるが、實際はさうでなく、砂や泥が多ければ多いだ

け、紙の中に加つて行く事となるから、出來上つた紙が砂や泥のために、品質を粗惡にする事は常識でも判斷し得られるであらう。斯様な状態であるから、甲込と、乙込とは天地の相違がある。随つて問屋仲間の賣買價格も、天地程の差があらうと云ふものだ。今甲込、乙込共に製紙會社へ行くので、是を使用する會社は、甲込の處で述べた三製紙會社だけである。

第三節 白 一 枚

白一枚——とは白襪襦一式の事で、前二者、即ち甲込本調、乙込本調の際に選り出された白木綿のみの謂であつて、少しでも絹物は混入されてゐない。その價格は一貫目三十八錢から四十錢を呼んでゐる。それは何うしてかと云ふに、前二者に比較して製紙原料として、上等の白西洋紙が漉き出されるからである。それに紺や、淺黄色の色を漂白する手數も要らず、單に晒しざへすれば、それとて眞白にする必要がない故、製紙原料にしては上等物である。

随つて上等の白洋紙となつて来る。目下利用先きでは、三菱製紙を筆頭として、日本紙器製紙、高砂製紙會社が、白襪襦の產出額の過半を利用してゐる。

然らば是だけの利用しきやないか——と云ふに決してさうではない。更に製綿原料となつてゐる。此白ボロを機械で掻いて終ふと、稍や色の黒い、そして足のない綿となる。一寸説明するが、足のない綿と云ふのは、普通の綿の木から綿にしたもの、やうに、繊維の長さがないケバのやうにふんばりとしてゐるだけだ。それ故に此綿に足があるとか、無いとかと言はれてゐる。

故に足のある綿であれば、細い木綿糸を繰り出して、それで機を織ると、即ち反物になるが、残念ながら此ボロから製出した綿では足がないから、細い糸にはならぬ。して出来ぬ事はない。そのボロから出た綿の中に新しい綿を四割とか、若くは等分と云ふ風に、そのボロから變化した綿の足の有無の程度に應じて、新しい綿を混入して、糸を繰り出せば、立派に細い糸が出来て、再度反物に織る事が出来るけれども、何分にも白ボロと言ひ、手垢も、日光焼けもしてゐるから、着て新しい白綿の小切とは色の程度が違つてゐる。それだけに綿にしても純白と云ふ譯には行かない。多少の黒味を帯びてゐる事は免れない。尤も純白にして出来ぬ事はない、薬品を以て漂白すれば好いのであるが、左様な手数と費用をかけて、而も新

らしい綿を混入して糸を繰り出して、織つてみた處で、生産費が徒らに高まるのみで、反物になつてから後、着物にして丈夫かと云ふに、既に糸になる前綿に足がない物だけに、決して丈夫な糸になつてゐない事は明かである。糸そのものが丈夫でないのであるから、それだけ反物に織つた後として、それが丈夫であらう筈がない位は、常識的にも考へられる理明の事實だ。然るに新しい綿から糸を取つてやれば、品物が丈夫で、第一漂白だのなんのと云ふ手数がなく、ないだけに生産費が此場合、前者に比して安い。而も我國に綿の木がないのではない、それに印度南洋方面からも相當輸入があるから殊更に多額の費用と手数とを要する廢物利用をする必要がない事となる。

それ故に反物を織るやうな木綿糸に利用はしてゐないが、足のない綿として、稍や太い糸を造るのだ、それは普通の木綿糸の五倍から八倍もあらうと云ふ太い糸で、それを三つに撚つて終ふと相當丈夫な木綿糸となる。それを何にするかと云ふに、室内電燈の紐にするのである。

今や世界各国共に電氣の民衆化とか言つて、總ての物を電氣の熱を利用してやらうとしてゐ

る事は、讀者諸氏の熟知してゐられる事實である。電氣と言ふものが我國の家庭、殊に都會を第一として使用され出して、未だ二十年餘にしきやならぬ。が我國の文化の進歩に随つて進歩して來たものでは、何んと言つても第一に電氣である。此電氣事業は戦時と平和とに關係なく發展して行くばかりで、將來永遠に電氣利用の停止と云ふ場合があるまいとまで言はれてゐる。

故に都會の電氣化は、やがて山間僻地の電氣化と進んで行つて、年々地方から電氣會社の新設許可願の出づるのを見ても此間の消息を物語つてゐるのである。故に白ボロが綿に變じて、それが絲となり、やがて室内電燈の紐となつて行く——と云ふ此利用は先途益々開拓の餘地があるのみならず、現今でも年々此方面の白襪利用率が頗みに増加しつゝあるのだ。

現在の處では白襪の産出額と、電燈紐の利用率とが正比例してゐないから、過半数は製紙の原料として製紙工場に廻つてゐるが、將來電氣の實際の民衆化が行はれるに至らば、此白一枚と稱する襪の利用先は遂に電燈紐のみの獨占する處となるであらう。

製紙原料として此白一枚が賣買される時には、仲間相場で一貫目四十錢内外 製紙會社へは

四十五錢から五十錢にしきやならぬが、電燈の紐の方面に廻はる時には、綿とされたゞけて、一貫目が屑物商の賣買が八九十錢となり、一度絲となれば一圓五十錢を呼ぶのであるから利用と云ふものゝ上から觀る時には、白襪の總てを此方面に廻はしてこそ有利となるのだが、現在は電燈紐としての白襪の需要に何倍して、襪の産出が多数のために餘儀なく製紙原料となつてゐるのである。

第四節 黒 一 枚

黒一枚——前者の白一枚に對して、此方は黒一枚と言つて、紺襪一式を言ふのである。勿論絹物なしの、木綿物ばかりを言ふので、前の方に述べた甲込本調、乙込本調を行ふ際に、選り出されたもので、少なくとも三四寸四方大以上の稍や大ボロばかりである。前者の白一枚は漂白の手数が要らないで、一貫目の間屋相場が四十錢内外なのに、此黒一枚の方は四十四五錢で、白一枚よりは若干高い。

素人には不思議に考へられるのであるが、それにはそれだけの理由がある。此黒一枚は、前

述したやうに紺襦袢一式であるから、茲に染料の重鎮と言はれてゐる藍を抜き取るのだ。尤も現今の織物で天然藍で染めた反物などは極めて數へる程しきやない。多くは人造染料で染めたものである。先づ素人にも分るものでは一般緋りものは、大抵植物性の藍で染めたものと見たら好いが、それでも人造染料を混入してあると云ふ事である。それ故に藍を抜き取ると言つても、人造染料は抜けない、植物性の物は絶対に不滅である。

此人造染料でない、植物性の藍が絶対に不滅である事と、その抜き取る方法は、後段に『藍ポロ』と云ふ欄で詳述する事にして、茲ではそれを省略して、唯だ植物性染料で染めたものか、又は人造染料で染めたものかを、素人的に判断する方法を一寸お話ししてみやうと思ふ。藍と云ふものに對して多少の知識を有つてゐる人であるならば、その反物の匂ひを嗅いで、是が植物性あれが人造染料位の事は判断し得らるゝものであるが、普通の人は却々匂ひ位嗅いだ處で、藍本來の性質を知つてゐないのであるから、よしや二つの匂ひを嗅ぎ得たとしても、それが何れを植物性のもの、何れを化學性のものと断定を與へる事が出来ない。左様な人々のために、一番分り易い方法は什うするかと云ふに紺ポロを銀の煙管の上でも、又は白い板の上

でも好いから乗せて、火を點じてみる。植物性の染料のみで染めたものであれば、火は順調に燃えて行くのみならず燃え終つた後に、銀の上、又は板の上に黒光りのした藍が残つてゐる。然るに人造染料で染めたものであるなれば、火を點じても植物性染料のみの物のやうに、順調に燃えては行かない。途中で火が消えて終ふ。よしやそれを更に火をつけて燃しても、その後藍が残る様な事はない。尤も少しも植物性のものが混入されてあれば、あるだけのものが残るが、それは燃した襦袢の量に比して藍の残りの尠少な事に於て知る事が出来る。

よく私共は老人から次のやうな言葉を聞く『此頃の反物は外観ばかりで、實用にならぬ、私共の若い時分の着物は親から子が着て、更に孫が着ても大丈夫だ、その位の物なんぞは薬にしたくもない——そして昔の呉服物は洗濯をすればする程、その物本來の光澤が出るのに反して、近頃の物は一度水を潜らせると、ペラ／＼になつて終ふ。甚だしきは雨に打たれても、色が變つたり、縮んだりして終ふ。それで値段は昔の物の何層倍だか知れたものぢやない——』斯くした老人の悪評は現今の呉服物の一つとして免れる事の出来ない處である。何故に斯様に呉服物が弱くなつたか——それは何れも染料の關係が最大の原因をなして居ると云ふ事が出来

る。木綿と云ふものは植物性である。然るに往時は植物性の染料をのみ使用したので、木綿が性来有つてゐる脂肪が少しも妨げをしないで、充分に染料がつく。

處が人造染料になつて來ると、染られる物體、即ち木綿が植物性なのに、人造染料は礦物質から製造したものであるがために、物體同志が單純で融和する道理がない。已むを得ぬから木綿本來の脂肪を取り除いて終ふ。尤も例外もあるが、そして無理に染色をするために木綿の質が脂肪を除かれる故に粗惡になつてゐる。處で無理に人造染料で染色するのだから、自然的に同様の性質を取り合した植物性の染料で染めた物と品質が異つて來る事は當然の結果と見なければならぬ。

更に植物性の染料で染めたものであると、水に入れ、ば入れる程、光澤を増して來るし、染料のつきが一層によくなるから、所謂「洗ひ晒し」物とは見えぬやうになるのだが、人造染料では染色時に無理が行はれてゐるのであるからして、水に逢へば木綿も、又染料もお互ひの地質を現はして、無理な融和から離れて來る。故に染料は落ちて終ふ。木綿は最初に本來の脂肪を取除かれてゐるから、そこに光澤の出やうもない。結局洗ひ晒し物の名稱を免れる事の出來

ぬ事となるのだ。

是を最も好く立證してゐる物は、現在では久留米緋あるのみだ。久留米緋は木綿物でこそあれ、決して絹物ではない。然るにその價格は銘仙以上の價格を維持して平然たるものだ。それがと云ふのは染料が植物性であるのみならず、染色の方法も他のものとは違ふさうであるし、木綿も幾分か普通の緋地とは違つてゐる。で實用本位のもので、少しく好い久留米緋ならば、それこそ老人の言葉通り、親が着て、子に廻はり、孫に至つて廢物となる位の事は誰れても知つてゐる事實だ、而も洗濯の度毎に新しい物以上の光澤を現はして、地合が好くなる。是が久留米緋の特色であるし、又今日日本綿物の癖に絹物同様の値を貪つて平然としてゐられる原因なのである。

お話が傍き道へ外れて終つたが、兎に角植物性の染料と、礦物質の染料、即ち人造染料とは右様にまで差があるのだ。されば今日黒一枚と稱する紺襦袢の中には、藍を抜き取る事の出来るものも、又出來ぬものもある。で此襦袢の中からは餘り藍を抜き取る事をやらない。それと云ふのは前述のやうな有様で、その多數が人造染料であるから、若干の植物染料を抜

くために、厄介な手数をかけるよりは、此儘製紙原料に廻はして終ふか、又は前に述べたやうな方法で綿にして終ふのである。

而してその綿は眞黒なものであるから、綿にする譯には行かぬから、その綿を紙に漉いて終ふのだ、と云ふと不思議に思はれる事であらう。直接に紙の原料として廻はして終へば好いものを、一度綿にして又紙の原料にしくなくても好さそうなものと考へられるのであるが、直接に紙の原料とする場合には、甲込、乙込同様、漂白して西洋紙となるのだが、一度綿としてから紙にする時には、普通の西洋紙とするのではない。黒フランネルの使ひからした物のやうな、ケバのない紙とするのである。一見して紙であるか、綿であるか、又はフランネルの偽物だから分らぬやうな紙となるので、その用途は絹物の反物の芯となるのだ、と言つたら絹物を新らしく買はれた御婦人なら直ぐ首肯される筈で、反物の地合を痛めずに、ふんはりと重を見せるために、銘仙物以上の反物の巻き芯になつてゐる。それはボロから製した綿、綿から造つた紙なのである。そして關東方面の需要先はと見れば、東京板紙會社、王子製紙會社等がその重なる使用先である。

第五節 器械截新白

器械截新白——とは普通一般の家庭から出るものでないから、一寸何んであるかお分りがなからうと思ふ。是は足袋屋から主として出るもので、足袋の底を器械で截斷したその端、又は子供の『油屋さん』などを器械截斷をやつた時の端で、總て新しい白い小切の事である。是は使用したもの、小切れてないから、純白であつて漂白する必要がない。て利用は多く足袋の底となるのであるが、何れの國でも利用してゐるか云ふに、決してさうではない。尤も廢物利用でなく、新しい綿から絲を取つて、織り出した『天徳』と稱する足袋底ならば、それは各地で織つてゐるが、廢物利用をして、新しい絲から造つた『天徳』と同様に賣り出してゐる處は、日本廣しと雖も、三州岡崎地方のみに限られて居る。

然らば如何なる方法で織り出されてゐるか云ふに、此新しい白切れを、機械で掻く、即ち足袋の底の端つことか、又は普通の晒木綿の切れ端の形を崩して、それを綿にして終ふ。そしてそれで絲を造るのだが、前の方でお話したやうに、斯様にして出來た綿は、所謂新しい

綿のやうに足がない。そのために細い糸は取れない。故に太い糸を取つて、それを一分位の厚さに織る。つまり足袋の底を見られたならば、誰でもお分りになるであらうが、あれは細い糸で織つたものを貼り合したものではない、何れも一枚織りになつてゐる。つまり糸が太いから一枚織りにしても、あれだけの厚味をもつて来る。綿としては足がないのだから、少しも丈夫でないし、又糸となつても、太いと云ふだけで、是又丈夫であらう筈がない。

併し物事は一と云ふ單位では弱くても、二となり、三つと合すれば、相當の力を有つて来る事は、三歳の童子も知る原理だ。此意味に於て弱かるべき糸が、此度は厚い一枚織りとなつて、相當の力を有つて来る。又もお話が枝葉に移る嫌ひがあるが、所謂新しい綿から取つた糸で織つた足袋底、天徳の上等の足袋底は可成りの強さがあつて、足袋の表が破れて穿けなくなつてゐるにも不拘、底の方は未だ完全になつてゐる。然るに廢物利用に依る足袋底は表の方よりも、底の方が先きに破れて終ふ。

よく世間では下駄の木目の關係などと言つてゐるが、實際はさうではないのである、廢物利用に依つて出来た足袋底と、新しいものとの差に於て、底の破れが早い、遅いかに分

れるのである。

それでは廢物利用から来た底か、又は新しい底かを觀別するには仕うか——と云ふにそれは却々素人がみたのでは分らない。結局信用ある店舗の高い足袋は、新しい底を使用してある物と考へるより途はない。

東京市内に足袋屋が何軒あるか分らぬ。而もその店舗毎に足袋の値が多少宛なり高下がある。何んにも知らない世間の人は、あの店は高いとか、此店は安いと言つてゐるが、實はその材料の如何から究めて、高い安いを言ふべきであつて、盲斷的に言へぬのである。

更に一步進んで木綿の九文半が、普通の足袋では五十錢以上からしてゐるのに、銀座の露店、牛込神樂坂上の露店、芝の赤煉瓦の露店、淺草の雷門前の露店等に行つてみると、晴天でさへあれば毎晩のやうに、夜店の足袋屋が出てゐる。而も木綿の足袋一足二十錢から、高くて二十五錢に賣つてゐる。普通店舗を構へてゐる足袋屋で買ふ値の約半値である。此事實は何人でも意外とする處である。

或る人はそんな安い足袋は古足袋とか、又キツ足袋を瞞着的に賣るのだらう——と云つてゐ

る人があるが、事實は違ふのだ、何れも廢物利用の結果出來た足袋であつて、古足袋でもなければ、又はキヅ物でもないのだ。唯だ足袋の表から裏、爪から底まで廢物利用されて出來た品物で造つてある事だけは事實だ、それ故に店舗で五十錢以上に賣つてゐるのに、一方は辿ひ露店とは言ひ條二十錢や二十五錢で賣れる道理がない。是は總てが廢物再生品を材料としたものであるが、大道の露店でなく、堂々と店舗を構へてゐる足袋屋でも、木綿足袋一足について十錢位の高下がある。高いのが暴利を貪ふると云ふのではなくて、安い方が、足袋底だけでも三州岡崎から出る廢物利用の再生底を使用してゐるからなのである。

それから又岡崎地方では、白小切を總て足袋の底にしてゐるかと思ふに、決してさうばかりでもない、その足のない綿の中へ、二割とか三割の新しい綿を入れて、細い糸を繰り出して晒木綿を織り出してゐる。一反一圓以下の晒木綿などは多くは、此岡崎地方から來る廢物利用の結果物である。

第六節 淺黃立屑

淺黃立屑——是は普通の家庭からも出るが、それは極めて微々たる數量であつて、家庭から出る物ばかりでは産業的に利用するには餘りに貧弱である。で主として足袋屋から出るのだ。つまり足袋裏の切端とか、又は腹掛けの裏を截斷した時の切り端とか、乃至は淺黃股引の切り端と言つた風である。

是もその行先は三州岡崎地方だけに限られてゐて、前者同様に綿とする。處が前者は晒木綿とか、又は足袋底に織り出すのであるが、此方は新しい綿を若干混入して即ち細い糸を繰り出す。それを紺とか、又は黒糸に染めて、縞木綿を織るのである。

茲で一寸お話を他に移して、木綿吳服の事をお話して此廢物利用の黒或は紺糸の需要の如何に多いかを、讀者に想像の出來るやうにお邪魔しやう。

その以前木綿物の事を『東京双子』と稱して、木綿の中へ若干の紺糸を入れて、一見絹物の如き光澤を見せてゐたものがあつた。是は實用本位の物であつて、最も需要の多い代物である、處が現在では此『東京双子』なる名稱がすっかり廢つて『近在物』と名儀が變改されて終つた。其處で一口に近在物と言つても、實は二種類に區別されてゐるのである。即ち『着尺物』と『實

用切』であるが、茲では『着尺物』の事だけのお話に止めて置くけれど、着尺物とは着物用の二丈八尺以上の長さの織つたもので、實用切と云ふのは、一丈とか、一丈五尺に短かくしたもので、つまり子供の着物、二ツ身とか、三ツ身を縫ふに必要なだけの切れに織つてあるから、實用切れと言つてゐるのである。

東京双子と云ふ位であるから、言ふまでもなく東京を中心にして、その附近から織り出されてゐたものである事は分る。それが近年に至つて『近在物』と名稱が變つたと云ふのは尾州物（愛知縣下の織出品）又は遠州物（濱松を中心としてその周圍から織り出されるもの）等が盛んに東京双子を駆逐して終つたので、所謂東京双子の名稱がなくなつて、近在物と云ふ新名儀となつたのである。て現在吳服商仲間て言ふ、總括したる近在物と云ふのは、以上の如き地方から織り出されるのであつて、何れも高貴、お召、米澤織、越後紬、銘仙等の縞柄を土臺として、縞柄を模倣して織るので、一寸觀は木綿物と思はれぬ程、巧妙に、絹物に似せてあるのが、此近在物の特色なのである。であるから昔日の『東京双子』と言はれた當時の縞柄とは全然、その趣きを異にしてゐる。故に交通の不便な山間僻地に行くと、所謂近在物が、新銘仙とか、瓦

新銘仙と云ふ名目の下に、非常なる高値で、而も羽が生えたやうに飛んで行くのである。近來銘仙の需要が著しく増加したと、誰も口にし、又耳にする處であるが、總括的に近在物の需要の増加した事は、更に驚くべきものがあるのだ。

お話は本問題に立ち戻つて、淺黄の立層から出來た、紺絲、又は黒絲は、此近在物の材料として前記の方面に盛んに賣り捌かれるのである。それ故に淺黄の立層は全國から此岡崎に集中されて、所謂近在物の織絲と化けてゐるのだから、此淺黄の立層の用途は實に偉大なものがあると云ふ事が出來やう。

よく世間の人が斯慶事を言つてゐる。新銘仙や瓦斯銘仙は外觀は好いが、本場物程丈夫でない。さればとて木綿物よりは値が高い——と言ふのだが、實際は木綿物なのを、不正な吳服商人が新銘仙であるの、やれ瓦斯銘仙のと勝手な名稱を附して暴利を貪つてゐるのであつて、買はせられる方が實は馬鹿にされてゐるのだ。そして實用本位ですと吳服屋では言つてゐるが、何んぞ計らん不實用な事夥しい。と云ふのは一方に廢物利用に依る足のない綿から出來た絲を織り込んであるから、扱て使用の段取りとなれば不實用となるのが當然と云ふ事になるの

だ。以て淺黄立屑の行衛が分りてあらう。

第七節 古朱子屑

古朱子屑——是は餘りあるものではない。それは全體の數としては、産業的に利用し得るだけの量になるけれども、木綿襪のやうに不斷的に出るものでない。そして利用の範圍も極めて狭い、それだけ問屋相場では、一貫目十錢内外である。

利用としては、先づ機械で掻いて、細い糸として、綿セルを織る時に混入したり、或は綿羅紗を織る際に、共に織り込んで、多少の光澤を見せる材料とされてゐる。朱子は非常に光澤のあるものだから、毛等に混入されると底光りを放つて、素人眼を瞞着するに好い。

更に綿にもする。此綿は多くは安座蒲團とか、安夜具の綿に使用される。其他には製紙原料ともなる。此製紙には二種類ある。一つは西洋紙の原料となるのと、今一つには便利瓦となるべき、紙にも漉かれるのである。其處で餘談ではあるが、便利瓦の製造法を常識的に簡單にお話しやうと思ふ。

便利瓦——と云つたのでは御存知のない方があるかも知れない。それは極めて最近發明されたものであるけれども、茲四五年以前から著しく需要を増加して來たもので、十五箇年間は雨漏りせぬと云ふ保證付で、何々便利瓦と云ふそれ／＼製造元の勝手な名稱を附してはあつたが、何れも同一のものである。室内の板の間に敷詰められてある、マルソイド、ペーパーに似たもので、本來の性質は紙である。くる／＼巻いても、ひねつても折り切れなどはしない。其處で此便利瓦の製造法を説明してみるに

新聞屑

四割

毛織

六割

を材料として、部の厚いフランネルのやうな、ふんはりとした紙を漉くのだ。それをアスファルトの溶解中に潜らせる。するとその紙の表面から、内部深くアスファルトが泌み込んで、耐水の力を得るのだ。

元來紙と云ふものは、堅く漉くべきもので、堅ければ堅い程、漉きが好いとされてゐるのだが、此便利瓦の場合の紙は、軟かく漉くのである。何故と云ふに軟かく漉かないと、アスファ

ルトが内部深く泌みて行かない。單に表面のみがアスファルトで固つても、内部にまで至つて居ないと、十五箇年間保證なんて事は出来やう筈がない。先づ便利瓦の製造法は此位に止めて置くが、前記の『毛織』六割と云つた、此『毛織』なるものが、何んであるかをお話して置かう。古朱子の屑を綿にしたものか、又は普通の古綿の打ち返へしに際して、弓で打たれて、固つてゐるものを解かれる時の、風の煽りてゴミと同様に、周圍に綿の毛が飛散する。それは綿ともならぬもので、是を『風綿』と言つてゐる。が是と同様の意味に於て、毛織物工場等で毛を織つてゐる時に、風に煽られて飛ぶものに『毛織』がある。それから羅紗を織り上げた後に、織り込まれた纖維を立たせる。最初熊手式のもので、織り上げられた羅紗の表を引掻く、すると粗雑にケバが立つて来る。更にそれに向つて、ブラシで引掻く、すると萬遍なくケバが立ち上つて、外觀暖かさうになる。此ケバを立てる時に『風綿』と同様に、毛織が飛ぶ。是やそれから木綿綿から出る『風綿』等を混合して、便利瓦の紙を漉くのである。

第八節 赤 襪 襪

赤襪襪——は襪襪の中でも、可成りに量の多いものである。餘程大きな赤襪襪はなく、何れも二三寸位の程度の小襪襪に限られたもので、木綿ばかりである、一貫目屑屋の間屋では僅に十八錢位であるが、扱て利用の途は決して僅少ではない。

併し需要地は三州岡崎の地方であつて、例に依つて綿にする。勿論赤ボロであるから、その赤をその儘にして赤綿として、それから新らしい赤綿を若干混入して、赤の木綿絲にする。細絲である事言ふまでもない。而して前に『淺黄立屑』の項目の中で説明したやうに、所謂『近在物』の材料として機屋に賣り捌けるのである。

それから今一つの利用方法はと云ふに、赤い絲にせずして、赤い綿の儘製紙工場に廻はして、呉服物の芯紙とする方法もある。

次には新らしい赤綿を加へずに、廢物利用の足のない赤い綿を、太い絲に造つて、多少の燃りを加へれば、絲として用ゐられる、勿論普通の絲としてではなく、その絲で赤毛布を織るのだ。若干の毛を織り込むには織り込むが主として、木綿が多いただけに、二枚續き三圓五十錢乃至五圓位の、田舎行きの赤毛布は、何れも此赤ボロから製出された、綿絲に依つて織られたも

のと見たら好いてあらう。

此織り上げられた後で、前項の『古朱子屑』の處で説明したやうに、熊手様の物で、織り込まれて潜んでゐるケバを引き出し、更にブラシで搔く時には、ふんはりとケバが立つて、素人眼には上等な赤毛布の如くに見えるのである。而も純毛のやうに、何處か皮膚を差すやうな癬がなく、手觸りが暖かに來るから、地方の人達は、第一に値の安い事に惚れ込み、第二に純毛の毛布よりは觸感が好いので、一も二もなく惚れ込んで終ふのた。

第九節 上麻ボロ

上麻ボロ——は純日本麻の屑の謂であつて、品物が出る割合に、需要が豊富である。何故と云ふに是はライスペーパーと言つて、巻煙草の巻紙に製出されるのである。で我國で此ライスペーパーを漉いてゐる處は、大阪の東洋製紙會社、それから静岡縣下の富士川のほとりに同會社の分工場があるが、此二箇所、日本全國の日本麻の屑が集中されるので、此ライスペーパーは民間には一枚もなく、何れも大藏省へ納入される。つまり煙草專賣局に廻はるのである。

品物が出る割合に需要が多いだけに、その問屋相場も却々好い値を示してゐて、一貫目が一圓四五十錢で、世の中の景氣不景氣に關係なく、此日本麻の屑の値はその割合に變動がないと云ふ事である。

其處で此ライスペーパーと、日本麻の特長について序ながらの餘談をするとしやう。煙草と云ふものは、何處に味があるのか、煙草吸ひに問ふても確然とした返答は出來ない。故に一種の習慣だと言へばそれまで、あるが單純な習慣だけでもないのであつて、實は口や筆で言ひ現はす事の出來ぬ妙味があるのだ。

そんなものであるから、煙草の煙りを少しでも變化せしめるやうな事があつてはならぬ。處が普通の紙には何かと變んな匂ひが伴ふものである。紙その物でさへ一種の匂ひを有つてゐるのに、更にそれを燃やすのであるから、匂ひは煙草の煙りと同時に口中に這入つて來る事となる。試みに西洋紙なり、日本紙なりを火の中に投じてみれば分る。日本紙では所謂『キナ臭ひ』と言つて、著物でも燃えるやうな、非常に強い匂ひを發する。又西洋紙とても、日本紙程の匂ひではなくとも、是又一種の惡臭を放つものである。

處が煙草をその若干なり匂ひのある紙に包んだのでは煙草本来の匂ひが、紙の匂ひに消されて終ふ。のみならずそれは如何な煙草好きな者でも、それを我慢する事は出来るものでない。それに今一つには紙の燃える速度と煙草の燃える速度とが同一でなかつたならば、巻いてある紙が先きに燃え切つて、中から未だ燃えない煙草が落ちて終ふと云ふやうな事になる。故に火の走る速度と同一にする上にも、此日本麻を原料とした紙でなければ、巻煙草の巻紙には絶対に使用する事が出来ないものである。それに就て昔から我國で、無意識に麻繩と火とが都合の好いものである事を物語つてゐる事實がある。

それは今でこそ現品はなくて、講釋師の話の中より出て来る位の種ヶ島といふ火繩鐵砲があつた、此種ヶ島なる火繩鐵砲の火繩であるが、是は最も質の好い日本麻を固く撚つた繩であつた。普通の繩でも好さうに思はれるのであるが、前にも述べたやうに、他の物では「キナ臭ひ」匂ひが周圍に散つて終ふ。そのために敵の陣地に近づくのに不便である。更にその悪臭のため、如何なる處で鐵砲を所有してゐる人物が、潜んでゐるか直ぐに看破されて終ふ憂ひがある。ために無臭の物を使用する必要上、此麻繩を用ゐたものであると同時に、他の繩では火の

走りが早いから、ぐづ／＼してゐる中に火繩の繩が燃え切つて終つて、肝腎な時に役に立たぬと云ふやうな事があつては困るので、日本麻の繩を使用したものである——と云ふ事が古書に認めてあつた事を、私は今記憶してゐる。

それで煙草の巻紙たる、ライスペーパーの原料としては絶好のものであるが、若し多少なりとも不純なものが、あつたら最後、到底キナ臭くて、その紙で巻いた煙草は吸ひるものでないさうで、随つて屑だから好いと云ふので、他の物を一物たりとも混入は出来ないさうである。又會社の方でもその間の事情を知つてゐるから、原料として受取る時には、非常なる嚴密の調査をして、純日本麻のみでなければ、受取らぬとまで言はれてゐる。

で一般の家庭からは餘り日本麻と云ふものは出ない。多くは下駄の鼻緒製造業者から出るさうで、其他は下駄屋が鼻緒をすげる時に、兩端を切る。此結果昨今の下駄屋では鼻緒のすげ方が餘程變つて來た。以前は鼻緒の芯として入れられてある麻を全部、下駄の裏の方へぐる／＼巻きつけて、出来るだけ固く結んだものであるが、此麻繩の屑が一貫目一圓四五十錢からの値で、屑屋に賣れるやうになつてからは、下駄屋は何れも狡猾になつて、以前のぐる／＼巻を止

めて、二箇所に駒結びにしたのみで兩端を切り落して終ふ。是は日本麻がライスペーパーの原料となる事を知るや知らずや、その邊は私に言へぬけれども兎に角、日本麻の廢物利用の絶大な影響の結果であると言ふ事だけは斷言し得るのである。

第十節 二 番 麻

二番麻——とは前者に比して、品質の悪いものであるが、純日本麻ばかりではない。麻紐、南京麻、半綿麻等の層が、種々混入されてゐるものであつて、前者のやうにライスペーパーにする事は不可能である。それでその用途はと云ふに製紙の原料にもなるが、それよりは左官屋の手に廻はして、壁の中に入れる『寸莎』にした方が、有利な利用方法とされてゐる。此壁の中の『寸莎』と言つても、素人には如何なるものか分らぬであらう。故に少しく壁の常識をお話する事にしやう。

一口に壁と言つても是には幾種かに上中下がある。随つて材料も又それ／＼異なる、と云ふよりは配合の點に相違があるのだ、材料の名前を列記してみるに、大體下の様なものである。大

津、晶石、蔦、蠣灰、赤へナ土等を適當に配合するのである。而して壁の色澤を出すものには、キンガラス、桐の煤烟、松の煤烟、黒磨（是は主として黒壁土廠に使用されるものと定つてゐる）磐城墨、鼠、淺黄等の染料が、前記の材料の適當に調劑された中に混入される、勿論價格に應じて變化があるし、茶人等になれば、茶室の工合に依つて、顧客自ら材料の配合を指圖すると云ふ有様である。

て壁と言つて色こそ違ふが、何れも同様土を固めたもの、やうに思はれるのであるが、壁の性質に依つて、左官屋には左官屋共通の壁の名稱がある。即ち小笠原、茶根岸、鼠根岸、松の霜、金星、孔雀、青具、焦茶、モロコシ、錆茶等である。此他にも名稱のない上等の壁もないではない。それは前に並べた名稱の壁の中へ、顧客勝手に他のものを混ぜて、所謂顧客勝手な壁にするから、左官屋には何んと云ふ名稱を附して好いか分らぬやうな壁が出来上つて終るのである。

壁の製造法は私が説明するまでもなく、讀者が屢々目撃して居られる處である。が前の『寸莎』と云ふのは、單に蠣灰や、赤へナ土、大津等の材料で練り固める事は出来るが、壁として

塗り上げてから、土の塊りになつて落ちて終ふ。それを防ぐものは、寸莎である。それは土から土の連絡を取るものであつて、是があるがために土の塊りとして落ちて來ないで、假りに壁を抜く場合には一坪なり、半坪なりが、一塊りとなつて落ちるのは此寸莎故である。

言葉を換へて言へば紙の中の纖維と同様な譯のものである。此二番麻を『寸莎』に使用する壁は、普通家屋の羽目壁などには使用しない、少しく上等物の壁にするのである。であるから間屋の價格をみれば、上等の麻ポロが一貫目、一圓四五十錢を呼んでゐるのに、此二番麻は一貫目僅に上麻の割以下の十二三錢で賣買されてゐるから、その相場を透してみる時には、甚だ用途としては愚劣なものに考へられるのであるが、決してさうではないのである、なる程上麻の利用と比較したならば、それは天地の差があるけれど——。序であるからお話して置くが、最近壁の中塗りにアスファルトを利用する事が發明された。外國あたりでは今を盛りと流行してゐるさうで、我國でも近來是を行ふ處も次第に増加したと言はれてゐる。それは『古朱子層』の項目中に説明した、便利瓦の製法を、壁の中部に應用したものであつて、斯くすると話聲が壁を透さぬさうである。故に電話室の壁の中などへ、所謂『便利瓦』を貼り込んで、壁の上塗

りをすれば、如何なる大聲を發しても外部に洩れぬとの事である。

第十一節 藍 ポ ロ

藍ポロ——是は屑屋仲間では最も喜ぶものである。さりとして藍染のポロでさへあれば、何んでも好いのかと云ふに決してさうではない。植物性の染料で染めた藍ポロであつて、木綿のみに限られたものである。是は普通の家庭からポロ一式で賣り拂はれたもの、中から、是だけを選り分けて終つたので、主として藍を抜き取るためのポロである。然らば此藍を抜き取る方法は什うするかと云ふに、簡單にお話する事にする。

先づ前記の藍ポロを大きな釜の中に入れて、百度以上の熱を加へて煮沸する。すると染め込まれてある藍が落ちて終つて、中の湯が藍のために、紺屋の藍壺の中にポロを入れたもの、やうに、藍水となつて終ふ。而も二時間三時間と長時間になると、それが段々水蒸氣を發して、味噌汁程度の濃厚さに藍水が、ドロ／＼となつて來るのだ。その位になつた處へ硫酸を加へると、藍は硫酸と結びついて、水と分離する。水は比重の関係で上に、藍は次第々々に沈澱して

終ふ。その際に硫酸を入れる以前までは、眞黒な味噌汁のやうであつた、ドロ／＼が此度は硫酸のために、水が本来の性質を現はして、藍と分解して、上部に清水となつて浮いて来る。而も一點の汚物をも認める事の出来ないまでに清らかな水となる。それは殆んど山川の流れ水のやうに立派な水に見える。

斯様になつた時に、その上澄みの水を杓子で汲み取つて終ふ。更に第一圖の如き桶に入れる。そして時間の経るに随つて、藍が沈澱して行く、水は上に残る。で第一圖でみらるゝ桶の外部にある。第一の孔から水を外部に流さして終ふ。又一定時間を経ると、第二の孔のあたりまで藍が沈澱するから、その孔から上の水を外部に出して流す、此を數回反覆して行く中に、全然水體が無くなつて来るのだ。

第一圖



第二圖



次で第二圖で見らるゝやうな、漏斗やうの布袋に入れる、すると此度は水は藍と分解される毎に、自然的に外部へと流れて終ふ。そして全然此布袋から水が流れなくなつた時に、それを絞ると内部深くあつた水までが流れ出て、茲に水氣の少ない藍の軟かい固形體が残る。それを袋から出して、日光に晒す時には、立派な藍となつて再び市場に高價を呼ぶのである。

米が一斗二圓位で買へた、大正元年頃には、總ての物價も安かつた。その當時でさへ、一斗入りの石油の空罐一杯が、驚く勿れ百二十圓と云ふの高價であつた。次で歐州戦争が開始され、獨逸から安いタール染料が来なくなつた。我國では化學染料の製造が充分に行はれてゐなかつた頃だけに、昔日來の植物性の染料が、その需要を更に増大して來た。以前は植物性の染料と云ふものは我國では、各地方で藍の草を植えて造つてゐたものであつたが、獨逸から安い化學染料が来るやうになつてからと云ふものは、植物性の染料は全く市場から追はれて終つた。それに米價は上る一方であるが故に、地方の農民は、需要の減る藍などに勞力を空費するよりは、先づ米作の方が割に合ふと云ふので、家代々藍の草を植えて藍を造つて來た家でさへも、普通の米作だけにしたと云ふやうな工合になつてゐた處へ、獨逸から來なくなつたから、

今更に植物性の染料が、又しても人氣を挽回するに至つたのであるが、扱て人氣は挽回しても、右から左へと直ぐに間に合ふ筈がない。それ故に藍ボロから絞り取つた藍の需要は絶大なものになつた。故に大正元年頃には石油の空罐一杯が百二三十圓であつたものが、大正四年頃には、一躍して三百圓以上にまで騰貴して終つた。今日では多少値が下つたとは言ひ條、それでも百圓臺にある事だけは事實である。

それでは石油罐一杯の藍を得るには、一體什の位の藍ボロがなければ可けぬか、五百貫目の藍ボロがなければ出来ぬとの事である。

お話の序であるから蓼藍より藍の製造法を、極めて簡單にお話してみやう。我國では蓼藍と云ふ草の葉から取るのだが、此草は毎年二月に種を蒔いて、七月頃に刈り取るのである。それを日光に乾燥せしめ、その乾いた葉を土藏に貯藏する、時折適當量の水を注いで置く時には、自然に醱酵する。此を時々攪拌して一定の温度を保たしめる。斯くすると八十日位で、黒色の塊りとなる、是を蓼藍と言ふ。此を臼に入れて水を混ぜながら搗き固め玉藍とする。その玉藍の使用法を話せば、玉藍に小麥糟粥、飴、砂糖、甘藷のやうな醱酵素を養ふ處の滋養物と、石

灰とか木灰のやうなものをを用ゐて、醱酵を節するものを加へて醱酵せしめ藍建をするのだが、手續は地方に依つて多少異なるから今その一例を示せば、阿州藍十貫目を粉末とし、之を藍甕に入れ石灰八合、小麥糟一升二合、冷水五斗ばかりを加へ、尙木灰三升を混じ攪拌して放置して醱酵せしめる。て醱酵が進めば液面に紫色の泡が浮く、是を華と言ふ、是で醱酵が終つたので、適當の時期に石灰五合を加へる、此を中石と言ひ、又一晝夜放置後、止石と稱して石灰二合五勺を加へ、攪拌して更に温湯を追加して後數日で使用し得る様になるのだ。

次で木綿の染色法をお話するが藍甕の中へ入れる以前に、絲を熱湯中に浸してよく絞つて甕の中に入れ、約五分間にして引上げ、よく絞つて空気に晒す、乾燥したら再び甕の中に入れて染色しては引出して、空気に觸れしめ酸化させる、此を數回繰り返へせば好いのであるが、最初熱湯中に浸すのは斑點を防ぐためと、空氣の泡が入るのを防ぐためである。

餘談が大分長くなつたが、右の様な方法に依つて藍を抜き取つた後の藍襪は何うするか、それは後段に於て『藍ヌキ襪』の項目の際に詳しく述べる事とする。處で此藍をまだ抜かぬ『藍ボロ』の屑屋仲間の相場は、一貫目四十錢である。故に今五百貫目のボロを買ふとすると、二

百圓である。而して相當な手數と費用とを掛けて抜き取つた處の藍が、石油罐一杯が百五十圓する。その藍を抜き取つた後のポロが又値を呼ぶのだから、廢物利用中のオンリターと言はれてゐるのだ。此計算は「藍ヌキ襪」の項でお話する。

第十二節 新立紺ポロ

新立紺ポロ——は前の方でお話した「器械截斷白」とか、或は「淺黄立屑」と同様に、普通の家庭の紙屑籠から出るものは、殆んどないと言つても好い。然らば何處から出るか、結局足袋屋である。つまり足袋の表を器械截斷をした際に、端が切り落される——それを言ふのであつて、前二者と共に三州岡崎地方に送られるのである。

岡崎では例に依つてそれを綿となし、若干の新らしい綿を加へて、細い糸を造り、紺糸となし、所謂近在物の紺糸とするのである。一貫目の價格が二十八錢内外で、製紙原料として使用し得ない事はないが、それよりは岡崎に廻した方が、有利なのである。製紙工場へ廻せば、製紙工場では漂白しなければならぬ、それに反して岡崎では漂白の手數を省いて、直ちに機械

で綿にして終ふのだから、工業經濟から、又そのポロ屑の立場からしても、岡崎の方が好い利用なのである。

第十三節 麻 罽 網

麻罽網——は日本麻の極上等物で編んだものであるから、その利用先きはライスペーパーで、大阪の東洋製紙工場及び、富士川のほとりの同分工場に行く、即ち巻煙草の巻紙となるのである。故に價格も上麻ポロよりは一貫目について二十錢の高價で、一圓六十錢前後である。何故斯る値が違ふのかと云ふに、それは上麻ポロの方は不純物の混入があつては困るから、受渡しに際して嚴密なる検査を行はなければならぬのに反して、此方は大きな網であるから、前者のやうな検査の手數を要さないからである。

それに何人も知る如く罽は小さな魚ではない。大きいから餘程丈夫な網でなければ困る、況んや日本麻の中に多少なりとも、不純物を混ぜて編んだのでは、その處が直ぐ切れて終ふから、不純物を多少でも、混入する事は出来ない。殊に漁師の使用する網は多くは、その漁師が直接

に綱んで居るのだから、不純物などを加へてやるやうな事は決してしない。普通の綱屋が編んだものなれば、その位の不正を働かぬとも限らぬが、漁師は實用本位であるから左様な事は絶対にない。それだから安心して受渡しがつく。随つて二十銭内外の高價を支拂ふとても、結局時間經濟から打算すればなんでもない事となるのだ。

唯だ上麻ポロのやうに、純なものではない。つまり綱の長持ちするやうに、澁を塗つてある事と、それから鹽水を含んでゐる事と、魚臭ひ事だけが缺點であるが、それは製紙原料とする以前に、漂白するから、自然澁も落ちれば、鹽水も洗ひ落されるし、魚臭ひ匂ひも消えやうと言ふものである。故にライスペーパーとなつてから些々たる障害もない譯だ。

第十四節 麻 網

麻網——普通の麻網は前者の鱒網程、綱が太くないのである。細物であるが、純日本麻である事は言ふまでもない。併し鱒網程の上等の麻を使用してゐないから、問屋の賣買相場は、前者が一圓六十銭とすれば、約その半値の八十銭で、共にライスペーパーの原料として、東洋製

紙工場に納められて終ふのだ。

第十五節 綿 網

綿網——は説明するまでもなく前者の麻網に對して此方は本綿糸で編んだ綱である。利用法は製紙の原料以外には何んにもならぬ。同じ紙となつても、日本麻のやうに、ライスペーパーとはならぬ。西洋紙であるけれど、その西洋紙として決して上等のものにはならぬ。故に一貫目の相場は僅に、二十銭内外と云ふので、一般ポロと大差はないのだ。

第十六節 藍 ヌキポロ

藍ヌキポロ——とは前にお話をした「藍ポロ」から藍をヌキ去つて終つた後のポロの事である。言はゞ或る程度までの漂白を行はれたるやうなものであるから、藍をぬき取つたからとて、藍ポロと同様の價格で賣買されてゐるのである。利用先は製紙工場で、白の上等洋紙となる、而も歩減りが尠なく、砂やゴミがないから、紙質の好い紙になる。一寸素人がおかしく感ずる

事は、藍ボロが一貫目四十銭内外、此藍ヌキボロも一貫目四十銭内外とは腑に落ちない——と思ふ處であるが、藍ボロとても襦袢といふ點から行けば、藍ヌキボロの方が、直ちに製紙原料になるだけ、賣行きが好いのだ、けれども藍ボロには藍を絞りと云ふ事があるから、實は製紙原料として手数の掛る藍ボロが、手数のかゝらぬ値と同様に維持してゐるまでだ。故に藍ボロ五百貫で、藍を石油罐に一杯取れるとしてその一杯が百五十圓とすれば、結局藍を絞り取る（五百貫の）手数料として、茲に百五十圓の利益が産れるのである。つまり藍があつても、抜かれて後のものでも、一貫目が四十銭で賣買されるとせば——百五十圓の藍の代金は、抜き取りの手数料其他を支辨しても、優に利益がある譯だ。府下日暮里、三河島、千住方面には此藍抜き取りのみを専業としてゐる工場がある。而もそれで立派に工場の經營がなり立つて行くのだから、製紙原料として賣る日には、藍抜きのボロの半値以下でも、製紙工場で嫌がりさうな物が、同一の値段で賣買されてゐる原因なのである。

第十七節 丸 足 袋

丸足袋——是には種々なるものがある。單に鼻緒摺れだけのものもあれば、拇指の爪の跡だけが破れてゐるものもあるし、それから底が摺り切れたと云ふやうな程度のものから、更に一歩進んで充分に手入れをして穿き古るして仕うにも仕様のない代物になれば、製紙原料とするより外に利用向はない。それを鎌で女工達が、足袋の甲と、底とをバラ／＼に離して終つて、それ／＼製紙工場に廻はすのである。

が漂白して白洋紙を漉くけれど、紙質の悪い事夥しいものである。のみならず漉く時の歩減りも、又他の襦袢に比較してお話にならぬ程のものがあるとの事である。紺ボロの一種であるから、藍を抜いたらばと考へられるのだが、多くは化學染料染めであるから、藍は抜けないよしや抜けるやうなものがあつても、酷く砂ホコリを受けて來てゐるので、藍としても上等の藍にはならず、結局不純物の混入された藍だから仕うにも仕様がない。ためにその儘製紙工場廻しと相場が定つてゐる。

更に鼻緒摺れのものとか、爪跡位のもので、未だ一回も手入れをしてないやうな物、つまり獨身者などが穿き捨てにしたものは、相當に手入れをして、一足十銭内外で場末の労働者街の

夜店でも賣れるし、又山間僻地へ送り出せば、結構それが賣れて行く。

けれども屑屋の仲間ではよしや手入をして再度一足幾干で賣れるやうなものでも、製紙工場廻はしの程度のもので、混合して一貫目十銭と云ふ只みたいな賣買相場である。屑屋は斯う言つてゐる。同じ古足袋でも木綿足袋の方は好いが、朱子足袋の手入をしたものは一番厄介ださうである。せめて鼻緒摺れ位の程度の物なれば手入をして夜店へ出して賣れるが、手入後の廢物では木綿物の中に入れて製紙工場に廻はせぬだけに手数を要して厄介扱ひにされるのだとの事である。

第十八節

裏毛メリヤス

裏毛メリヤス——是も前者の足袋同様に、一口に廢物と云つても、それ〴〵程度を異にしてゐる、譬へば長袖のもので、袖の前半が痛んで終つたものとか、肩先が少しばかり破れたと言つたやうなものもある。是は襪衣の場合であるが、股引にしてもその通りで、股の處が摺り切れた位とか、乃至は縫目が裂けたゞけだと云ふやうな程度のもの——等がある。が足袋とは少

し違つて此方の廢物は部分的で、仕うせ下に着てゐるものだから、少しく我慢さへすれば充分に着て居られるものを廢物として屑屋の手に渡るものが多いさうである。であるから十個の物の中に、七つ位は再製品として、田舎行き、或は労働者向きに賣り出される。

今面白い修繕方をお話して試みるが、茲に長袖の前半が痛んでゐるものがあるとする。それを半袖に立ち落して終つて、薬品で漂白すると、立派な半袖襪衣となつて、一枚が一圓四五十銭には樂に賣れて行く、又は半袖物の袖がボロ〴〵になつたものとせば、股引の方の最下部を切斷して来て、それを縫ぎ合せる。すれば是又少しも素人には再製品とは思はれぬやうな品物となつて世の中に出て来る。よく縁日の片隅とか、乃至露店等で世利賣りのメリヤス屋がある。彼等は大商店の抵當流れてあるとか、工場のキツ物だとか、又半端物だと言つて、一枚八九十銭一圓二三十銭と世利上げて、賣つてゐるけれども、それは決して抵當流れてもなければ、工場の半端物でもない、何れも一度は廢物として屑屋の手に處分されたもの、化身である。それから長股引の股の切れたものをその儘、くり取つて少しく細工を施し、そして膝の邊りまでに切り取つて女の股引にする。新らしい中であると、女の股引に少しく困るが、充分に穿

き古したものになると、何れの部分も延びるだけ延びて終つてゐるから、婦人の股引となるには容易である。而もその切り離された最下部のものは、此度長袖と化けて出て来るのであるから、此細工状態を見たならば、安いメリヤスの前身が顯はれて終ふのである。

斯様な手術を施し得ぬメリヤス、又は手術の際に利用された端とか、ボロ／＼になつた袖と云つたものは、一束として、製紙工場に廻はるのであるけれど、それ等は極めて小さなメリヤスの小切れであつて、せめて一枚のものが七八寸四方もあるとすれば、それはやがて軍隊とか、會社、工場、學校等の如き板の間を拭く雑巾とされて、それ相應の數量が捌れて居るのである。

以上のやうなメリヤスの利用は、一寸家庭的利用方法の如くであるが、實はさうではないのだ。普通の家庭で以上の如くやつたとて、それはあり合せの品物でやるのだから、片袖がチグハグになつたりして他人に見られたら直ぐに細工物である事が分つて終ふ。然るに此屑屋の手に依つて處分されたものを細工する時には、普通の家庭のやうに、一枚や二枚の小數のもので細工するのでないから、數ある事故に、胴と袖とが違ふやうな事が直ぐ看破されるものを繼

ぎ合はさない。それに似寄つたものを附けて漂白をするか、或は霜降りに染めるか又は焦茶に色をつけるから、素人には分らう筈がない、斯うした事を専門に行ふてゐる工場があるのだから、その利用法は一見して家庭的の利用の如く見ゆるが、實際は機械的であり、工業的なのである。

其處で此様に利用し得るのだから、メリヤスの古物は嘸かし相當な値であらうと思ふてみれば、驚く勿れ、一貫目僅かに五十五錢内外である。それと云ふのは、物に依つては直ぐに利用する事の出来ないものがある。譬へば袖だけ取り代へたいのだが、その胴と同様な織り工合のものがないければ、そのやうなもの、出来るまでは手を下す事が出来ないと言ふ次第である。尤も悉くがさう云ふ風にやつてゐるかと言ふに決してさうではないが、餘り著しく違つてゐるものを繼ぎ合せる譯には行かぬ場合もある。併し再製品と云ふ事を看板にして、山間僻地へ廻はすものなれば、それは一向に構はぬやうなものであるが、扱て例ひ幾千なりとも價値を持たせる時には、所謂昔から言ふ、馬子にも衣装の譬ひである。

第十九節 繼 巾

繼巾——は先づ以て都會の人には想像だにつかぬ事柄である。先づ繼巾と云ふもの、性質を説明しなければならぬが、紺染の木綿物の切れてあつて、巾がなければならぬ事と、短かくとも八寸以上は付うしてもなければならぬのである。巾が一分でもなかつたのでは此繼巾中に加はらぬので、是等は太ボロの中から分類されるものだ、然らばそれは一體何んになるか、雑巾か、否、一反の反物となつて需要の甚だ廣いものであるだけに、都會人には一驚を禁じ得ない事であらう。反物と云ふものは二丈八尺以上、繼目のない一枚ものでなければ、反物とは言はないと思つたら大間違ひである。

て此八寸以上の小切れを、格子ならば格子、緋ならば緋と云ふ風に、出来るだけ似寄つた柄同志を並べる。そして並べ上げた長さが二丈八尺以上になれば、それを普通の反物のやうに折り疊んで、それに木綿糸で十文字に體裁を兼ねた押へをつける。そして古反物紙に包んで一反が五六十錢から八九十錢の小賣相場で、東北から北海道方面に盛んに移出されるのだ。その

最も大きな需要先は何んと言つても奥州地方であつて、此土地では此バラ／＼反物を繼合せて着物を造る、農民の田圍着から或は漁師の着物、次には二枚三枚と雜巾式に繼ぎ合せた上に、襦袢を造るのだ、一見ツギハギだらけの火事装束の刺子のやうなものである。

奥州へ行くと斯うした繼巾反物の着物を専門に縫つてゐる家があれば、又それを専門の商店もあつて、北海道とか、或は越後、越中の漁村へドシ／＼と卸してゐる處もある、最近房總の方面にも可なりに賣れて行く、交通不便の山間僻地から、漁村方面更に北海道の奥、主として寒國を對手にその需要は一日／＼と開拓されて、此繼巾の前途は洋々としてゐる。併しお断りして置くが、絹物の繼巾では需要はないので、實用本位の木綿物に限られてゐるのだ、それと云ふのは新しい反物を斯様なものにする事は不經濟であると云ふ處から、此廢物利用が行はれたので、都會人のやうに衣服は一種の人類の装身具と心得て居るやうな人々でないから繼ぎはぎだらけであらうと、暑さ寒さへ凌げれば體裁なんかは問題としてゐないのである。

だから此繼巾は問屋仲間では却々好い値段であつて、一貫目一圓二三十錢である。而も此繼巾の相場は面白いので世の中の景氣不景氣と關係してゐる。勿論總ての屑物が關係を有つては

居るが、世間の不景氣と同時に、普通の屑物は値が下落するのが通例なのに、此織巾は値が出て行く。それは経済的に新しい物を着るよりは此方が好いと云ふ觀念が一層強くなつて、需要が増大するから、経済學の原則として、需要が増せば、その物品の價値は大きくなる。殊に供給がそれに伴はなくなれば、その價値は更に大を呼ぶものである。

第二十節 紺 巾

紺巾——は前者同様巾のある縞木綿のみの名稱であつて、その大部分は奥州へ反物として行くのであるが、中には漂白して晒木綿として、それに唐草模様を置くとか、乃至辨慶格子に染めて、安座蒲團の皮にするのだ。一枚四五錢位のは二三回も座れば、ふつくらとしてゐたもの、影が何處やら消えて、煎餅蒲團のやうに薄く、唯だ敷いてゐるとは感じだけの話で、暖かくもなければ、却つて反對にお尻りがゴツ／＼すると云ふやうな、寄席や、芝居、貸席等の座蒲團は皆な此紺巾を漂白して、型を置いた木綿の切れて造られたものである。それからよく／＼地合の悪いもので、反物にはならぬし、又座蒲團の皮にもならぬと云ふや

うな代物は、漂白して日本全國の軍隊へ納められて終ふ。軍隊ではそれを仕うするかと云ふに、銃拭きにしてゐるのであつて、此需要は却々多い。何分にも二十二ヶ師團もあるだけに、全國から集る屑物位では逆も足りるものではない。尤も巾物とは言つてゐるが、軍隊の銃拭きになるものには、さう／＼木綿巾を完全に有つてゐるものばかりない。何分にも數量の多いものであるから、中には一分や二分巾の詰つたものや、或はかいたものなどが加つてゐる。併し、銃拭であるから、必ずしも巾が完全でなければならぬと云ふものではない、唯だ漂白されてゐなければならぬ事だけが條件になつてゐる。それと地合があまり好くては實際銃を拭く場合に好くないから、先づ所謂洗ひ晒した、ペラ／＼のもの、方が、銃の外部に塗られてある油を拭き取るには好都合なのである。故に屑屋の方でも奥州へ送る事の出来るものや、或は安座蒲團の皮として差支のないやうなもの、如何に軍隊の要求でも決して廻はずやうな事はしない。それに銃拭きとして納めるよりは、他の利用法を行ふ方が有利であるからである。けれども一度に大きな金額にしやうと云ふには勢ひ軍隊のやうな處を對手にする方が好都合の場合もある。それに取引が確實に行く

事も一つの原因となつてゐる。が問屋相場では一貫目九十銭位である。

第二十一節 色 金 巾

色金巾——最近此金巾と云ふもの、使用が著しく減じて終つた、金巾と言つて呉服屋に行くと、新モスを寄越す處さへある。随つて昔の金巾なるものはあまり普通の家庭からは出ない。それ故に機械的に利用すると云ふ事は出来ぬから、手工的の利用に止つてゐる。と云つても普通の家庭でやるやうな、娛樂的利用ではない。婦人の使用する洗粉を入れる袋にする。又は湯屋等で賣つてゐる糠袋となるか、晒して足袋の裏に利用する。足袋の裏と言つても、それは埼玉縣の行田の足袋に限られてゐるのだ、熊谷町から五六里北の方に當つて行田と云ふ、足袋の本場がある。俗に行田足袋とまで言はれて、その名は全國に響いてゐる。勿論品質が好いのではない、一足木綿足袋で二十銭から二十五六銭と云ふ、安足袋の製造地である。

此行田の足袋は、一つとして新しい材料で造つたものではない、何れも廢物利用の材料である。故に色金巾の大きなものは、晒して此行田に行くのだ。で一貫目が八十五銭前後で問屋

で賣買されてゐる。

第二十二節 白 金 巾

白金巾——此方は皆埼玉縣の行田行であつて、中には足袋の裏には少しく、巾の詰つてゐるもの等は、石版印刷所の石版拭きとして廻はされるのである。石版印刷とは御承知の方もあらうが、石版石と言つて普通の石と全然性質を異にした石がある。その石の表面が滑らかなになつてゐて、それへ藥品で、繪畫なり、文字なりを焼附けるのだ。そしてローラーと云ふものに、インキをつけて、その石の繪畫面の上を轉がす、その上へ紙を乗せて上から壓力を加へれば、その紙に印刷されて來るのである。何分にも平な石面にインキをつけて印刷するものであるから、少しでも繪畫面なり、文字面が汚れては印刷した物が汚れて終ふ。それ故に一回毎に石版面を拭く、その拭く時に、木綿等のゴック／＼したものでやると石版の面にキツを附けぬとも限らぬ、それには金巾が一番好い。さう云ふ意味で白金巾は石版印刷所にも相當の數量は回つてゐる。問屋の一貫目相場は、色金巾の八十五銭内外に對して、此方は一圓二十銭内外である。と

云ふのは行田へ廻はして足袋裏にするにしても、晒す必要がないからである。それに色金巾では石版屋には向かず、結局白金巾の需要が好い處から一貫目三十五錢位の値開きがあらうと云ふものである。それと今一つには前にも述べたやうに昨今ではあまり金巾と云ふものが、普通の木綿襦袢のやうに數量多く出ない事も、高價な原因であると見たら好い。

第二十三節 ネル巾

ネル巾——とはフランネルの大巾物のお古を言ふのであつて、是は多く婦人の腰巻物だ、或はフランネルの肌襦袢の古とかで、小切ではない。汚れてゐるものであれば、晒して終ふし、晒す程の汚れてないものならば、簡単な洗濯の程度にして、利用先きは、足袋の裏として行田に送られる。行田では是を冬足袋の裏にして、モンパ裏だと言つてゐるが、實はネルの腰巻のお古物が多いのだ。或は足駄の爪皮の裏になるか、乃至は少年少女の靴の裏に貼合せるとかする。世の中にモンパの裏がついてゐると云ふ品物で、値段の比較的安いものは、皆な此フランネルの化身と見たら差支ひはないのである。

第二十四節 手拭

手拭——は廢物として現はれて來る數量よりも、用途の方が多し。獨身者等ならば、使ひ捨て、終ふけれども、普通の家庭では古手拭を四五枚重ねにして、何れも雑巾にしてゐるから、屑屋の手へ賣り拂ふやうな事は先づ僅少であると言つて好い。けれども世間は却々に廣い、普通の家庭から出ないから、嘸かしその數も極めて微々たるものであらうと思ふと、事實は却々に想像を裏切つてゐる、けれども用途の方面から觀る時には、未だく品不足を告げてゐるのである、手拭は一貫目問屋では二圓内外である。一貫目と云ふと、約百本の手拭である。普通手拭は一本が十匁しきやかゝらぬものである。其處でその用途はと云ふに、汚れてゐても生地さへ完全であれば、藥品で漂白する、その漂白とても在來の模様をも漂白して終ふのではない。模様はその儘残して白い處の汚れを取るのである。そして一本が七八錢の相場で越後の山奥から、越中、越前、奥州方面から、北海道と云ふ地方へ盛んに出る。勿論晒し放してはない。それに多少の糊をつけるから、一見して此が古手拭の晒し物とは思はれぬやうになつてゐる。

處で茲に面白いお話は、商店等で廣告的に出した手拭、即ち名入りの物をその儘やるかと云ふに、決してそんな事はしない、假りに私が廣告的に人にやつた手拭として、手拭の端に『深海』と云ふ文字を染めて置いたとする、而してその手拭の模様が、私の姓に因んだ、浪に千鳥が染めてあつたとする。此場合にその模様を生かして、私の姓だけを消すと云ふ事は出来ない。何故かと云ふのに、姓の處を晒すにはそれ相當の薬品を使用しなければならぬ。ためにその姓の部分、特に地質を弱められる事となるから、何とか此『深海』とある姓を抹殺する必要がある。それには何うするか、その姓の染めてある大きさだけの千鳥の型をベッタリと染めて終ふ。だから一見すれば、一羽の千鳥だけが、嫌に浪から離れて、手拭の端に、而も不釣合に染めてあるものだ、と思はれる位でその他には少しも變りはない。

それも世間の人古手拭が再び、新しい手拭となつて出て来ると云ふ事を知つておれば、『あ、是は古手拭の再製品だな——』とその飛び離れてゐる千鳥の工合でも感付いて終ふが、そんな事が行はれてゐやうとは知らないから、嫌に變んな端の方に、模様とは全然關係のないやうな場處に千鳥が一羽染められてあつても、是は紺屋が型を置く時に、誤つて此んな處に

染めたのであらう、それだけに此手拭は安いのだらう——と勝手な想像理窟を付けてゐるか、左のみ氣にもせずに、新しい手拭と同様の好感情で、古手拭の化身を使用するのである。次には全然模様も何も悉く漂白して、眞白な三尺の晒木綿にして終ふ。その上に適當な唐草模様を置くとか、辨慶格子とかを染めて座蒲團の皮にする。此方面の利用は同一の生地物が數多くなくては困るのだ。

更に今一つの利用はとみれば、晒木綿として足袋の裏にかわるものもある。けれどもそれは生地の餘りに好くないものを選ぶのである。生地の良いものであれば、模様も汚れもその儘にして、その上から紺で染めて終ふ。そして例に依つて行田の木綿足袋の表とするのである。だからよく次のやうな話を耳にする事がある。縁日で餘り安い足袋があつたから、四五足買つて来た、そして二三度穿いてから汚れたので、洗濯したら、表の紺が落ちて終つて、中から『奉納』の文字が出たとか、又は第一聯隊なんて文字が出て来た。と云ふやうな話は屢々聞く處である。是等は何れも古手拭の模様をその儘にして置いて、唯だ紺にあつさり染めたゞけてあるからである。後で染めたのと、前に染めたのでは、藍がその生地に泌みてゐる程度が違ふ

から、斯様な結果が出来て思はぬ處で安足袋の悲哀を感ずるやうな事となるのである。

次には護謨裏草履のゴムの内部に古手拭を貼り合せる。何れにしても古手拭の利用と云ふものは決して僅少ではない。何分にも晒して終へば、三尺の白木綿となるのであるから、如何様なものにも利用し得る譯であるが、何分にもその利用の範圍の大きいにも不拘、古手拭の出現がそれに伴はないやうである。

第二十五節 上 ド シ

上ドシ——とは古禪の事で、六尺物の謂で、その上と云ふのは、生地に少しのキヅもないもので、單に汚れてゐると云ふだけの六尺禪の事である。一貫目が問屋で二圓四十錢内外で、一本相場では六七錢と云ふ上等の値を示してゐるのである。此禪にも、上中下がある。中物で一本が二錢五厘、下物になれば一錢五厘位である。勿論上中下によつて用途は違ふ、が上禪の項目に、中下の用途の事もお話をして終ふ事にしやう。

普通の家庭では六尺禪が如何に古くなつたからとて使用場所が、使用場所であつただけ

に、流石に雑巾にも出来ない。先づよくて便所内の雑巾位が關の山である。さりとて便所内の雑巾になるまでには、相當古る物となり、端の方が痛んでゐなければ、便所雑巾にまでは下落して行かない。

が其他の處では塵芥箱の中へ投じて終ふ。尤も妻君なり、或は親姉妹なりの居る家であれば、無闇にそんな不經濟な事はしない。出来るだけの洗濯をして、使用してゐるから、廢物として屑屋の手に渡るときには、上禪の仲間入りが出来ぬ様なものでなければならぬ。けれども親姉妹もなければ、妻君もないと云ふ、ほんとうの意味の獨身者、即ち下宿屋の二階でゴロ／＼してゐる男になると、一度の洗濯もせずに塵芥箱の中に入れて終ふ。斯う云ふ禪は、無キズでもあるし、未だ生地も痛んでゐないから、所謂『上ドシ』の大將である。

それから普通の家庭からでも、明日にでもなつたら洗濯しやうと戸棚の中に入れて置いたが、鼠に端の方を喰はれて終つたと云ふやうなものもある。その喰はれた處の程度が極めて尠ないが、兎に角キズ物となつたとすれば、それはもう『中ドシ』の仲間入となる。『下ドシ』はそれ以下の物と見たら間違はない。

扱て利用のお話に移るが、上ドシでは薬品を以て漂白して終ふ。さうすれば新しい六尺禪となつて来る。がさりとて六尺禪として賣出す譯にも行かぬ。いや賣つても賣れぬことはなからうけれど、それでは消毒したり、漂白したりした手数料も充分に出ない、のみならずその禪一本でも賣買すると云ふ以上は、それによつて多少の利益を得なければならぬ事となるから、今假りに問屋の一本六七錢の相場であるものを仕入れて、それを消毒したり、漂白したりして、譬ひ新しい六尺禪となつたにせよ、一本二十錢、三十錢には賣れない。結局高くて十二三錢が關の山と云ふ事になる。その間の利鞘は僅かに七八錢にしきやならぬ。それでは顧客の手許に渡るまでの仲買人とか、乃至小賣業者の利益が少しも出て來ない事となる。よしや一本で一錢でも、五厘でも得られたにしても、その販路は極めて微々たるものである。何故と云ふに新しく六尺禪を買つても、十五六錢から高くて二十錢とせぬのに、何を好んで十二三錢も出して、什麼人間が締めたかも知れぬものを買ふ人間がない。あつたにしてもそれだけに捌けない。であるから六尺禪として賣り出す事は此場合最も不利益な方法で、此六尺禪から出來たものか、仕うか分らぬやうな物として、相當の利益を見る事が一番伶俐な方法だと云ふ

事は、何人にも想像し得るであらう。

そこで漂白された六尺禪は、多くは最近流行の『金春絞』を置く。即ち兵兒帯にして終ふ。すると東京でも地方でも相當に捌ける。而も買ふ方は六尺禪の化身とは知らぬから、使用する場合には何等の不快感を感じない。それだけに新しい晒木綿を染ると同様の價値を附せる事は容易である。で今子供の絞りの兵兒帯は一本何程するか、それは買ふ呉服店の構ひに依つても異なるが、三十五錢から四十五錢位まではする。

尤も六尺禪の化身であると名乗りを擧げたら、如何に呉服五層倍でも少しく暴利過ると云ふ事が看破されるが、新しい晒木綿を六尺買つても、二十錢近くはするのだから、それに絞りを染める手数と、今日の高い染料とを加算すれば、優に一本の兵兒帯が三十五錢、四十錢は當然の事となる。つまり新しい晒木綿から絞つた兵兒帯と云ふ價格で賣り出すから、六尺禪の利益又偉大であると云ふ事が出来るのだ。

偶露店の足袋屋とか、或は東京なれば本所、深川あたりの労働者町の、小規模の呉服屋、それから古着専門の店頭などにある。で大商店ならば新しい様な顔をして、一本の兵兒帯を

四十五錢も取れるが、そうでない處ではさうも暴利を貪れぬから、一本三十七八錢と云ふ相場
で賣つてゐる。

それから又兵兒帶としないで、赤なぞで、麻の葉を染める。そして赤ん坊の肌襦袢を造る。
是は中以上の家庭の方は御存じがないが、本所、深川の職工街の夜店へ行くと、偶の方に薄暗
いカンテラをつけて、古着屋とも新しいもの屋ともつかぬ店が出てゐる。斯うした處には必ず
ある、出来合の子供の肌襦袢がある。一枚が四十錢から五十錢だ。赤ん坊の肌襦袢なんかは、
四五十錢出さなくても、晒木綿を買つて来て縫つたら好さそうに思はれるのであるが、扱て勞
働者の女房達になれば、針仕事の出来るやうな者は極めて僅少である。否なよしあつたにして
も、落ち着いて針なんか持つて居た處で、幾等の經濟でもないといふので、何れも女土方とし
て出稼に出て終ふ。土方に出れば朝の六時頃から冬ならば午後五時まで、夏の陽の長い時でも
六時かそこらに歸へれる。而も其賃金は一圓四五十錢は樂に取れるから、亭主の留守に家て針
仕事なんかしてゐるよりは、遙かに家庭經濟であると云ふのだ。

事情が右様の譯であるから、一枚の肌襦袢を買ふにしても、生地を買つて来てなどとは云つ

て居られない。譬ひ割が高くても、又は品質が悪からうとも、出来合ひ物で間に合はさなくて
はならぬ羽目になつてゐるのである。此労働者の家庭の事情に投じて造つたものが、随分澤山
にある。されば前にお話した六尺禪の變化たる、麻の葉の赤ん坊の肌襦袢、豈それ不思議と
するに足らんやだ。

その次は座蒲團の皮である。

であるから以上三つの利用方法は生地を本意にしてゐる。と云ふのは多少の汚水が、全然
とれなくても、絞りに染めれば、藍の爲めに其れは消えて終ふし、又麻の葉の型を線で置いて
も好し、或は潰しに型を置いて汚れ位胡麻化して終ふ事は容易の業である。更に座蒲團の皮
とすれば最もよく隠れて終ふが、生地が悪くてはそれだけの手數と費用をかけて出しても、直
ぐに廢物となつて、再度舞ひ戻つて来るから、出来るだけ生地のよいものを選ぶ事になつてゐ
る。廢物利用は詐欺ではないのだから、何うでも一時逃れの筆法では可けない。それに譬ひ兵
兒帶を買ふにしても、又麻の葉の赤ん坊の肌襦袢を買ふ場合にしても、如何に無頓著な、非打
算的な労働者の女房達でも、生地的好し悪し位は觀別するから、結局生地の悪いものを出した

のでは、賣足が悪いから生地本意と云ふ事になつて居る。

次にお話するのは『中ドシ』の利用法である。此中ドシの程度は、その現はれて来る六尺禪の種類によつて、千差萬別である。一例を挙げれば、端の方が少しばかり痛んでゐても中ドシであるし、無キズであつても、上ドシの中へ加へる事の出来ぬ生地であるとか、六尺物の寸が少しでも、詰つてゐるとか、やはり中ドシの扱ひを受けなければならぬ。

茲に端の方が鼠に喰れてゐるものがあるとすると、それ等は漂白して三尺に切つて終ふ。それへ適當の手拭の型を置けば、立派に一本七八錢の露店向、又は田舎向きのバラ／＼手拭となる。よく足袋屋等の店頭、手拭袋の中に這入つて、その儘文字さへ書き込めば、一寸顔出し位に持つて行ける様になつて居る手拭があるのを、讀者は御承知であらうと思ふ。相當な店舗を構ひた足袋屋ならば、いざ知らず先づ中以下の足袋屋での物なれば何れも古手拭の再製品か、又は古禪、殊に中ドシの再製手拭と相場が定つてゐる。

それが證據に今日新しい手拭地一反幾干するかと云ふ事を考へたら分る、如何なる生地の粗悪なものでも、一反一圓四五十錢はする。少し生地が好くて、粹な型でも置いてあれば、糊

なしと稱して生地を自慢にして、一反一圓八九十錢もするではないか。してみればその一反で手拭が十本であるから、一本の價格正に十八九錢となる。然るに手拭袋に這入つて名前さへ書けば、他人の前へ出せるやうにしてあるものが、一筋僅に七八錢と云ふに至つては、其處に何か理由がなければならぬ位は、精神病者でない限りは想像がつくべきである。

それから中ドシの完全な一端は上述のやうな、安手拭となるが、その切り落された一端は仕うなるか、行田の足袋裏に廻はすか、或は軍隊の銃拭きとなるのである。唯だ上禪はその儘利用されて行くのに、中ドシになると、利用が幾通りにも分類されて終ふ處に、上ドシ一本が六七錢と云ふに、中ドシ一本は二錢五厘と云ふ、飛び離れた下落を示してゐるのである。

最後に『下ドシ』であるが、此方は生地が悪いとか、生地は好くても中ドシ以下の物であるとか云ふ品物で、晒した上で、軍隊の銃拭が關の山である。中には生地の好い物は選出されて、行田の足袋にされるものもあるが下ドシの方は先づ以て軍隊の銃拭専用と見たら好いのである。何れにしても六尺禪の利用は、可なりに利益を産むのみならず、全然六尺禪と想像つかぬまでに産業的に廢物が利用されてゐる事は驚くばかりのものがあるのだ。

第二十六節 地 絲 屑

地絲屑——は家庭からは殆んど出ない、多くは機屋が、機を織つた際の、絲の端とか、絲間屋から出るもので、色などは赤があらうと、黒、黄、紫には關係はないが、唯だ木綿絲たる事を條件としてゐる。尤も絹絲であれば屑屋に賣拂ひもしようが、一尺位のものになれば、繼ぎ合せて何かに使用してゐる。それは普通の家庭でもみる例であるから、況んや機屋とか、或は絲間屋等になれば、それを商賣にしてゐるだけに、不經濟な絲の取扱ひは最初から行ひはせぬが、木綿物になると値段の安いと云ふ觀念が、取扱ひの際取扱者が尊重するの念が、絹絲に對する程でないから、什うしても違つて來る。て此地絲屑は木綿絲ばかりと云ふ事になつてゐるが、多少の絹絲の屑、二三寸位の使用に堪へぬものも含まれてゐる事は明かである。斯う云ふものは屑屋の名稱では「地絲屑」となつてゐるが、ウエストと名がついて鐵道省とか、海軍省に大部分を占められ、その數量の何割が民間の機械使用工場に廻つて行くのである。

左様な處では何に使用してゐるかと云ふに、鐵道省でも、海軍省でも機械其他の車輪の掃除用の雑巾にしてゐるのだ。普通の家庭で用ゐるやうな雑巾では、油を拭き取るのに甚だ不便である。それは襪襪切れを五枚乃至六枚を重ねて縫つた上に、麻か、或は木綿絲で丈夫本意に差子にしてあるから、微細な機械の油などを拭くには充分に拭けない。つまり雑巾が固くて、油が雑巾の表面にのみ拭かれてゐて、内部に浸入しないから、直ぐ使用が出来なくなる。それに伴ふて差子の雑巾では、五寸四方なり、六寸なりの稍や大襪襪を四五枚も重ねなければならぬ事と、今一つにはそれを丈夫式に差子にしなければならぬ手數とを加へると、非常に高價なものとなつて終ふ。而も値段は高價になつて、使用の際に不便であり、且つ油が充分に拭き取れぬては困るから、絲屑を使用するのである。絲屑であれば、機械の精巧な處でも、適當の量を以て拭ひ去る事も出来れば、油が當ると同時に、絲の内部に滲み込んで、表面のみに止まつてゐないから、非常に都合がよい。而もそれで價格は、普通雑巾などを造るのとは違ふから、手數も要らなければ、費用も掛らぬ。經濟的で實用的のために、此地絲屑は、ウエストの名の下に、鐵道省と海軍省を第一の顧

客として、其他は機械工場に行くのであるが、需要の割合に品物が追はれてゐるとの話である。今問屋の賣買では、一貫目二十五錢内外で、單に消毒を施すだけで、右から左へと捌れるのであるけれど、所謂小賣値は一貫目三十四五錢であるから、地絲屑ですらも馬鹿にならぬものがある。

第二十七節 白 絲 屑

白絲屑——是も前者同様、機屋、或は絲問屋等から出るもので、出来るだけ汚れてゐないものでなくてはならぬ。がその替り寸の長い短かいは問題とされては居ないのである。此利用先は何かと云ふに、綿火薬の材料と、セルロイドの原料となつてゐるのだ。一寸これだけの説明では物足らぬ感があるから、利用をされるまでのお話をするが、先づ第一に絲屑を晒すのである、稀薄な苛性曹達の液で煮て、更に漂白粉を以て普通に晒し物をする様に晒し、後善く水で洗ふのである、但し目的が目的であるから丁寧にやる事を必要とする。て水晒しは水車を利用する、水車が廻轉すると、水が下方に向つて勢よく落ちて来る。その

水の落ちて来る下に、此絲屑を置くのだ。水の廻轉流出と共に、絲が躍り上つて洗われる。而も力強く洗はれるのであるから人力で洗ふやうな性質のもではない。

尤も此水車を使用する時には、最近都會隣接の地方でやつて居るやうな、同一の水を機械で、何回でも上下せしめるやうな水車では可けない。自然的川口から引き寄せた水でなくてはならぬ、つまり一度洗つた水は下流に流れ、上から更に新しい水が洗ひ落ちて来る水車でなければならぬのである。

斯様に水車の水で、力強く洗はれると、如何なる糊氣の絲でも、如何に脂肪の強い絲でもバサ／＼になつて終ふ。それを綿とすると、前の方で詳しくお話した綿の打ち返しの際に産出する『風綿』のやうに、軽い足のない、糊氣のない、脂肪もない綿となる、其状態は恰も鶏の毛を筆つた後に、綿の様な初毛が残ると云ふが、あの毛のやうな綿となつて終ふのである。斯くの如き綿になると、それは直ぐに火を呼ぶ。火鉢に火をカン／＼起して置いて、一尺位離れた場所に、一塊りの綿を置けば、その綿は自然的に火氣を呼んで暖かになる、その暖かになる度が強くなると、直ちに火を發して終ふ。此綿を『セルローズ』と云ふのであつて火薬製造に

なくてならぬ材料である。ために我國の白絲の屑が陸軍當局へ、火薬の材料として納入される量は實に莫大である。お話は少しく他に移るが、序であるから、硝化綿及び火薬、セルロイドの製造方法を簡単に説明して見よう。

先づ硝化綿からお話をするとしやう。充分に乾燥した糸屑を、強硫酸と強硝酸の混合液、(強硫酸三に對して、強硝酸一の割合)で處理するのである。と硝化綿が出来るのである。此水で再び洗つて乾かせば好いのである。此際に綿は充分に乾燥して居らないと、混合液の中が離した時、黄色い瓦斯を出して分解して終ふのである。即ち燃えて終ふのだ。

斯様に言へば硝化綿は極めて、その製造法は簡単に思はれるが、混合液の温度、浸漬の時間等で非常に違ふものであつて、硝化綿製造に對して、一番大切な個處であり、且つ相當な手際を要するのである。て此操作の如何に依つて、硝化度が違ふのである。

硝化度の最も強いものは、綿火薬となる。それより稍や硝化度の低いものは、コロチオン綿と稱するものとなるのである。此はアルコールや、エーテル等で容易に溶けるもので、それ以下のもになると、低度硝化綿と言つて、此は前者のやうにアルコールや、エーテルでは溶け

ないのである。

此綿火薬、又はコロチオン綿を色々加工して、無煙火薬を造るのであるが、コールドナイト、パリステット等はそれである。コールドナイトは綿火薬と、ニトログリセリンとを混ぜ合せたものである。パリステットは、コロチオン綿と、ニトログリセリンとを、混ぜ合せたものである。又コロチオン綿は、エーテル、アルコールの混合物に溶して、コロチオン液を造るのである。コロチオン液と言つたのでは、或は皆さんには御承知がないかも知れぬが、醫者の處で注射後に絆創膏の代用に、一種の匂ひを有つた薬液を塗る、それが數分にして乾はくと、鼻汁の乾燥したものゝやうに思はれるもので、コロチウムと稱するものがある。此が即ちコロチオン液なのである。

猶ほザボンラッカーにもなる。此は醋酸アミール、アセトンに、此コロチオン綿を溶したものである。是に色々な色素を加へれば、着色した塗料が得られる。又此と同様に糊の代用として、特殊の糊料に使用される。革製の調帯のはぎ合せに使用される。其他にも種々なる塗料に使用されてゐると云ふ事だ。

次にはセルロイドを製造するお話であるが、之れも此コロデオンの綿の利用である。でコロデオンの綿を七割乃至七割五分と、樟腦三割乃至二割五分位とを混ぜ合せたものが、即ちセルロイドである。言ひ換へれば、セルロイドは、樟腦で硝化綿を、溶したものを言ふのであるが、兩者共に固形物であるからして、此を混ぜ合せるに、便宜上樟腦をアルコールで溶して混合せしめた後に、アルコール成分を蒸發せしめるのである。

でアルコールと樟腦とを混ぜ、是に硝化綿を加へたものを、ローラーでゴムを捏ね合せるやうに、充分に混ぜ合せるのである。それが終つたならば、温度を加へながら、壓搾機で非常なる強い壓力をかけると、セルロイド生地が出来上がる。

是を用途に應じて適當に（棒なり、又は板なりに）切つて、乾燥せしめるのである。斯くすると最前樟腦を溶すために使用された處のアルコール成分は去つて終ふ事となる。もしセルロイドの櫛を造るとせば、此に適當なる材料を求めて鋸機、研磨機にかけて、適當に仕上るのである。

玩具のやうなものは、薄い板に出来てゐるセルロイド生地を、少しくあたためて、細工の仕

好い様に、軟かにして、思ふ型の中に入れて、上から壓力を加へれば、その形のもので出来上がる。是を冷却しさえすれば好いのである。故に一度生地となつてゐるものさへあれば、思ふやうなものが造られるのである。

第二十八節 糊付源平絲

糊付源平絲——とは木綿絲の平打ちにしたもので、紅白になつてゐるから、源平絲と云ふのである。雜貨物などを買ふと結はいて寄越すもので、是は普通の家庭からも可なりに出る。

勿論家庭から出る時には、使用に堪へぬものでなければ屑屋に賣り拂はない、と云ふても此れだけを賣るものはなくつて、何かを結いた折りに結び餘つた端とか、もつれて終つたとか云ふものが、紙屑と同様に籠の中に投ぜられて屑屋の手に渡るのである。

利用としては、前にお話した『地絲』と同様に、ウエストとなつて、鐵道省、海軍省、機械使用工場に廻はるのである。併し同じ用途でも、地絲は一貫目二十五錢内外であるが、此源平絲の方は一貫目五十五錢である。と云ふのは多くの場合、ウエストとして出すよりも、糊を落

して終へば、更に上値で賣れるからで、ウエストとして地絲が不足の爲めに、此源平絲の糊付を高値でも買ふのであるが、品物を中心としては、實はウエストとなるよりは糊を落とされて他の方面に利用された方が好いのである。その事に就いては、次の項で詳述するとしやう。

第二十九節 糊なし上等源平絲

糊なし上等源平絲——は前者の糊を落したもので、糊が落ちると、一貫目が六十五錢からの高値になつて来る。即ち糊のある場合と、糊を落とされて終つた後では、實に一貫目十錢からの値開きを示すのである。

何故と云ふに糊を落して、脂肪さへ除けば、前の方で説明した白絲屑と同様に、綿火薬となるからである。併しながら白絲屑よりは多少品質は劣るので、白絲は一貫目一圓であるに、此方は六十五錢とある。それだけに他の利用法がある。

それは鐵道車輪の油壺の中に入れて、注油時の調節を圖るものとなつてゐる。それは鐵道の車輪に、回轉式に油壺からシャフトに油が注がれる装置がしてある。けれども單に油を入

れ放しにして置いては、汽車の進行の響きを受けて、油壺の中の油が搖れる、のみならず注油口から不自然的にシャフトに流れるから、注油の調節が出来ない。

此二つの缺陷を補ふために、源平絲の糊なし絲が、油壺の中に挿入されてある。すると機械油はその源平絲にシミてゐるから、注油に際して徐々と点滴式に注油されるし、列車の進行中とても油壺がよしや震動しても、内部の油が外部に揺り出される様な憂ひはない事になる。故に此源平絲の糊なしは、列車のシャフトに向つて重大な任務を負はされてゐるのである。

是れに就いて次の様な話がある、東京市内電車や汽車の車輪を作つてゐる處に、天野工場と云ふのがある。此天野工場て車輪を納めると、先づ試運轉を行ふ。汽車であれば三十哩位走つて歸つて来ると、その油壺の注油加減が悪いと、油が切れて即座に車軸が磨擦熱のために焼き切れて終ふのである。

試運轉に際してシャフトが熱したとすると、その車輪の壽命は既にゼロだと言はれてゐる。左様な結果を見るのは、僅かにシャフトに對して注油の調節のよろしきを得たか、得ぬかに分れるのであつて、隨つて此油壺中に挿入さるべき源平絲の、糊の絶無か、否か、餘程關係する

のだ。實に車軸の運轉運命を左右してゐるのである。ために此方面に利用される場合には、糊氣なるものは絶對にないやうでなければいけない。

だから廢物利用される幾多の屑物中に、最も重大な任務を負はされて居るものは、先づ此れが第一位であらうと言はれてゐる。その他の廢物は利用の如何に依つて、その物自體の質を悪くするだけに止るのであるが、此れはその物自體には少しも關係なくて、他の物に惡影響を齎らす結果となるのである。

第三十節 新朱子屑

新朱子屑——は、前の方で古朱子屑のお話しをして置いたから、大體の利用法は既に御承知の事であらうと思はれる。前者は古朱子の屑であるし、此度のは新しい朱子の屑である。前者は普通の家庭から産出されるけれど、後者はあまり一般の家庭から出るものではない。多くは足袋屋とか、或は毛織物會社の截斷落しと云ふやうなもので、三州岡崎地方に集中されてゐる。それは什うかと云ふに此地方だけが、斯うした屑を反毛機と云ふものにかけて、製綿するの

であつて、此地方のみに集中されるのである。

古朱子の場合には綿にして、それから少しく元毛を入れて、それを絲として、安毛織物の中に混ぜ入れるのと、それから綿として、安座蒲團の綿に使用するものと、更に、便利瓦の材料として利用されてゐるものを御話したが、此新しい朱子屑になると、多くの場合は反毛機にかけて、出来る丈け綿としての足をなくさないやうにして、若干の元毛を加へて、細い絲として、再び新らしい朱子として織り出して終ふ。勿論廢物利用に依るものであるから、純白な新らしい朱子とする事は困難であるが爲めに、紺などで染めて、朱子足袋の甲表にすると云ふ風にしてゐる。

質の善惡に依つて利用法が幾分異るとは言ひ條、新しい物は、古物のやうな利用法より稍や、屑としての意義ある利用が行はれてゐる。それは屑屋仲間の問屋相場が、それを證據立てて居る處で、古朱子の屑は一貫目が、十錢内外しかせぬのに、新らしい朱子の屑は一貫目が十八錢と云ふ、約八割方も高いのは、利用が古朱子よりも、よい結果を産む何よりの證據と見たら好いのである。

第三十一節 込赤市中ポロ

込赤市中ポロ——とは、東京市内から産出した、赤ポロの意味であるが、特に「込」と云ふ文字のあるのは絹物のポロ、木綿物のポロが込みとなつてゐると云ふ名稱なのである。

前の方で「地方赤ポロ」と云ふ項目中で、赤ポロの利用法を詳しくお話しして置いた處であるが、市中ポロと地方ポロとは、同じ赤ポロでも品質が違ふのである。東京市中から現はれるポロは、木綿物もあるが、多くは毛織物とか、或は絹物が混つてゐる。それに反して地方ポロになると、若干は毛織物、絹物が混合してゐるとは言ふやうなもの、分類の際に、毛織物は毛織物層として選出されて終つてゐて、單に赤ポロとして、屑物業者の手許に入つて來る時には、木綿の赤ポロだけになつて來てゐる。

木綿の赤ポロと、絹物混入の赤ポロと何れが好いか、と云ふにいざ利用と云ふ曉になると、純木綿物の方が好いのである。何故と云ふに純木綿物のみであれば、それを機械に掛けて、綿として終ふ。然る後に新たならしい綿を何割か加へて、足のある綿となし、そして細い糸とす

ば、再び立派な木綿糸となる。その上で織物を織らうとも勝手である。

それから新しい綿を加へずに、その綿から半綿式の紙を漉く、つまり呉服物の芯になつてゐる紙に漉くのである。斯様に木綿の赤ポロだけならば、その利用法は幾種にもなるが、絹物や毛織物（モスリン等）の赤ポロがそれに混入されてゐては、製綿する事が出来ない。して出來ぬ事もなからうが、純木綿物とちがふから、結局變なものが出來上つて終ふ。

それ故に斯くの如き混合赤ポロの用途は製紙原料以外には利用がない。その製紙原料と言つても、呉服の卷芯になるやうな立派なものにはならない。何れも西洋紙の原料である。が扱つて此赤ポロを製紙原料とする場合には、赤と云ふ色素を晒さねばならぬから、製紙原料とするに際しても、相當の手續を要する事となるから、あまり喜ばれぬ。

て地方赤ポロの好いものになると、一貫目が二十八九錢から、問屋の賣買相場がしてゐるのに、市中の赤ポロと來れば、稍々質が好くて十七八錢、甚だしいのになると、それ以下となつてゐる。尤も不純物をすっかり選り出して終へば、それは「上選赤ポロ」と言ふて、一貫目が三十五六錢にも高くなる。が僅かに一貫目について十六七錢の高値を呼ぶ爲めに、選分けする

事は、今日の如き勞働賃銀の高い時代には、決して經濟な方法ではない。それ故に市中赤ポロは消毒された儘、大ボロと小ボロとの分類が行はれて、直ぐ製紙工場廻はりと相場が定つてゐるのである。

第三十二節 新白メリヤス

新白メリヤス——とはメリヤス屑で、新しいもの、みの言葉で、前の方で「裏毛メリヤス」と云ふ處でお話したとは少しく品物が違ふ。前の方でお話したのは、メリヤスの襦袢とかズボン下、或は肌襦袢等の丸古物の事であるが、今お話しやうとして居るのは、此れは普通の家庭から出るものではなくつて、メリヤス工場から出て来る物で、メリヤスの斷ち落し、たとへば肌襦袢とか、或は寝衣を造つたと云ふ時に、襪屑が出る。此屑の事であつて、産業的廢物で、産出數量は可成りに多い。けれども利用としては、何分にも細かなもの、みであるから、前の方でお話したやうに、甲の筒を持つて來て、乙の古襦袢の袖にするなんて細工をする代物でない事は明かである。

で斯様なメリヤスの屑は何處に行くか、何れも三州岡崎へ行く、茲では例に依つて機械で綿にする。而して糸として再びメリヤスを織り出す。其他呉服物の卷芯となる紙に漉く事も出来るが、現在では芯紙とするよりは、岡崎に廻はして再度メリヤスの原料とした方が好いのである。の方に廻はされてゐる。問屋の相場は一貫目七十錢内外である。

第三十三節 上晒メリヤス屑

上晒メリヤス屑——此方は前者に比して品物が遙かに劣つて來る。前者は新しい純白なメリヤス屑であるけれども、此方は新らしくても、純白なものではなく、實は晒らしてあるから、稍や白いとは言ふが、雪のやうに白いのではない。

利用方法は前者同様、岡崎へ廻はつて綿となる。そして品質の著しく下等な物であれば、新しい綿を加へずに、呉服の卷芯の紙原料となるか、裏毛メリヤスを織る際の毛となるかである。随つて問屋相場も一貫目が四十五六錢で新白メリヤスよりは貫て、二十五六錢も安値である。

第二十四節 古棒ネル

一五六

古棒ネル——とは、軍隊用の襯衣の古物の事で、兵卒が長袖のネルの襯衣、又はズボン下を穿いてゐる。あの襯衣、又はズボン下に、縦なり、横なりの棒編がある。それが最近流行の柄ではなくなつて、明治二十七八年頃のものでも、大正十一年のものでも、千變一律少しも柄が變はつてゐない。

而もその柄は全國二十箇師團の兵卒が、殆んど同様の柄のネル襯衣、ズボン下を着てゐるのだ。その柄が棒編なるが故に、此屑物業者の通用語として『棒ネル』と言つてゐるのだ。その『棒ネル』の古と云ふのが『古棒ネル』なのである。

此『古棒ネル』は可成りの數量がある。軍隊生活をして来た方なれば、事新らしく私の説明に俟つまでもなく百も承知して居られる事であるが、軍隊では此襯衣なりズボン下なりを、出来るだけ大切に着る様に命じられてゐる。又兵卒その者も及ぶだけ切らない様にしてゐると云ふのは新らしく支給されるのは、年に二回である。が新しい物は平常矢鱈には着ない。

軍隊では衣類に對して、第一装用から第三装用までに區分されてゐて、第一装用は戦時用となつてゐる。で平常では夜中等の不時呼集の際に着用する位で、新しい儘で保存して置く。第二装用は平常着て、演習などの際皆是れて濟ませるのだ。日曜日とか祭日の外出時には、第二装用を着る事となつてゐる。

斯様に衣類に對しては、大事を取つて居るが、さてその破損は凄間敷いものがある。と云ふのは軍隊では毎土曜日の午後から、清潔検査が行はれる。それは兵舎全體の清潔検査であるが、何處の聯隊でもその清潔検査に伴ふて、武器被服の検査を行ふ。此際に衣類が破損して居たり、汚れていたりすると、大目玉を頂戴せねばならぬ。破損の場合はおぼつかない手付きで、自分で繕つて置くから、それで好いが、汚れてゐやうものなら、それこそ大變だ、嚴しい軍隊へ行くと、陛下から支給されてゐる物品を、斯様に粗末に取り扱ふて不敬に亘るとあつて、翌日の日曜日は、一日外出も出來ず、悠くり洗濯で、日を送らなければならぬやうな事になるのである。

それが嫌さに誰も手の皮の剥ける程、ゴシ／＼と洗濯する。元來軍隊では洗濯板と云ふもの

一五七

がない。それ故に手でゴシ／＼やるのだが、實用本位の品物だけに、汚れの落ちぬ中に、多くの場合手の皮が先きに剝けて終ふ。で軍隊では洗濯用のブラシを各自に渡してある。先づブラシで汚れの落ちるまでゴシ／＼やるのだから、如何なる丈夫な生地でも、四五回も洗濯されると、大抵生地が弱つて終ふ。又兵卒の方でも實は生地のコハばつたものよりは、少し生地の弱りかけたものゝ方が着心地が好いものと、洗濯の場合に樂なもので、新しい中の洗濯は、汚れを落とすと云ふよりは、生地弱らせの洗濯を行ふのである。斯慶工合で軍隊の所謂「棒ネル」なるものが、屑物業者の手に拂ひ下げられる時には、生地はすっかり疲労しきつてゐる。

故に此「古棒ネル」は利用の範圍が比較的尠少なのである。今少しく生地が丈夫であれば、縞柄が殆んど何れも同じなのであるからして、甲の胸へ乙の袖、又は甲の右脚に對して、左脚片一方を附けて、労働者街の露店賣等の再製品になるのであるが、残念ながら左様な品物になるやうなものであると、兵卒が軍隊で利用して、それ／＼に着て終つてゐるから、實際廢物となつて現はれて來る時には、何うにも仕様のないものとなつてゐる。

されば雑巾にして出來ぬ事もない、がさふして手数をかけたゞけの手間賃が上つて來ない。

軍隊の床洗ひ、軍艦の甲板洗ひ用としての雑巾、銀行會社、官衙等でも使用してゐる、長い竹柄の附いた雑巾、即ち這り拭き雑巾とする位の事で、その他は三州岡崎に廻はして、綿とするより仕方がない。

此場合の綿は一般家庭から出て來る、古ネルと品質が著しく違つてゐるだけに、新しい綿を入れて、再度ネルを織ると云ふやうな事は出來ない。それ故に製紙工場に廻はして、呉服物の卷芯紙となるの程度である。

第二十五節 新棒ネル

新棒ネル——是も普通の家庭から出るものではない。前にお話した軍隊の襯衣、ズボン下の裁縫の時に出る截ち落しの事で、古棒ネルが襯衣なり、スボンなりの形をしてゐるのであるから、新棒ネルは、その新しいものかと云ふに、さうでなく、實は切落し屑の事で、新しい襯衣とかズボン下が、屑屋の手にあらう筈がない。此廢物の出處は、陸軍の被服廠から出るもので、可成り大きな切れが出て來る。それは職工が義務的に、何等の經濟觀念もなく、仕事

の仕好い様に截断する關係からである。

随つて利用法は前者よりは稍や意義がある。前者同様三州岡崎廻しとされるのであるが、前者は製綿されて、呉服の卷芯位の事か、乃至は雑巾になるのに對して、此方は製綿されて絲になり、再びネルを織り出す原料となつてゐる。時に製紙原料ともなるが、それ等は極めて微々たる數量に過ぎない。

されば前者即ち『古棒ネル』は一貫目二十五錢内外であるに對して、後者の『新棒ネル』は、三十二三錢で、一貫目で七八錢の値開きがある。

第三十六節 ・ モ ス リ ン

モスリン——の屑で、新たらしい立ち落しも、又古い襪襦も混つてゐるもので、随つて色合等も千差萬別である事言ふまでもない。

皆な三州岡崎に行く、而して反毛機にかけられて、以前の毛に解かれて終ふ。それに原毛を少し加へて、毛絲を作る、再びモスリンとして、新らしい物と何等遜色のないモスリンとなつ

て、新らしい物と市場に價格を争ふ事となるのだが、純新らしいものと違つて、此方は黒色のモスリン、又は黒色の勝つたモスリンの材料となるのである。以前はモスリン物はあまり屑として出ても、産業的に利用する程の量には稍々心細かつたものだが、茲五六年以降モスリン物の流行は著しくなつて、以前に子供の着用か、自モスとして女の着物の裏になる位の範圍の頃から比較したならば、實に驚くばかりの數量に昇つたのである。

今では女の着物から更らに進んで男の着物にまで、縮柄が變つて來たのと、銘仙物よりは價格の安いのと、それに丈夫と云ふので、モスリンの需要は日に次で増して行くのみであると同時に、モスリンそのものも、益々その需要を擴大せしめるべく、縮柄が、以前の友仙式から脱して、お召柄になり、お召の需要までも經濟的に驅逐せんの勢であるから、モスリンの襪襦等は絶大なるものがある。一貫目二十五錢からである。

第三十七節 編 毛 糸

編毛絲——毛絲で編んだものが、一度破損したとなつたら、素人の手には仕うにも仕様のない

ものである。是は僅かの破損の爲めに、廢物として屑屋の手に賣り拂はれるものが多い。斯様なものは何れも家庭からのみ出るものであつて、却々の數量がある。問屋では一貫目二圓三十三錢前後であつて、再製原料となつてゐるのだ。

誰人も御承知の如く毛絲細工品は、織つたものではなく、編んだものであるから、編み出しの一方か、又は編み終りの一方、何れかを解きさへすれば、子供でも解く事が出来る品物である。それ故に毛絲の編物の廢物は、何れも女工の手にかけて解いて終ふ。一貫目の解き賃が今日に如く、手間の高い時であるから、三圓内外からしてゐるが、それでもそれだけの手間を拂つても、結構再製品として、出すときには、相當の利益があるのである。

解き上つたものを如何にするか、破損した個處の附近の編目の關係上、五寸とか六寸、又は一尺二尺と云ふやうな短かいものもあるけれど、完全な處のものなれば、相當に長い毛絲となつてゐる。

其處で新しい反物に湯通しをするやうに、古毛絲に湯通しを施して終ふ。すると長い間編み込まれて、結んでゐた癖が、湯氣でむされて来る。そのむされた處を利用して、絲卷に巻き

つける。もとの癖がきれいに直つて終ふのみならず、編み込まれて細くなつてゐた處までが、平均にふくれて来る。

つまり女の頭髮の癖毛が、熱い湯で幾分癖が直つて来るのと理屈は同一なのである。斯様にして癖を直された毛絲は何に使用するかと云ふに、更らに新しい毛絲の編み物細工として、世の中に見ゆるのだから、呆れる。尤も中には多少色の褪せたものもあるが、それ等は色上げさへすれば、新しいもの同様になる。が實質の上では多少の弱いのは免れない事だけは言ふまでもない。

先づ利用された品物を擧げてみるに、子供の小さな襟巻、手袋、赤ん坊の毛絲製のジャケットとなるのだ。斯様にする時には、堂々たる店舗のショーウィンドの中に飾りつけて置いたとて、誰が古毛絲の化物と思ふぞ。

處が前にも述べたやうに毛絲の編み物にならぬやうな短い物になると、それを繼ぐと云ふやうな事は出来ない。如何に廢物利用が、巧妙に、世人の眼を瞞着して行はれてゐるからとて、それはなし得ぬ處である。然らば左様な短い毛絲の屑は捨て、終ふのか——否捨てた物から金

を産ませやうとするのが、今日の廢物利用である以上、如何なるものと雖、使用の出来ないものはない。唯だその利用が、その物自體の性質を失ふて現はれるか、失はずに利用されてゐるかとは分れるのみである。

短い毛絲の利用先きはモシヤとなつて相當需要がある、モシヤではお分りにならないであらう。モシヤとは前の方で『糊なし源平絲』の項目中でお話をした筈の、鐵道車輛に平均して油をくれる爲めに、油壺の中へ源平糸を入れて、注油の平均を保つ——とお話したが、此油壺の中に入る絲の事をモシヤと言つてゐるのである。

けれども木綿絲のモシヤは値段が安い、毛絲のモシヤは却々値段が高い。今問屋相場を見るに、糊なし上等源平絲が一貫目六十錢内外なのに、毛絲のモシヤになると、一貫目が八圓前後となる。約十二倍からの高價となるのだ。それでは誰が毛絲のモシヤを使用するものか——と考へられるのだが、扱而處變はれば品變はるとやら、處が變はると、木綿絲のモシヤでは間に合はず、譬へ一貫目八圓しても、毛絲のモシヤを使用しなければならぬのである。

それは何處か、即ち南滿洲鐵道で、御承知の通り南滿鐵道、即ち東清鐵道は、驛と驛との間

が甚だ遠距離である。内地では長くて十哩と云ふ驛間の處はないと言つても好い位に短距離だ。東清鐵道とても十哩位の處もあるし、又それ以下の處もないではないが、何分にも大きな停車場と言へば、百哩以上からでないといふ。それに反して内地は東京を出發して廿哩も行けば、横濱があると云ふ風に相當時間停車する驛は、チョイ／＼あるが、東清にはそれが無い。そのために車輛のシャフトに油をくれる油壺の交換が出来ない——内地のつもりでやつては——でなくとも百哩から走つた曉でなければ、油壺の交換が出来ないから、それだけの長距離を走つても差支なく、油が平均してシャフトに注がれるものでなければならぬ事は略ぼお分りであらう。

内地鐵道のやうに短距離で油壺の交換が思ふに任せられぬ處では、内地式はいけない事は分つてゐるから、其處で、内地では糊なしの源平絲の屑を以て、注油の平均を保つてゐても、滿洲では毛絲のモシヤでなければシャフトが焼け切れて終ふ。

毛絲は御承知の通り油の含み方が違ふ、木綿絲では表面に吸つてゐても、内部までは却々滲まぬ。その實例は木綿物を洗濯して、五時間で乾燥して終ふのが、毛織物の場合ではその倍以

上の時間が要る事は、普通讀者諸氏が家庭にあつて洗濯物で實驗されてゐる事と思ふ。それ丈に毛糸の方は油を含んでゐる程度がよい。長いあひだシャフトに向つて油を差す事も、木綿物よりは平均してゐるし、長時間注油し得るのだ。

右様の使用のために、毛糸の短いものがモシヤとなつて、關東方面の屑屋の手から、南滿洲鐵道へ納入される數量が、驚く勿れ、一箇年十萬貫以上に達してゐる。是は一つに箱根を堺にして以北から出る毛糸の屑ばかりであるから、此他に關西方面の屑物業者の手から、南滿洲鐵道會社に納入される量又決して尠なしとは言はれぬのである。假りに關東、關西を同數量と見る時には、一箇年滿鐵の毛糸モシヤの使用量は、實に二十萬貫の多きに達してゐるのだ。而も東京に於ける問屋賣買が一貫目八圓前後であるから、滿鐵へ納入の際は八圓五十錢から九圓の相場となつてゐる。

今一貫目滿鐵が買値の九圓として一箇年二十萬貫使用するとして、その價格は實に、百六十六萬圓と云ふ大價格となつてゐるのだ。それに運賃を加へる時には、二百萬圓近くのモシヤ代を、滿鐵は世人の知らぬ間に車輛のシャフトの爲めに費してゐるのである。斯う物事が明かになる

と毛糸屑、又必ずしも馬鹿にしたものでない事が分るであらう。

第三十八節 純セル絲

純セル絲——とは家庭から出るものではなくて、セルを織つてゐる工場から出るもので、セルを織る時の絲屑又は織端の絲屑の謂である。而して純セルの絲屑でなければならぬもので、産出地は名古屋地方が主で、時には伊勢崎方面から若干は出るけれども、伊勢崎方面から出るセル絲の屑の中には、純セル絲の屑ばかりではなくて、多少綿セルの絲屑が混入されてゐる。前の方でお話したと思ふが、木綿切れの廢物利用として、三州岡崎地方で、綿として、それで綿セルを織る際に原毛と混入して、即ち綿セル絲を撚るのである。その綿セル絲が少しでも混つては、利用の際に困る。處が伊勢崎地方から來る『純セル絲屑』と稱するものの中には、往々に右様の綿セル絲の屑がある。

利用の方法は、前の方でお話した『モスリン』と同様である。つまり三州岡崎地方に送られて、此地で機械にかけて、以前の毛にして終ふ。毛と言つても、綿同様のものであつて、それ

に新しい毛、即ち原毛を若干量を加へて、毛絲の細いものに撚るのである。斯くすれば再度セルが織り出される事となるのだ。勿論セル絲の屑と云ふからには、純白なものもあるし、又は赤、紫、藍と云ふ風に、種々雑多の色のある事は言ふまでもない話であるから、斯様なものを一々純白なものにと、漂白してゐては可くない。

それ故に總て黒色のものとなるのである。著しく品質の劣つたものになれば、毛綿として、羅紗を織る時にそれを織絲の表面に撒布して、織り上げられた羅紗の表面の暖かさうな毛として終ふ。

それから又上等毛布の織り込みにも使用して、毛布の表面のふくゆかな毛を更に潤澤にする場合もある。何れにしてもその品質の如何に依りて、甲乙の利用が、變化されるものと思ふたら好しいのである。

第三十九節 薄セル

薄セル——とは薄手の上等セルの襪の事である。セルは薄い物程、品質が良好なのである。

私共はセルに限らず、總ての反物を買ふ場合に、先づ生地の善惡を云々するが例であるけれど、實はその善惡の觀別方法さへ知らずに、單に常識的に斷定するに過ぎないのである。

一例を示せば銘仙を買ふにも、お召を買ふにしても、最初に生地が薄いと、是は『生地が悪い』と言ふし、稍や厚手なものを、出されると『此品物は生地が悪いから』と言ふが、實は薄いから生地が悪い、生地が好いから厚手だなどとは相場は極つてゐない。

その織物に使用されてゐる絲の善惡を觀別するのでないから、單に厚い薄いだけでは實際の善惡が分らう筈がないのだ。一般に呉服物は糊氣を去れば、何れも薄手となつて、俗に言ふべし、糊氣となつて終ふ。それに反して糊氣が強ければ、厚手となつて、素人の手觸りには品質が好いやうに思はれるのである。

けれどもそれは大なる誤りであつて、生地の悪いもの程糊氣を強くして、素人眼を糊麻化するのである。糊氣のないものとなれば、所謂生地その物が表はれてゐるのだから、善惡は誰にも分るのだ。それ故に織元の方では糊なしで市場に出す時には、生地を自慢の意味で出すのである。又生地その儘で出す事が出来ぬやうなものになると、即ち糊をつよくする。その上にロー